

青森県埋蔵文化財調査報告書 第303集

# 安田(2)遺跡Ⅱ

—東北縦貫自動車道八戸線(青森～青森)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2001年3月

青森県教育委員会



青森県埋蔵文化財調査報告書 第303集

# 安田(2)遺跡Ⅱ

—東北縦貫自動車道八戸線(青森～青森)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2001年3月

青森県教育委員会







安田(2)道跡 (西から)



A 区 全 景





第1号鉄関連遺構（北から）



第1号鉄関連遺構鍛冶炉（東から）



第2号鉄関連遺構鍛冶炉（北から）



第2号鉄関連遺構（西から）



## 序

青森平野周辺の丘陵地には、縄文時代や平安時代の遺跡が数多く分布しています。とくに安田(2)遺跡周辺には国の特別史跡三内丸山遺跡、三内丸山(6)遺跡、栄山遺跡などが隣接し、遺跡が密に所在しています。この遺跡の一部が東北縦貫自動車道八戸線(青森～青森)の建設予定地となったため当センターで平成9年度・平成11年度・平成12年度にわたり発掘調査いたしました。

本報告書は、安田(2)遺跡の平成11年度発掘調査の結果をまとめたものです。この調査により当遺跡は、縄文時代と弥生時代・平安時代の複合遺跡であることがわかりました。とくに平安時代の住居跡が多く発見され、これらのなかには、鉄関連の遺構もありました。

本州北部の古代集落についての研究は一步一步進んでおりますが、この発掘調査の成果もこのような研究や文化財活用に寄与することができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、この発掘調査並びに報告書作成にあたり、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に対しましてお礼申し上げます。

平成13年3月

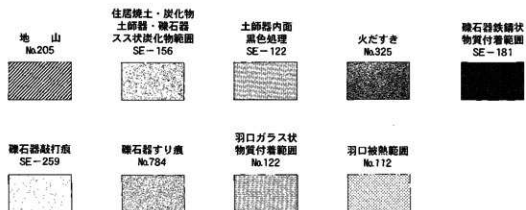
青森県埋蔵文化財調査センター  
所長 中島 邦夫

## 例 言

- 1 本報告書は、青森県教育委員会が平成11年度に実施した東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う安田(2)遺跡の発掘調査報告書Ⅱである。
- 2 本遺跡は、平成10年に青森県教育委員会が編集作成した『青森県遺跡地図』に、遺跡番号01-016として登録されている。
- 3 本遺跡の発掘調査は、平成9年度、平成11年度、平成12年度の三カ年にわたって実施されているが、本書は平成11年度の調査成果をまとめたものである。なお、平成9年度調査成果は平成11年3月に刊行されており（第255集）、平成12年度の調査成果は来年度に刊行予定である。
- 4 本書ではおもに検出遺構と遺構から出土した遺物及び遺構外から出土した縄文時代の石器について記述したものである。遺構外や平安時代の住居跡から出土した縄文・弥生時代の土器や土製品及び自然科学的分析や調査の成果等については、平成12年度の調査成果とあわせて、来年度刊行予定の報告書に掲載する。
- 5 本報告書は、畠山 昇が執筆、編集作成した。
- 6 本報告書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、国土地理院発行の二万五千分の一地形図「青森西部」を複写して使用した。
- 7 出土遺物の鑑定・分析については、次の方々と機関に依頼した（順不同、敬称略）。
  - 石器の石質鑑定 松山 力（八戸市文化財審議委員）
  - 山口 義伸（青森県環境生活部県史編纂室総括主幹）
  - 炭化種子の鑑定（古代の森研究会）（来年度報告予定）
  - 炭化材の鑑定（木工舎「ゆい」）（来年度報告予定）
  - 放射性炭素年代測定（地球科学研究所）（来年度報告予定）
- 8 出土遺物のうち剥片石器の実測・トレース図の作成は、株式会社シン技術コンサルに委託した。また、遺物の写真はシルバーフォット及びフォットスタジオらに依頼した。
- 9 遺構・遺物の文・図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。
  - (1)本報告書に掲載した挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付した。また、挿図に付した北の方位は座標北であり、住居跡の主軸方位はこれを基準として計測した。
  - (2)遺構内外堆積土の注記には、「新版標準土色帖」(小山正忠、竹原秀雄；1996)を用いた。
  - (3)遺物には観察表・計測値を巻末に付した。計測値の単位はcm、重量はgである。
  - (4)遺物写真の縮尺は統一していない。また、遺物に付した番号は挿図番号のものと一致する。
  - (5)図中で使用したスクリーン表示は次頁のとおりである。
- 10 発掘調査における出土遺物、実測図、写真などは、現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 発掘調査及び本報告書の作成にあたっては、下記の方々からご協力を得た（敬称略、順不同）。  
稲野 裕介、岩見 和泰、宇部 則保、菊地 逸夫、北林 八洲晴、桜田 隆、鈴鹿 良一、瀬川 滋、高木 晃、高橋 潤、高橋 与右衛門、高橋 文明、田中 寿明、長尾 正義、羽柴 直人、

古屋敷 則男、本堂 寿一、室野 秀文、村田 晃一、八木 光則

図中で使用したスクリーントーンを表示



# 目 次

序  
例言  
目次

第1章 発掘調査の概要	1
第1節 調査要項	1
第2節 調査方法	1
第3節 調査の経過	2
第4節 調査の概要	3
第5節 遺跡の基本層序	7
第2章 検出遺構と出土遺物	8
第1節 竪穴住居跡	8
1 縄文時代の住居跡	8
2 平安時代の住居跡	19
第2節 鉄関連遺構	96
第3節 掘立柱建物跡	112
第4節 土 坑	114
第5節 溝状土坑	120
第6節 焼土遺構	121
第3章 遺構外出土石器	126
第1節 A区出土の石器	127
第2節 B区出土の石器	127
第4章 まとめ	134
遺物観察表	135
写真図版	153
報告書抄録	194



# 図 版 目 次

図1	遺跡位置図	0	図49	第16号住居跡4	67
図2	安田(2)遺跡調査区域図	4	図50	第16号住居跡5	68
図3	安田(2)遺跡遺構配置図	5	図51	第16号住居跡6	69
図4	遺跡の基本順序	7	図52	第17号住居跡1	71
図5	第20号住居跡と第26号住居跡	9	図53	第17号住居跡2	72
図6	第26号住居跡遺物出土状況、出土遺物	11	図54	第17号住居跡3	73
図7	第26号住居跡出土遺物2	12	図55	第17号住居跡4	74
図8	第26号住居跡出土遺物3(1号集積)	13	図56	第18号住居跡1	76
図9	第26号住居跡出土遺物4(1号集積)	14	図57	第18号住居跡2	77
図10	第26号住居跡出土遺物5(1号集積)	15	図58	第18号住居跡3	78
図11	第26号住居跡出土遺物6(1号集積)	16	図59	第19号住居跡1	80
図12	第26号住居跡出土遺物7(2号集積)	17	図60	第19号住居跡2	81
図13	第26号住居跡出土遺物8(2号集積)	18	図61	第21号住居跡1	83
図14	第2号住居跡1(1号カマド)	20	図62	第21号住居跡2	84
図15	第2号住居跡2	21	図63	第22号住居跡1	85
図16	第2号住居跡3	22	図64	第22号住居跡2	86
図17	第2号住居跡4	23	図65	第23号住居跡1	88
図18	第2号住居跡5	24	図66	第23号住居跡2	89
図19	第2号住居跡6	25	図67	第23号住居跡3	90
図20	第3号住居跡1	27	図68	第24号住居跡	91
図21	第3号住居跡2	28	図69	第25号住居跡1	93
図22	第4号住居跡1	29	図70	第25号住居跡2	94
図23	第4号住居跡2	30	図71	第25号住居跡3	95
図24	第5号住居跡	32	図72	第1号鉄関連遺構1(住居跡の変遷)	99
図25	第7号住居跡1	34	図73	第1号鉄関連遺構2(最終段階)	100
図26	第7号住居跡2	35	図74	第1号鉄関連遺構3(床面を削いだ段階)	101
図27	第7号住居跡3	36	図75	第1号鉄関連遺構4(新旧のカマド)	102
図28	第8号住居跡	37	図76	第1号鉄関連遺構5(鍛冶炉と出土遺物)	103
図29	第9号住居跡1	39	図77	第1号鉄関連遺構6(出土遺物)	104
図30	第9号住居跡2	40	図78	第1号鉄関連遺構7(出土遺物)	105
図31	第11号住居跡1	42	図79	第1号鉄関連遺構8(出土遺物、遺物の出土状況)	106
図32	第11号住居跡2	43	図80	第2号鉄関連遺構1	108
図33	第11号住居跡3	44	図81	第2号鉄関連遺構2	109
図34	第12号住居跡1	47	図82	第2号鉄関連遺構3	110
図35	第12号住居跡2	48	図83	第2号鉄関連遺構4	111
図36	第12号住居跡3	49	図84	第2号掘立柱建物跡	112
図37	第12号住居跡4	50	図85	第1号掘立柱建物跡	113
図38	第12号住居跡5	51	図86	土坑1(第2~5号土坑)	122
図39	第12号住居跡6	52	図87	土坑2(第6~第12号土坑)	123
図40	第13号住居跡1	54	図88	土坑3(第13~第19号、21号土坑)	124
図41	第13号住居跡2	55	図89	土坑4(第20号、22号、23号)、溝状土坑、坩土遺構	125
図42	第14号住居跡1	57	図90	遺構外出土石器1(A区)	129
図43	第14号住居跡2	58	図91	遺構外出土石器2(A区)	130
図44	第15号住居跡1	60	図92	遺構外出土石器3(B区)	131
図45	第15号住居跡2	61	図93	遺構外出土石器4(B区)	132
図46	第16号住居跡1	64	図94	遺構外出土石器5(B区)	133
図47	第16号住居跡2	65			
図48	第16号住居跡3	66			



図1 遺跡位置図

## 第1章 発掘調査の概要

### 第1節 調査要項

#### 1 調査目的

東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する青森市安田(2)遺跡の発掘調査を実施し、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

- 2 発掘調査期間 平成11年4月20日から同年10月29日まで
- 3 遺跡名及び所在地 安田(2)遺跡（青森県遺跡台帳番号 01-016）  
青森市大字安田字近野1-15、外
- 4 調査面積 20,000平方メートル
- 5 調査委託者 日本道路公団東北支社青森工事事務所
- 6 調査受託者 青森県教育委員会
- 7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター
- 8 調査協力機関 青森市教育委員会

#### 9 調査体制

調査指導員	村越 潔	青森大学教授（考古学）
調査協力員	池田 敬	青森市教育委員会教育長
調査員	遠藤 正夫	青森市教育委員会埋蔵文化財対策室長（考古学）
	山口 義伸	青森県環境生活部県史編纂室総括主幹（地質学）
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所長	中島 邦夫
	次長・調査第一課長	成田 誠治
	総務課長	成田 孝夫（現、工業振興課課長補佐）
	文化財保護主幹	畠山 昇
	調査補助員	永洞佐哉子、本荘瑞穂、佐藤 淑、大石悠治

### 第2節 調査方法

グリッドの設定は、平成9年度調査で設定したグリッドを継続して使用した。すなわち、国土座標  $X=88,220$ 、 $Y=-10,330$ の軸を基点に4mごとにグリッドを設定し、X軸は南から北方向へローマ数字とアルファベットA～Yの組み合わせを、Y軸は東から西方向へ算用数字で表示している。ただし、X軸に使用したローマ数字は100mごとに繰り上がることにしたのでI A～I Yの次がII Aとなる。なお、グリッドの呼称は、軸線の南東隅の交点を用いている。

今回の調査区域は、平成9年度の調査区域の南側全域が対象となっており、おおむねX軸がI D～III A、Y軸が15～150までの範囲が該当している。なお、標高原点は調査区域内に設置された基準坑から、適宜レベル移動を行って設置した。

遺構の調査は二分法及び四分法で行い、遺構の実測は遣り方測量によった。縮尺は1/20を基本とし、必要に応じて1/10とした。

遺構番号は、遺構の種類に応じた仮の表記を用い、確認した順に番号を付した。遺構に用いた仮の表記は、竪穴住居跡：SⅠ、掘立柱建物跡：SB、土坑：SK、溝状土坑：SV、焼土遺構：SN等であるが、調査の進展によって、遺構の種類や番号に欠番が生じたものがある。

遺物の取り上げはグリッドごと、層位ごと一括して取り上げたが、必要に応じて1/10及び1/2の縮尺で記録してから取り上げたものもある。

土層の名称は、表土から下位にローマ数字を付し、細分される場合は小文字のアルファベットを用いた。遺構内の堆積土については、上位から下位に算用数字を付した。なお、基本土層については平成9年度調査の山口調査員による観察に準じている。

写真撮影は35mmの一眼レフカメラを用いて遺構の堆積状況、遺物の出土状況、完掘状況等を中心に撮影し、その他必要に応じて基本土層や調査状況などについても記録した。フィルムはモノクロネガとカラーリバーサル及びカラーネガを使用した。また、必要に応じてインスタントカメラも使用した。

なお、調査対象区域が広大なため、70ラインから西側の区域をA区、東側をB区として調査した。

### 第3節 調査の経過

4月20日、調査器材運搬後、環境整備と粗掘りに入る。まず、最初にA区の削平されていると思われる区域に調査の手を入れる。

4月下旬、グリッド杭の設置、レベル原点の設置等の作業を並行しながら、粗掘りの続行。削平されていると思われる区域は、ごく少量の遺物が出土しただけで、遺構は全く検出されなかった。この区域を廃土置き場として利用することにし、畑地となってる場所の粗掘りに入る。

5月、住居跡や土坑などの遺構が多数検出され始めたため、遺構の調査に入る。中旬に、文化課、原因者を交えた会議で、未買収地の説明を受ける。6月～8月には、買収が終了して調査できる区域が増えるとのことであった。

6月、調査中の2軒の住居跡から鍛冶炉が検出され、鉄生産に関わる遺跡であることがわかってくる。

7月、B区の調査に入る。試掘先行の調査を主体に行ったが、おおむね35～75ラインで囲まれた区域では、時期不明の焼土遺構が1基と土器の細片が数点出土しただけであったため、住居跡が検出された東端の区域の調査に主力を注ぐ。ここでは、縄文時代の住居跡2軒と同時代の遺物が多数出土したほか、平安時代の土坑が1基発見された。

8月、再びA区の調査に入る。中旬には、未買収の土地の問題もほとんど解決したため、この区域の調査にも着手する。

9月25日、隣接する三内丸山(6)遺跡と合同で、現地見学会を開催する。台風が通過中という悪天候であった。見学者は約40名。

10月下旬、ラジコンヘリによる遺跡全体の空中撮影を行う。

10月29日、調査器材を越冬プレハブに収納し、今年度の調査を終了する。

## 第4節 調査の概要

本遺跡は青森平野を望む西側の丘陵に位置し、北側には国道7号線バイパスが走っている。調査区域は、国道7号線バイパスに沿った南北60～90m、東西570mの広大な面積が対象であり、標高24～65mと40m以上の高低差のある区域である。丘陵頂部は、標高65m前後の平坦面が広がっていて、青森市街地や東岳を一望できる見晴らしの良い場所である（A区）。この台地の東西は急斜面となっていて、西側には三内丸山(6)遺跡が隣接している。東側は標高24～30mの緩傾斜地へ続いており、東端には小さな沼が存在している。かつて安田水天宮(2)遺跡（平成9年、本遺跡に統合された）として登録されていた場所はこの緩傾斜地と見られる（B区）。また、この沼の対岸－東側には柴山(3)遺跡が所在し、平成11年に調査されている（今年度刊行）。

本遺跡については、平成9年度に南北40～50m、東西579m、面積23,600㎡の区域が発掘調査され、縄文時代（前期～晩期）、弥生時代及び平安時代の複合遺跡であることが判明している。検出遺構には、縄文時代中期の竪穴住居跡と平安時代の竪穴住居跡、土坑2基、溝状土坑1基、焼土遺構1基、土器埋設遺構1基がある。また、出土遺物は縄文時代前期から晩期、弥生時代、平安時代の土器が段ボール箱で13箱分である。このうち、多数を占めるのは縄文時代中期の遺物で、次に弥生時代の遺物が多い。

平成11年度の発掘調査は、平成9年度調査区域の南側の23,000㎡の区域が調査対象区域となり、このうち20,000㎡を終了した。調査した遺構は、竪穴住居跡25軒（縄文時代2軒、平安時代23軒；鉄関連遺構含む）、掘立柱建物跡2棟、土坑22基、溝状土坑1基、焼土遺構3基である。A区では平安時代の集落が広がっており、B区東側の標高24～30mの緩傾斜地では、縄文時代の集落が検出された。出土遺物は、縄文時代のもので段ボール箱で6箱分、平安時代のもので54箱分出土した。縄文時代の遺物は調査区域の全域から出土した。特に、B区東側からの出土が多い。弥生時代の遺物は、調査区の全域において少量の土器片が出土しただけである。平安時代の遺物は、大部分が住居跡内から出土したもので、土師器や須恵器を中心に、鉄器（刀子、鉄斧、棒状鉄器など）、石器（敲石、砥石）、鉄滓、土製品（土玉、土製紡錘車、羽口など）などがある。

なお、残りの3,000㎡については、平成12年度に調査が行われている。

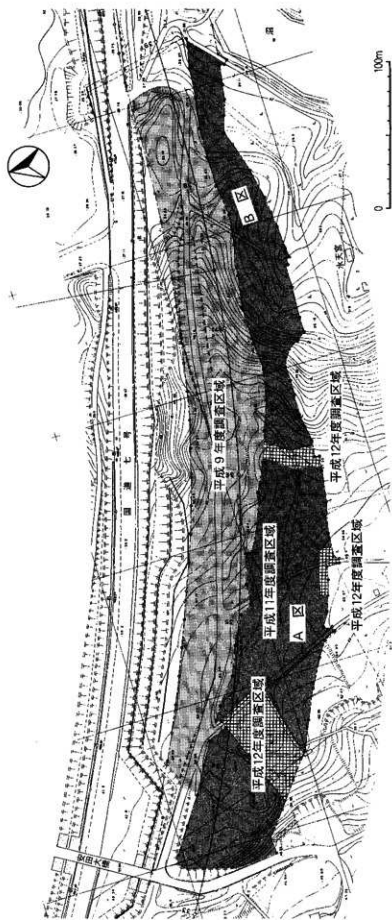


图2 安田(2)遺跡調査区域图



## 第5節 遺跡の基本層序

平成9年度調査に準拠した。また、層序の詳細は来年度報告に地形・地質とあわせて掲載予定であるため、本節では簡単な記載にとどめる。

第I層 黒色腐食質土 (10YR2/1) 表土

第II層 黒褐色土 (10YR2/3) 多少の堅さ、縮まりがある。軽石粒・ローム粒の混入が多少見られる。また、本層中に白頭山火山灰 (B-Tm) の混入が認められる。

第III a層 黒色腐食質土 (10YR1.7/1) 粘性・縮まりあり。乾くと、小さなクラックの発達が認められる。

第III b層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 丘陵地内の浸食再堆積土。全体にローム質で、乾くと小さく格子状に割れやすい。

第IV層 暗褐色土 (10YR3/4) 漸移層。堅く、締まっている。軽石粒・ローム粒の混入が多い。上半部は粒子状の混入が目立ち、全体的に色調が暗い (IV a層)。下半部はブロック状の混入が目立ち、明るい色調である (IV b層)。

第V層 明黄褐色軽石層 (10YR6/8) 千曳浮石相当層。緻密で堅固である。上半部は黄褐色を呈し、軽石粒 (径10mm以下) を含む細粒軽石質火山灰であるが、斜面付近は丘陵地内の浸食再堆積により、ややローム質である。下半部は灰黄褐色を呈し、軽石 (径10mm以下) が多少混入するラビリ質軽石層である。

第VI層 灰黄褐色土 (10YR6/2) 粘土質で、緻密。暗色帯を呈する。

第VII層 明褐色土 (7.5YR4/3) 粘土質。堅く、締まっている。

第VIII層 褐色土 (7.5YR4/3) 暗褐色の粘土粒混入。堅く、締まっている。

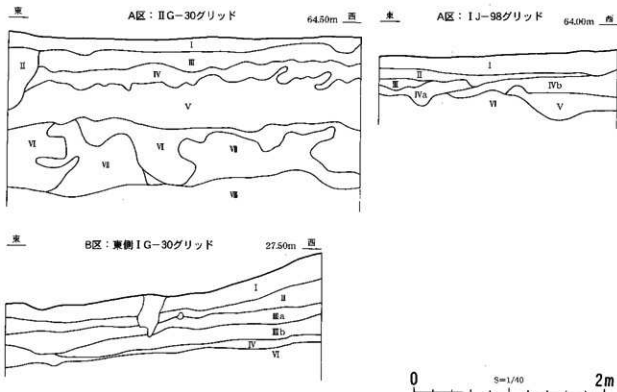


図4 遺跡の基本層序



## 第2章 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、竪穴住居跡25軒（縄文時代2軒、平安時代23軒）、掘立柱建物跡2棟、土坑22基、溝状土坑1基、焼土遺構3基を検出した。なお、平安時代の住居跡のうち鉄生産に関連するものは「鉄関連遺構」として記述する。

### 第1節 竪穴住居跡

#### 1 縄文時代の住居跡

B区東側で2軒の住居跡を検出した。

#### 第20号住居跡（SI-20）（図5上）

〔位置〕 I G・H-25グリッドの緩斜面上に位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸3.53m、長軸3.70mのほぼ円形を呈している。床面積は7.93㎡である。

〔壁・床面〕 壁はやや急な立ち上がりを呈している。壁高は南側が16～21cm、北側が30～40cmで、北側が高い。床面はほぼ平坦であるが、南東側がやや低くなっている。

〔炉〕 検出できなかった。

〔壁溝〕 検出できなかった。

〔柱穴・ビット〕 3個のビットを検出したが、柱穴配置は不明である。また、壁と重複して検出したビット1は、本住居に伴うかどうか不明である。

〔堆積土〕 2層に分層できた。締めりのない黒褐色土が堆積している。

〔出土遺物〕 堆積土上部から、縄文時代中期、後期の土器破片10点と平安時代の土師器の小破片4点、床面直上から縄文時代中期中葉・後期前葉の土器破片4点が出土した。

〔小結〕 本住居からは平安時代の土器片が出土しているが、おそらく流れ込みであろう。時期決定の決め手となる遺物はないため、構築時期は不明であるが、床面直上の遺物からは縄文時代後期前葉の可能性が考えられる。

#### 第26号住居跡（SN-03）（図5下～図13）

〔位置〕 I I-34・35グリッドの緩斜面上に位置している。粗掘りの段階で、焼土（炉）を確認したため焼土遺構として調査したが、後に住居と判明した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 全体を検出できなかったが、径5m前後の円形か楕円形を呈すると思われる。

〔壁・床面〕 壁・床面ともに半分くらいしか確認できなかった。確認できた部分では、壁高は12cmで、急な立ち上がりを呈する。床面は平坦であるが、斜面下方の東側へいくぶん傾斜している。

〔炉〕 短軸30cm、長軸46cmの不整楕円形の地床炉である。

〔石器集積跡〕 2ヶ所検出した。1号集積では59点の剥片石器が、2号集積では32点の剥片石器が

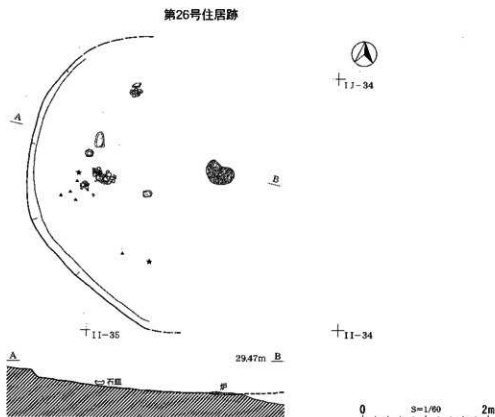
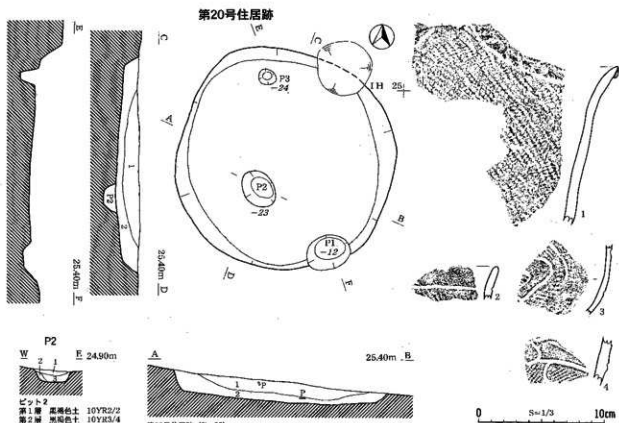


図5 第20号住居跡と第26号住居跡

まとまって出土した。

[壁溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[堆積土] 掘り込みが浅いため、確認できなかった。調査時の観察では、中央付近に暗褐色土が、壁際では褐色土が見られた。

[出土遺物] 床面から完形土器2点のほか、床面、床面直上から11点、覆土から7点の土器片が出土した。十腰内Ⅰ式期の土器片が数点あるが、大半はこれ以前の縄文時代後期前葉の土器である。

石器は床面から二ヶ所の石器集積跡から多数の石器が出土したほか、スクレイパー3点、Uフレイク1点、フレイク1点、敲磨器2点、石皿1点が出土した。また、土偶1点、円盤状石製品1点も出土した。

石器集積跡は、1号集積ではUフレイク1点、楔形石器15点、フレイク43点、2号集積ではスクレイパー3点、Rフレイク2点、楔形石器1点、フレイク26点の石器が見られた。これらの石器を石質の面から見ると、1号集積では一般的に見られる珪質頁岩（珪質頁岩A）を素材とした石器が3点あるが、大半が玉髄質気味の珪質頁岩（珪質頁岩B）で、しかも3～5cmほどの小石を素材としたものが多数を占めている。また、これらのほとんどが両極打法によって作出された剥片あるいは石核であり、全体の54点（91%）を占めている。これに対し、2号集積では珪質頁岩Aが18点、珪質頁岩Bが15点で、両極剥片・石核の類も12点と全体の約37%にすぎない。また、接合資料も7例見られるが、1号集積から出土した剥片と2号集積から出土した剥片が接合した例が1例ある（接合資料4）。

石皿（図7-7）は周縁に縁を持つタイプで、一部を欠くが、完形に近い。整形は全般に粗雑であるが、粗粒の凝灰岩を石材としているせいか、器面はざらついている。敲磨器は凹石の類に属するものである。1点（図7-6）は石皿あるいは台石片を再利用したもので、1号集積のそばから出土した。もう1点（図7-5）は磨石の両平坦面に複数の窪み孔が見られるもので、両側面には敲打痕が見られる。

土偶は、顔、右肩から胸にかけての部分と脚部を欠いている。薄く、丁寧なつくりであり、器面には細沈線による文様が描かれている。

[小結] 本住居跡の構築時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。住居跡全体を検出できなかったが、出土遺物の共存関係を知る上では、良好な資料を得ることができた。

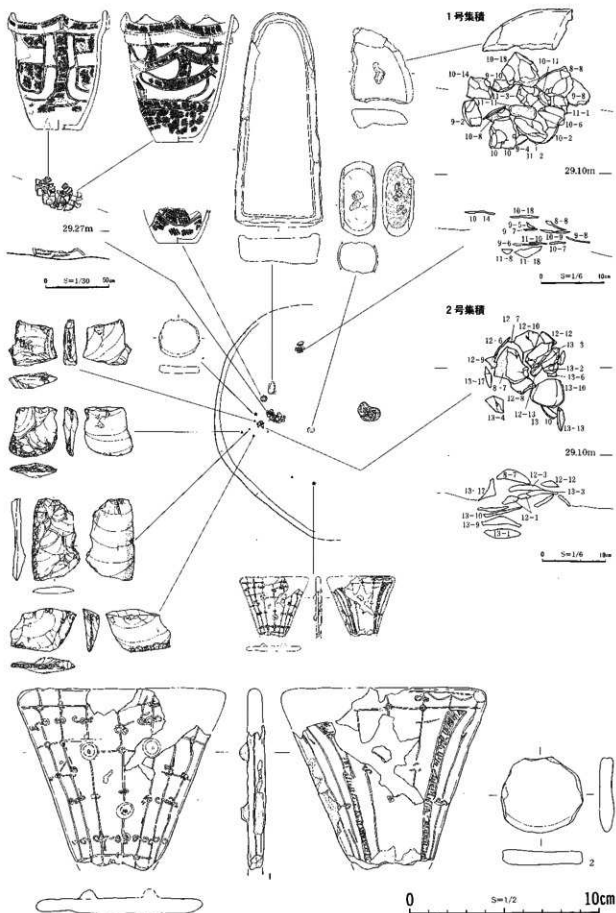


図6 第26号住居跡遺物出土状況、出土遺物1

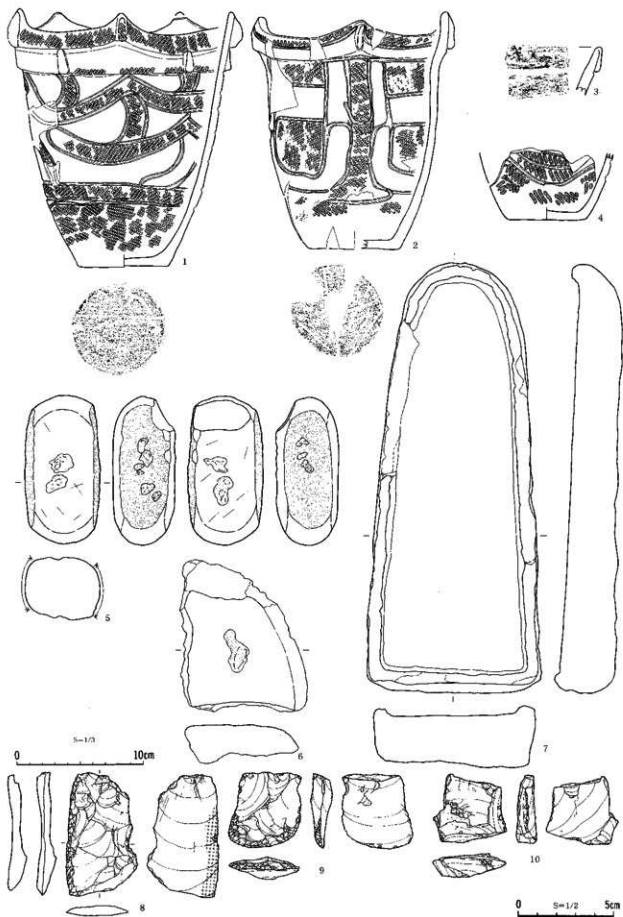


図7 第26号住居跡出土遺物2



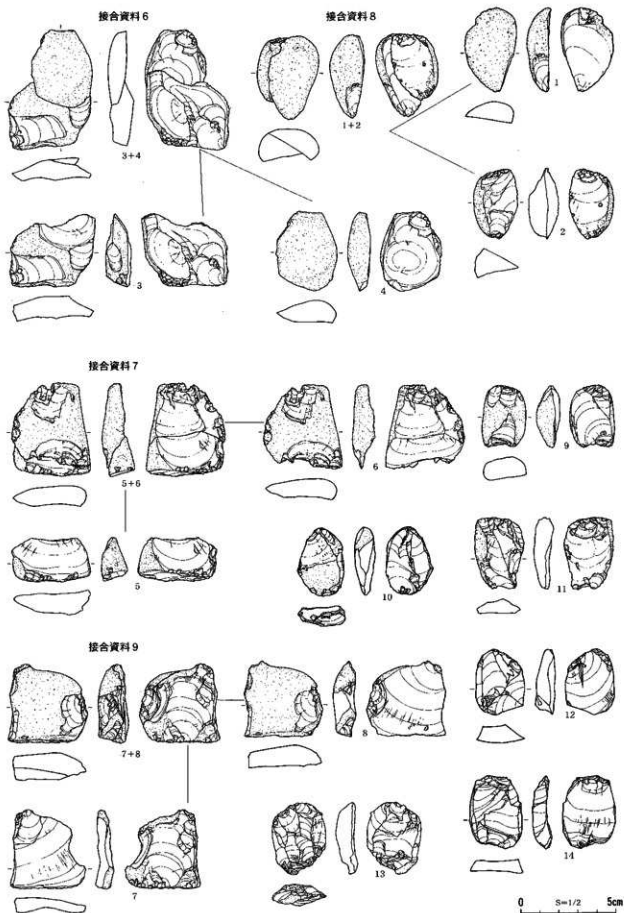


図9 第26号住居跡出土遺物4 (1号集積)

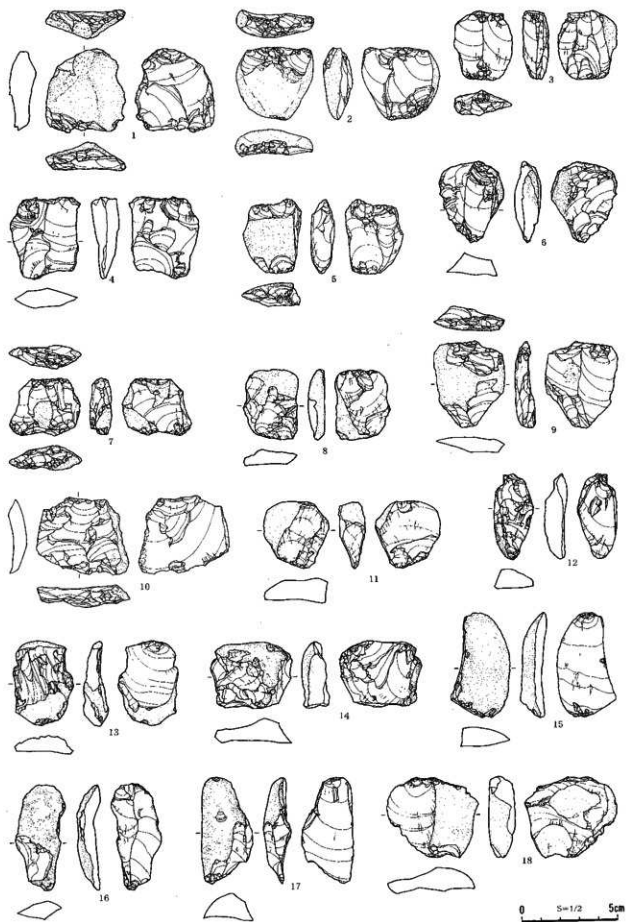


図10 第26号住居跡出土遺物5 (1号集積)



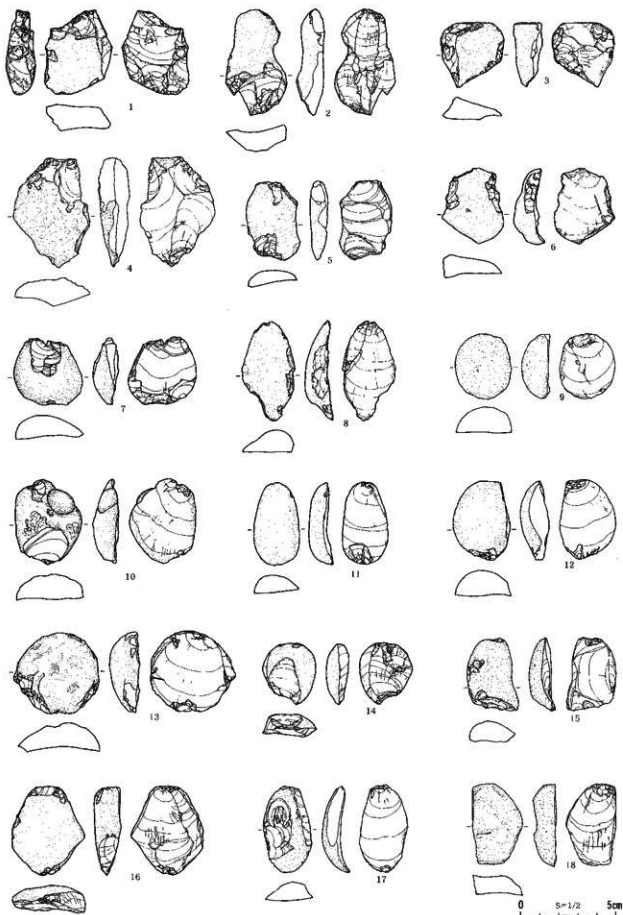


图11 第26号住居跡出土遺物6 (1号集積)

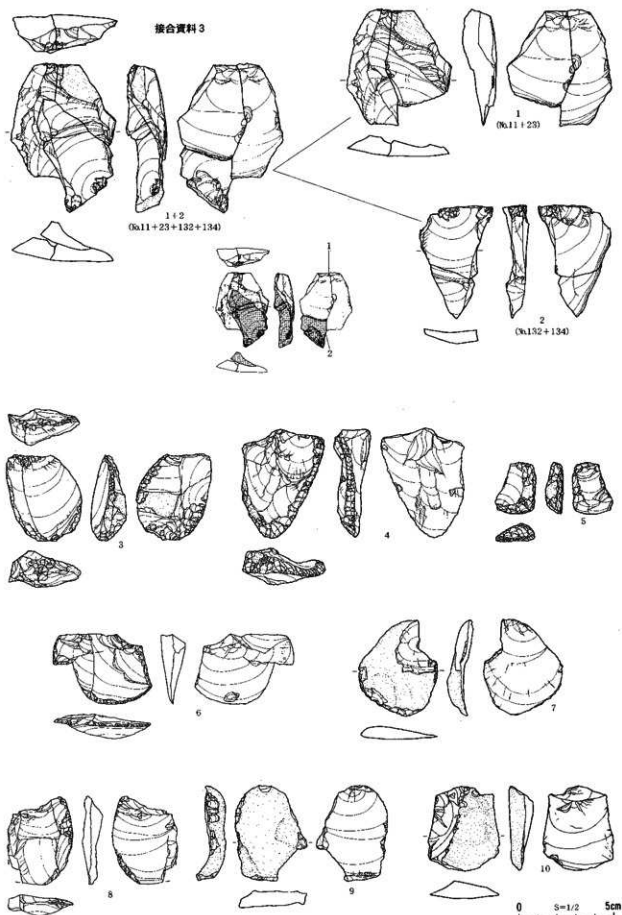


図12 第26号住居跡出土遺物7 (2号集積)

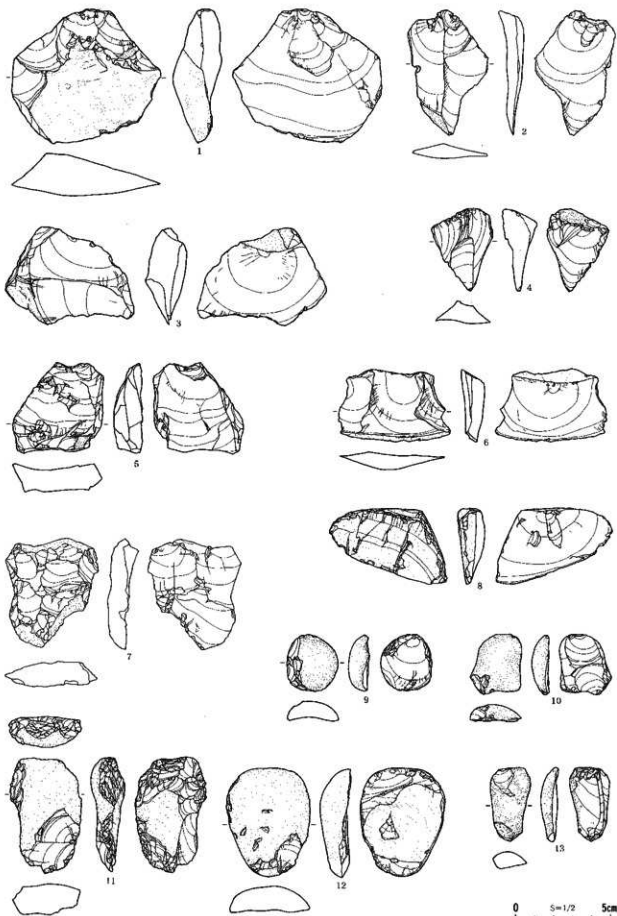


图13 第26号住居跡出土遺物8（2号集積）

## 2 平安時代の住居跡

### 第2号住居跡 (SI-02) (図14~19)

〔位置〕ⅡF・ⅡG-117グリッドに位置している。前回の調査の時に北側の一部を調査しているが、今回の調査で残り部分を完掘することができた。前回調査分と合わせて報告する。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕ほぼ方形を呈し、東壁5.25m、南壁4.70m、西壁5.20m、北壁4.87mである。床面積は23.10㎡で、主軸方位はN-98°-Eである。

〔壁・床面〕壁高は東壁で30cm、南壁40cm、西壁35cm、北壁27cmである。床面は全般に堅緻で、平坦である。

〔カマド〕東壁に二つのカマドを検出した。一つは前回の調査で検出したもので北側寄りの場所に、もう一つは南側寄りの場所に検出したものである。前者のものを1号カマド、後者を2号カマドとする。東壁辺を五等分した時、1号カマドは北側から1/5、2号カマドは4/5の場所に構築されている。どちらも遺存状態は良好であり、袖部分が残存していたことから、二つのカマドは同時に存在していた可能性が高い。

1号カマドの本体は粘土質の黄褐色土を主体として構築されている。火床面は良く焼けており、40×52cmの楕円形の酸化面が形成されている。支脚は検出されなかった。煙道部はトンネル状に掘り抜かれた地下式の構造で、煙出孔に向かって徐々に低くなる。煙出孔は壁から約1m離れた場所にあり、37×50cmの楕円形を呈している。確認面から底面までの深さは60cmである。

2号カマドも本体は粘土質の黄褐色土で構築されている。火床面は幾分窪んでいて、広い酸化面を形成している。支脚は検出されなかった。煙道部は溝状に掘り込んだ後に暗褐色土や黒褐色土及び粘土質の褐色土や黄褐色土で天井部を造り、トンネル状に構築したものである。煙道底面は煙出孔へ向かって、徐々に低くなっている。煙出孔は壁から約1m離れた場所にあり、確認面から底面までの深さは77cmである。

1号カマドの煙道部が地山をトンネル状に掘り込んだ地下式の構造であるのに対し、2号カマドは溝状に掘り込んでから、粘土質の土を主体に天井部を構築している。煙道部の形状は地下式のものと同じであるが、構築方法は半地下式である。

〔壁溝〕壁溝は東壁辺を除いた南・西・北壁の直下に検出したが、ところどころ途切れている。壁溝の幅10~20cm、深さ10cm前後である。なお、南壁中央の壁溝からは灯明皿に利用された土師器の坏(図17-8)が出土している。

〔柱穴・ビット〕柱穴状のビットを7個検出したが、このうちビット8、9の2個は床面を剥いだ段階で検出したものである。ビットのあり方から、四隅に位置する柱穴配置であり、ビット3、6は補助的な柱であった可能性が考えられる。しかし、ビット4は10cmの深さしかないこと、南西隅では柱穴を検出できなかったことから推測の域をでない。

〔土坑〕北壁の東寄りの場所に検出したビット1(P1)は67×78cmの台形状の土坑である。深さ26cmであるが、南側がさらに14cm深くなっている。堆積土中からは多量の鉄滓や羽片が出土した。ビット5は短軸90cm、長軸95cmの方形の土坑で、住居の壁辺に沿って掘り込まれている。深さ20cm

であるが、東側がさらに35cm深く掘り込まれている。堆積土中からは少量の鉄滓が出土した。

〔堆積土〕黒色土や黒褐色土が主体である。確認面上部に火山灰（B-Tm?）が見られた。

〔出土遺物〕やや多量の遺物が出土した。土師器は確認面及び住居堆積土から約260点、カマド堆積土から約50点、床面、床面直上から10点の破片が出土した。また、床面及び床面直上から完形あるいは略完形の土師器杯が7点、小型土器1点が出土した。このうち、図17-3、8は灯明具に転用された土器である。また、図18-2、4、6は埴の破片で、同一個体と思われるものである。須恵器は、杯の破片3点、大甕の破片約20点、壺の破片11点が出土した。大甕の破片はすべて同一個体と思われるものである。床面直上から出土したものもあるが、大半は住居堆積土の上部から出土し、第3号住居跡堆積土のものと同接したものもある。図18-12の壺型土器は住居堆積土下位から床面直上にかけて出土したが、第18号住居跡堆積土から出土した破片とも接合関係にある。

石器は住居堆積土から台石2点、床面から台石1点と搬入礫1点が出土した。いずれも被熱している。図19-1は石棒状のもので、長軸端に弱い打痕が、図19-3は平坦面に線条痕が見られる。

鉄器は住居堆積土からピンセット状鉄製品の破片（図18-16）や紡錘車の軸（図18-17、18）が出土した。また、土製紡錘車1点も堆積土中から出土した。羽口は堆積土下位から床面にかけて、鉄滓とともに出土しているものも多く見られた。鉄滓は、椀型鉄滓、炉壁の溶融物を含む多孔質の滓、流動滓等が出土している。椀型鉄滓は完形品が2点の他はすべて破片又は細片である。出土総重量は15,748gで、この内磁着（タジマ製強力磁石）したものを1,697g、金属探知器（メタルチェッカー）に反応したものを2,530.5gである。このほかに、堆積土中から縄文土器5片（前期、中期）と土偶脚部と思われる破片が出土した。

〔小結〕本遺跡の中でも、やや大型の部類に入る住居跡であり、二つのカマドを有する住居跡でもある。二つのカマドの煙道部の形状は地下式のものであるが、構築方法に差が見られ、2号カマドには半地下式の構築方法が採用されている。どちらかのカマドに厨房ではなく別の機能があるとすれば、カマドの前には土坑（ピット5）が掘り込まれている2号カマドであろう。どのような機能かは不明であるが、土坑からは少量の鉄滓が出土していることから、鉄生産に関するものなのかもしれない。

また、本住居跡からは鉄滓や羽口片などの鉄関連遺物が多量に出土し、とくに鉄滓の出土量は他の住居跡よりも群を抜いて多い。

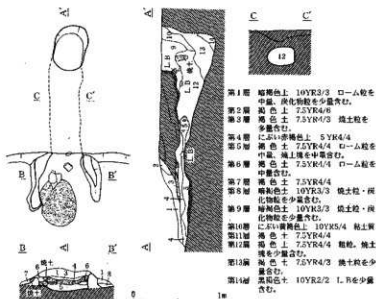
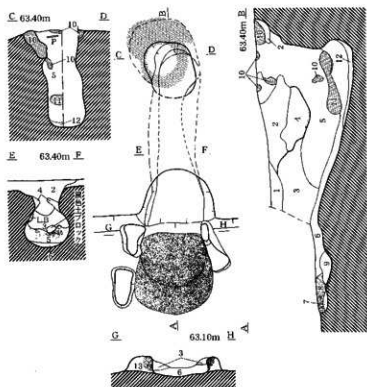


図14 第2号住居跡1（1号カマド）





- 第2号カマド
- 第1層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒少量混入。
  - 第2層 黒色土 10YR2/1 腐化動物遺体混入。餅まり、粘性あり。
  - 第3層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒少量混入。  
天井瓦礫土を含む。
  - 第4層 褐色土 10YR4/6 天井部。下部が剥けている。
  - 第5層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒。粘土粒と腐植土が全体に混入。天井瓦礫層下のローム層を含み。脆い。
  - 第6層 暗褐色土 10YR2/3 粘土粒少量混入。餅まりあり。
  - 第7層 赤褐色土 5YR4/6 4破片入。
  - 第8層 暗赤褐色土 5YR3/6 焼土層。脆い。
  - 第9層 褐色土 10YR4/4 脆い。
  - 第10層 明黄褐色土 10YR6/6 小礫・焼土粒少量混入。壁面に張り付けた柱土。
  - 第11層 赤褐色土 7.5YR5/6 層厚十。焼土層少量混入。
  - 第12層 赤色土 10YR1.7/1 壁からい。
  - 第13層 褐色土 10YR4/6 焼土。焼土とロームの混合土。

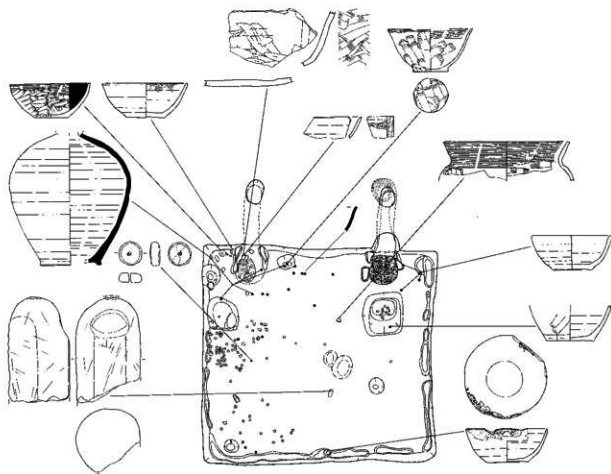


図16 第2号住居跡3

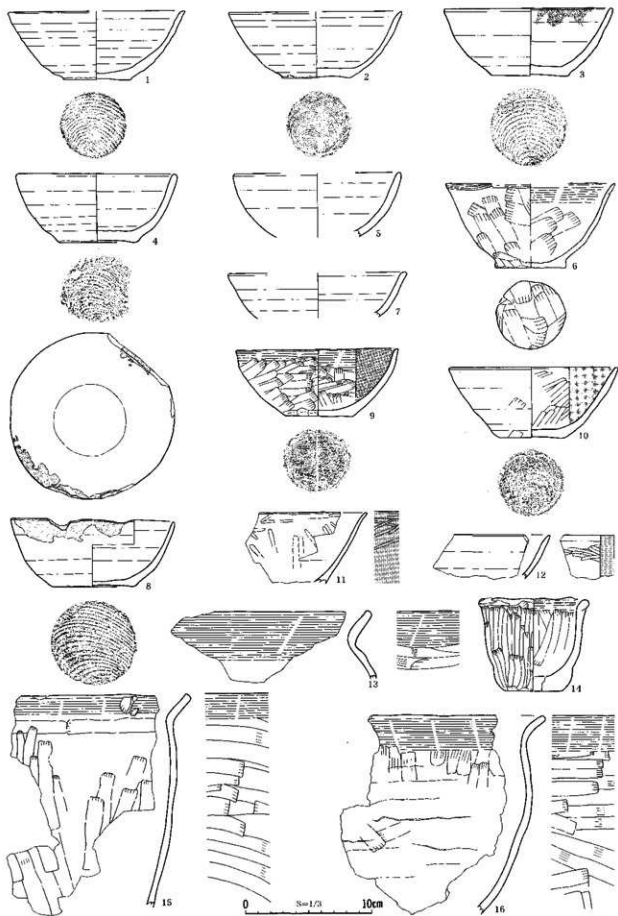


图17 第2号住居跡4



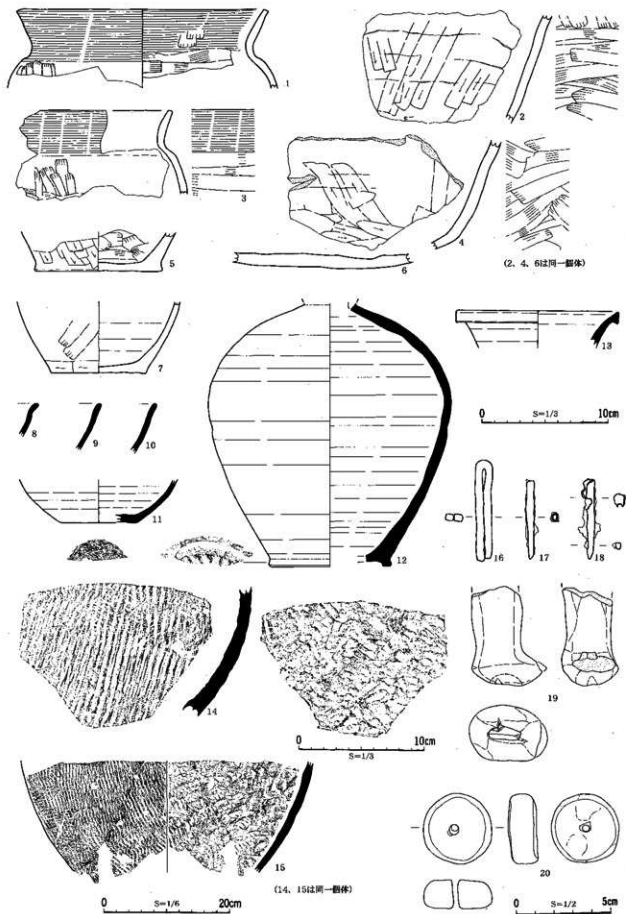


图18 第2号住居跡5

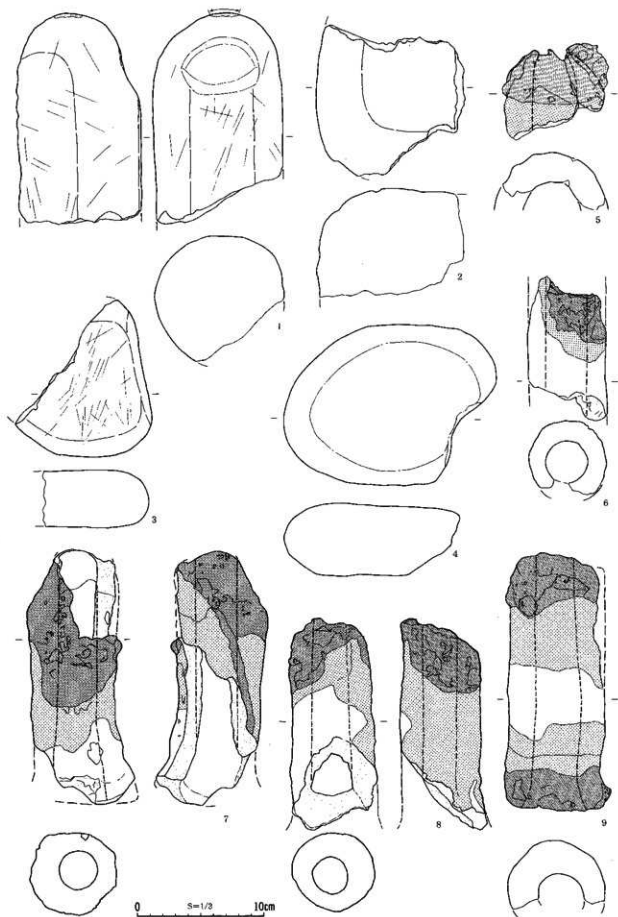


図19 第2号住居跡6

## 第3号住居跡 (SI-03) (図20・21)

〔位置〕 II C・D-115・116グリッドに位置し、第2号住居跡の南東に隣接している。焼失家屋である。

〔重複〕 第4号住居跡と重複し、これより古い。

〔平面形・規模〕 方形を呈し、東壁4.25m、南壁4.30m、西壁4.60m、北壁4.47mである。床面積は17.40㎡で、主軸方位はN-95°-Eである。

〔壁・床面〕 壁は急な立ち上がりで、壁高は東壁40～58cm、南壁及び西壁50cm前後、北壁32～40cmである。また、北壁と西壁に腰板の一部（炭化材）を検出した。床面は、第4号住居跡床面より30cmほど低い位置にあり、ほぼ平坦である。また、被熱のために広範囲に赤化し、非常に堅くなっている。

〔カマド〕 東壁の南側に寄ったところ、壁辺のおよそ1/4の場所に構築されている。遺存状態は良好であり、直下に崩落した状況で検出した。カマド本体は地山（第VI層）を削りだしたものを土台に、灰白色粘土で構築されている。左袖には床面まで達する径6×8cmの楕円形の小ピットを検出したが、芯材として木の棒が用いられた痕跡と考えられる。焚口部は全体が焼土化し、幾分窪んでいる。支脚は検出されなかった。煙道部は地下式の構造である。底面は壁外に出たところでやや高くなっているが、煙出孔付近では再び低く掘り込まれている。煙出孔は径35×40cmの楕円形で、壁から80cm離れた場所にある。確認面からの深さは62cmである。

〔壁溝〕 壁溝は壁直下に一周する。幅10～25cm、深さ8～18cmである。

〔柱穴・ピット〕 5個検出した。ピット2、4、5は柱穴と思われるが、位置は不規則であるため、主柱穴の配置は不明である。また、ピット1、3は断面が鍋底状である。

〔堆積土〕 9層に分層できたが、住居跡の大半を覆うのは第1、5、6層の暗褐色土と第4層の褐色土である。第1層の下部には火山灰（To-a?）を含んでいる。第4層の褐色土はローム粒やロームブロックを含んだ層で人為堆積である。また、第6層は床面を広く覆っており、炭化材が検出されている。

〔炭化材〕 おもに西側の区域で炭化材を検出したが、住居の構造と関連づけられる状況にはない。炭化材には板材が多く見られ、北壁と西壁では腰板の一部を検出した。クリ材という樹種同定結果が得られている（来年度掲載予定）。

〔出土遺物〕 住居堆積土から土師器の破片125点、須恵器の破片3点、床面及び床面直上から土師器の破片33点、須恵器の破片2点、カマド堆積土から土師器の破片4点が出土した。図示したのは、土師器12点、須恵器3点である。土師器には、ミニチュア土器1点のほか、小型の土器2点、坏3点、甕2点である。図21-4は堆積土から出土した高台付環の破片で、第15号住居跡堆積土から出土したものと接合した。また、図21-15の須恵器は、床面から出土した大甕の底部片であるが、第2号住居跡から出土したものと同一個体と考えられるものである。また、図21-13は、第4号住居跡堆積土から出土した破片と接合した。鉄滓は、椀型鉄滓の破片が4点出土している。総重量は971gで、磁着及び金属反応は認められない。このほかに、堆積土から縄文時代の磨製石斧の刃部片（図91-3）と床面直上からフレイク1点が出土した。

〔小結〕 本住居は焼失家屋である。炭化材の残りは、それほど良好と言うわけではなく上屋構造を推





定できるほどではない。カマドは遺存状況が良く、そのまま崩落した状況であったが、支脚は検出されなかった。このことと遺物の出土状況から、火災に遭う前に住居が廃絶されていたものと考えられる。また、袖部に検出した小ピットはカマド芯材に木の棒が用いられたものと考えられ、第21号住居跡でも見られる。

#### 第4号住居跡 (SI-04) (図22・23)

〔位置〕 II D-116・117グリッドに位置している。

〔重複〕 第3号住居跡と重複し、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕 全体を検出できなかったため、平面形・規模は不明である。検出できた部分から推測すると、北壁は2.5m以上、西壁は3.25m前後と推測される。床面積は不明で、主軸方位はN-10°-Eである。

〔壁・床面〕 北西部しか確認することができなかった。この部分に限って言えば、壁高は5~10cm前後で、床面は堅緻で平坦である。

〔カマド〕 北壁に検出したが、袖部分を確認できたのみで、遺存状況は良くない。袖部は灰白色粘土を用いてつくられている。また、焚口部から敲磨器と上師器の甕が出土した。敲磨器は、出土位置から支脚に転用して用いられた可能性とカマド停止に伴って甕の破片とともに意図的に置かれた可能性も考えられる。なお、煙道部は検出されなかったが、半地下式の構造の可能性が考えられる。

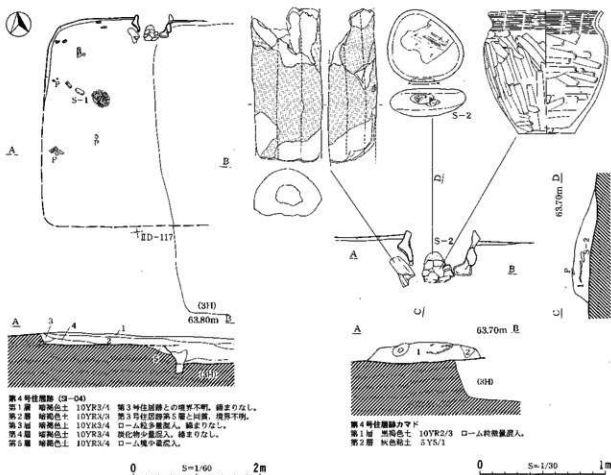


図22 第4号住居跡 1

[炉] 25×33cmの楕円形の焼けた面を検出した。炉の可能性が考えられる。

[壁溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[堆積土] 締まりのない暗褐色土が主体となっている。下部に炭化物が少量見られた。

[出土遺物] 出土遺物は少ない。住居堆積土からは土師器の破片5点、床面及び床面直上からは土師器の破片数点、カマドからは土師器甕1点(図23-1)が出土した。石器は、床面から被熱した礫1点とカマド焚口部から敲磨器(図23-3)が出土した。図23-3は、側縁に弱い敲打痕が見られるが、片方の平坦面には線条痕も見られることから砥石的な利用も考えられる石器である。また、カマドに近接した場所から断面が蒲鉾状を呈する大型の羽口が出土したほか、床面直上から羽口の破片10点が出土した。

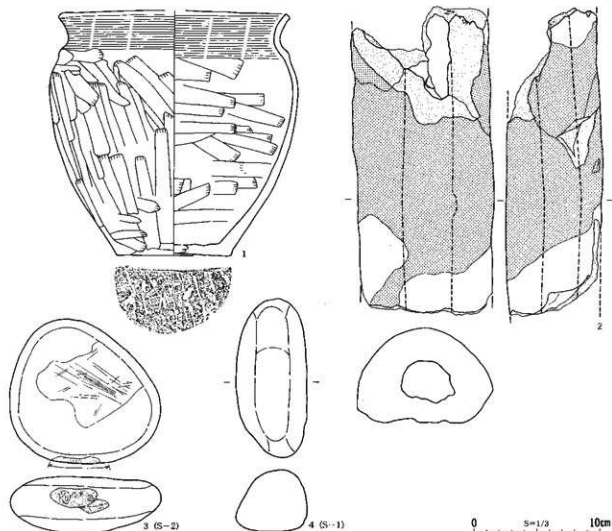


図23 第4号住居跡2

## 第5号住居跡 (SI-05) (図24)

〔位置〕 IT-101・102-グリッドに位置する。集落の東端に位置する住居跡である。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 東壁3.50m、南壁3.87m、西壁3.80m、北壁3.70mの方形を呈している。床面積は13.52㎡、主軸方位はN-96°-Eである。

〔壁・床面〕 壁は急な立ち上がりで、壁高は東壁20~25cm、南壁20~30cm、西壁8~20cm、北壁10~20cmである。床面にはやや凹凸が見られるものの、全体に堅緻で平坦である。また、床面北寄りの区域-カマド前底部付近に、短軸1m75cm、長軸2m05cmの隅丸長方形の窪地が見られた。深さは、縁辺部で2~5cm前後、中央付近で12cmである。

〔カマド〕 東壁の北寄りのところ、壁辺の約1/3の場所に構築されている。カマド本体の遺存状況は悪く、ほとんど残存しない。ただ、周辺には第VI層の灰黄褐色土が確認できたことから、これを用いて構築されていた可能性が高い。火床面は30~38cmの楕円形で酸化面を形成している。また、やや左寄りのところには、土師器の小型甕底部を伏せて支脚としている。煙道部は半地下式の構造である。幅42~70cm、長さ約1mで、底面は床面から緩やかに上昇している。

〔壁溝〕 検出されなかった。

〔柱穴・ピット〕 2個検出した。ピット2は55~62cmの不整楕円形の浅いピットで、深さ16cm、ピット3はカマド右側(南側)の土坑と隣接して検出したもので、深さ15cmの浅いピットである。いずれも柱穴とは思われない。

〔土坑〕 東壁のカマド右側に大きな土坑を検出した(ピット1)。短軸55cm、長軸1m20cmのやや不整形を呈し、壁辺から50cm外側へ膨らんでいる。深さ23cmであるが、底面南側がさらに20cm深くピット状に掘り込まれている。

〔堆積土〕 壁際から床面上にかけて褐色土(第5層)、その上位には暗褐色土が壁際に広く見られ(第3層)、その後には黒色土が厚く堆積している(第1層)。この第3層には火山灰(B-Tm?)が微量含まれているが、とくにピット1とした土坑の堆積土中位では小ブロック状に含まれている。

〔出土遺物〕 出土遺物は少ない。堆積土から土師器の破片7点、須恵器の甕の破片4点のほか、カマドから支脚に転用された土師器の小型の甕が出土しただけである。

## 第7号住居跡 (SI-07) (図25~27)

〔位置〕 IC-D-121・122グリッドに位置している。焼失家屋である。

〔重複〕 第8号住居と重複し、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕 ほぼ方形を呈し、東壁4.08m、南壁4.15m、西壁4.03m、北壁4.25m。床面積は16.17㎡、主軸方位はN-70°-Eである。

〔壁・床面〕 壁は急な立ち上がりで、壁高は東壁30~38cm、南壁40cm前後、西壁40~45cm、北壁32~36cmである。床面はほぼ平坦であるが、カマドを囲む広い範囲が非常に堅く踏みしめられている。また、第8号住居跡との床面のレベル差は25~39cm前後で、本住居の方が低く掘り込まれている。

〔カマド〕 東壁の北寄りのところ、壁辺の約1/3の場所に構築されている。カマド本体は灰白色粘土と灰黄褐色土(第VI層)との混合物を主体に構築されている。火床面は47×68cmの不整楕円形で、



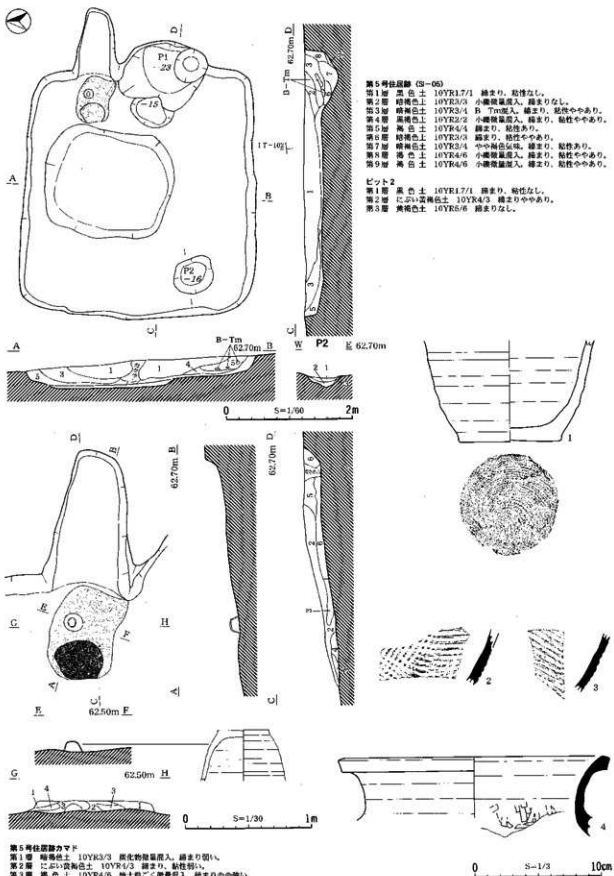


図24 第5号住居跡

強く赤変している。支脚は検出されなかった。煙道部は半地下式の構造で、幅41～62cm、長さ140mの溝状に掘り込まれている。確認面からの深さは40～45cmである。底面にはやや凹凸が見られ、壁際に比べて煙出孔付近がやや広く掘り込まれている。セクションの観察からは、第13層が煙道天井部と考えられることから、この広く掘り込まれた部分よりやや内側に煙出孔がつくられていたものと思われる。壁面からは、約90cm離れている。

〔壁溝〕 検出されなかった。

〔柱穴・ピット〕 検出されなかった。

〔土坑〕 南壁際のやや東側に寄ったところに、短軸73cm、長軸1m16cm、深さ53cmの規模の楕円形の土坑を検出した。堆積土は炭化物を含んだ黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土が観察できたが、このうち暗褐色土と黄褐色土は人為的な堆積である。火災に遭う以前に埋められていた土坑である。

〔堆積土〕 11層に細分できた。このうち、最上部に確認した第1、2層は自然堆積で第2層には火山灰(To-a?)を含んでいる。第3層以下は人為堆積であり、なかでも第3層の褐色土は厚く堆積している。

〔炭化材〕 西壁と南壁寄り区域の床面及び床面直上から炭化材を検出した。炭化材の大部分は板材と思われたが、本来の形状を推定できるものはない。また、住居の構造と関連づけられる状況にもなかった。

〔出土遺物〕 確認面及び住居跡堆積土中から縄文土器1点、土師器の破片191点、床面直上から床面にかけて土師器の破片34点、礫石器3点、カマド堆積土から土師器の破片8点、須恵器の破片(坏)1点が出土した。また、カマド煙道部から須恵器の破片(坏)3点と炭化した3点の種子が出土した。土師器は完形あるいは略完形に復元できたのは坏4点と皿1点、小型土器1点がある。図26-2の土師器は皿型のもので、底辺にヘラケズリが施されたものである。第1号鉄関連遺構(第6号住居跡)の堆積土から出土したものと接合している。図26-3の器内面の底部には布の圧痕が見られる。布は平織りのもので、内面調整に使用されたものの痕跡と考えられる。図26-7は大部分が第1号鉄関連遺構の堆積土から出土し、本住居跡からは床面から出土した2点の細片が接合したものである。やや大ぶりの坏で、器内面は無調整で黒褐色(黒色処理?)を呈している。また、煙道部から出土した3点の須恵器の破片は、住居堆積土から出土した破片と接合し、ほぼ完形に復元することができた(図26-10)。

礫石器は台石の破片2点(図27-4、5)と敲磨器1点で、3点とも被熱している。このうち、敲磨器は第1号鉄関連遺構のカマド火床面から出土したものと接合したため、そちらで掲載している(図78-2)。また、煙道部から出土した3点の種子は、1点はクヌギ、2点はトチノキということであり、「クヌギは可食部分であるが子葉は砕かれておらず、トチノキも食用としない種皮部分」という同定結果を得ている(詳細は来年度の報告書に掲載予定)。

鉄滓は、椀型鉄滓の破片、多孔質の滓、流動滓等が総重量405.1g出土している。

〔小結〕 上部に十和田a火山灰?の堆積が見られるが、堆積土の大半は人為堆積であり、遺物のほとんどは廃棄されたものと考えられる。また、他の住居跡から出土したものと接合する例も多い。

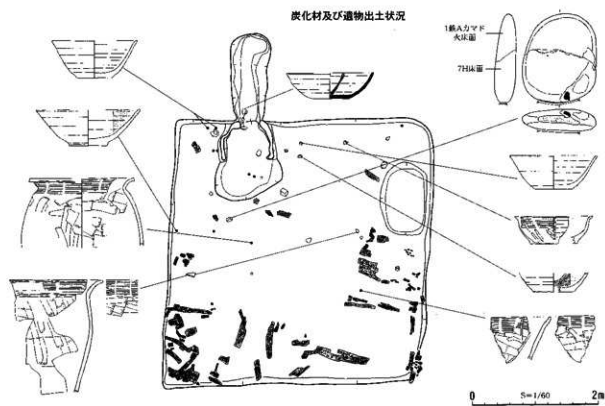
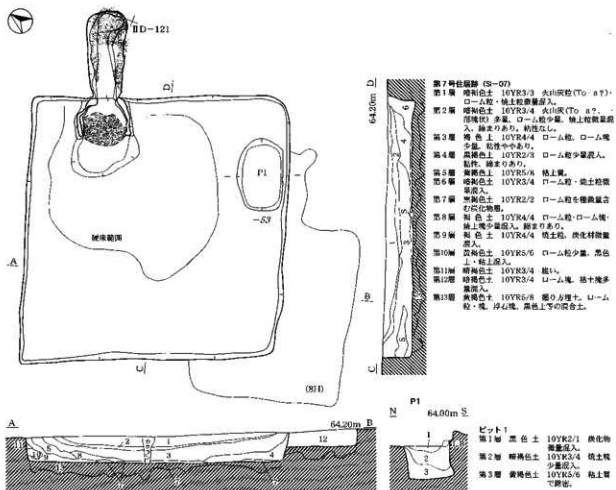


図25 第7号住居跡1

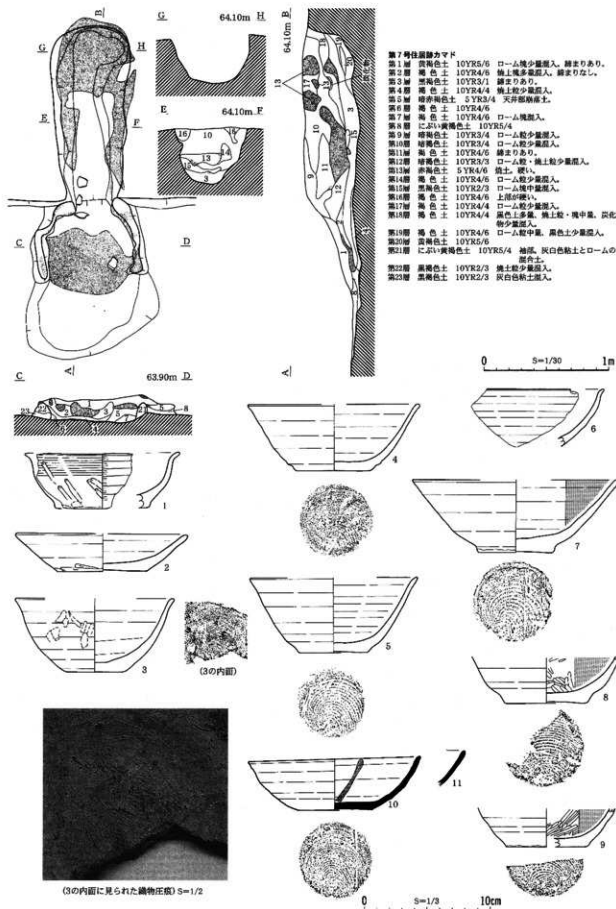
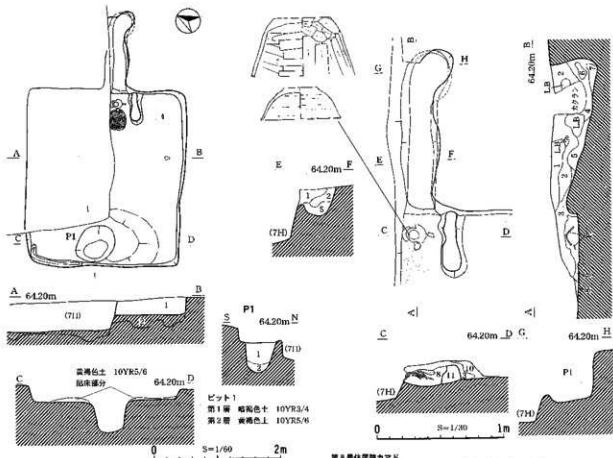


図26 第7号住居跡2



[堆積土] ローム粒やローム塊、灰白色粘土塊を含んだ暗褐色土で占められている。人為堆積である。  
 [出土遺物] 少量の遺物が出土した。住居堆積土から土師器の破片10点、須恵器の破片3点、床面から土師器の破片26点、羽口の小破片1点、カマド堆積土から土師器の破片19点、支脚に転用された土師器坏と甕底部である。図28-5は支脚に利用された甕底部で、3・4はこの支脚と共に出土した。また、図28-2は第7号住居跡から出土した遺物と接合し、第7号住居跡に掲載した図27-1、



## 第8号住居跡 (29-08)

第1層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・塊多量混入。灰白色粘土塊混入。

第2層 黄褐色土 10YR5/6 腐り方礫土。

ピット1  
 第1層 暗褐色土 10YR3/4  
 第2層 黄褐色土 10YR5/6

## 第8号住居跡カマド

- 第1層 黄褐色土 10YR4/4 ローム粒少量混入。縁ありあり。  
 第2層 黄褐色土 10YR2/2 黏性・縁ありなし。  
 第3層 黄褐色土 10YR5/3 大月部。粘土層土が塊状に混入。白色粘土多量混入。  
 第4層 黄褐色土 10YR4/4 縁なし。  
 第5層 黄褐色土 10YR5/4 粘土粒多量混入。形少量混入。  
 第6層 黄褐色土 10YR4/6  
 第7層 黄褐色土 10YR5/8 非常に脆い。黏性なし。  
 第8層 黄褐色土 5YR4/8 天井部分。黄土粒・塊少量混入。  
 第9層 黄褐色土 5YR5/8 塊土混入。  
 第10層 黄褐色土 10YR3/4 ローム粒・塊少量混入。縁ありなし。  
 第11層 黄褐色土 10YR5/3 縁なし。他土。

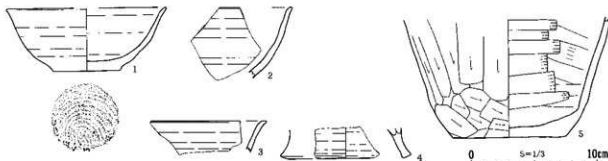


図28 第8号住居跡

3は本住居跡堆積土から出土した遺物と接合関係にある。

鉄滓は、椀型鉄滓の破片が出土している。総重量は1,625.2gで、磁着したものは1点19gである。

### 第9号住居跡 (SI-09) (図29・30)

〔位置〕 I Y・II A-115グリッドに位置している。焼失家屋である。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 東壁2.20m、南壁2.58m、西壁2.23m、北壁2.55mのほぼ方形を呈し、床面積は6.35㎡である。主軸方位はN-73° - Eである。

〔壁・床面〕 壁は急な立ち上がりで、壁高は東壁16~25cm、南壁30cm前後、西壁26cm前後、北壁20cm前後である。床面は、中央から東側の部分はほぼ平坦で堅く踏みしめられているが、壁際では多少の凹凸が見られる。

〔カマド〕 東壁の南側寄り、壁辺のおよそ1/3のところに構築されている。カマド本体は黄褐色の粘土で構築されている。燃焼部の中央には、2点の土師器を縦に並べて設置し、支脚としている。手前に小型土器(図30-1)、後には甕の底部(図30-8)を用い、いずれも伏せて設置している。煙道部は地下式の構造で、壁辺からやや南へ6度ずれた方向に掘り込まれている。壁外には約20度前後の傾斜で徐々に深くなり煙出孔へと向かう。煙出孔は壁から95cm離れており、30cm×35cmの楕円形、確認面からの深さは約65cmである。

〔壁溝〕 検出されなかった。

〔柱穴・ビット〕 4個検出したが、柱穴配置は不明である。北東隅のビット2は大部分が埋められていたもので、検出時には浅い窪みの状態であった。

〔堆積土〕 4層に分層したが、大半が第1層と第2層の黒褐色土である。ローム粒やロームブロック、焼土粒・焼土ブロック等を含んでいるが、とくに第2層に多く見られた。また、床面から床面直上にかけて、焼土ブロックや炭化物(材)が多く見られた。

〔出土遺物〕 堆積土からは土師器(甕)の破片約30点とミニチュア土器の破片2点が出土した。床面から床面直上にかけて、土師器甕の破片2点、ビット2の堆積土上部からは土師器の破片(坏)1点が出土した。また、カマドからは支脚に転用された2点の土師器(図30-1、8)と土師器(坏)の破片2点が出土した。また、床面から刀子と環状鉄製品、椀型鉄滓の破片が2点(170.5g、321g)出土している。刀子は、刃部破片が2枚重なった状態のものが出土した(図30-11)。

〔小結〕 比較的小型の住居跡である。カマドは地下式の構造であるが、支脚として利用された土器の置き方に特徴がある。小型土器を用いる点も本住居だけであり、しかも縦に並ぶ設置の仕方本例だけである。

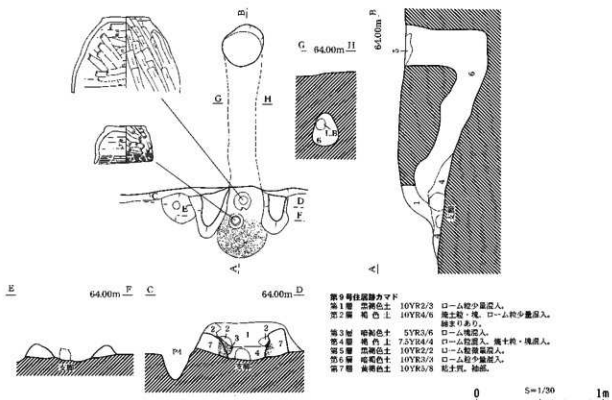
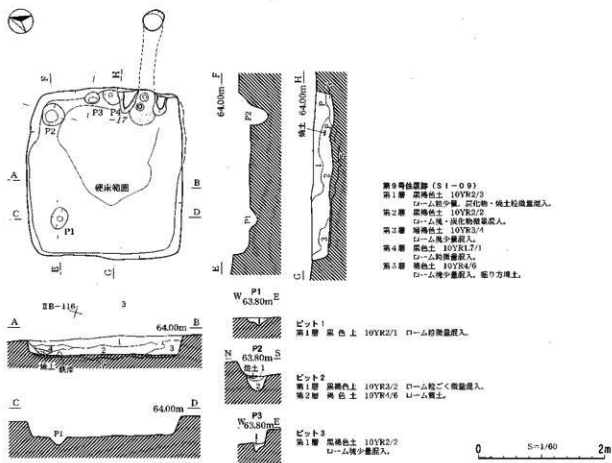


図29 第9号住居跡1





## 第11号住居跡 (SI-11) (図31~33)

【位置】 I X・Y-111・112グリッドに位置している。焼失家屋である。

【重複】 なし。

【平面形・規模】 東壁3.66m、南壁3.70m、西壁4.05m、北壁3.60mの台形状である。床面積は13.13㎡、主軸方位はN-104° - Eである。

【壁・床面】 壁は急な立ち上がりで、壁高は東壁40cm、南壁45cm、西壁42~47cm、北壁36~40cmである。床面はほぼ平坦で、中央から南東部にかけての床面が堅く踏みしめられていた。

【カマド】 東壁の南寄り、壁辺の1/4のところ構築されている。遺存状態は良好である。カマド本体は灰白色粘土と地山の第VI層の灰黄褐色土を主体につくられている。前底部はカマドを囲むように若干窪んでおり、この部分は非常に堅緻である。火床面は前底部から続く最深部にあり、良く焼けた酸化面を形成している。ここから煙道部の入り口付近まで若干高くなっているが、左軸の回りも幾分高くなっている。支脚は検出されなかったが、この高くなった部分から台石が出土している。煙道部は地下式の構造で、ここからは外へ向かって徐々に低く掘り込まれている。煙出孔は壁辺から80cm離れたところにつくられている。確認面上では径40cm前後の不整形円形を呈し、やや広く掘り込まれているが、確認面下15cmのところでは30cm前後のほぼ円形に掘り込まれている。煙出孔の底部までの深さは確認面から58cmである。底部付近では土師器製の破片が出土している。

【壁溝】 西壁と北壁の直下に、部分的に検出した。幅10cm、深さ5~10cmである。

【柱穴・ピット】 5個検出したが、柱穴配置は不明である。ピット3は深さ36cmの柱穴状を呈しているが、検出時には埋められていたものである。これ以外のものは浅いピットで、柱穴かどうか疑わしい。

【土坑】 3基検出した。ピット1は北西隅、ピット2は北東隅、ピット4は南西隅に検出した。ピット1は短軸63cm、長軸82cmで隅丸長方形を呈し、深さ30cmである。堆積土は3層認められたが、人為的に埋められたもので、上部に黄褐色土で貼り床を施している。ピット2は短軸64cm、長軸80cmの楕円形を呈し、深さ35cmである。これも堆積土は3層認められ、上半分は黄褐色土の土で埋められている。ピット4は短軸78cm、長軸87cmのほぼ円形で、深さ19cmである。堆積土は締まりのない暗褐色土のみ確認され、住居堆積土の第5層に似ている。この土坑のみは、住居廃絶前まで機能していたことが推定できる。

【堆積土】 5層に分層できた。中位と下位の一部に褐色土の堆積が見られるが、大半は暗褐色土と黒褐色土とで占められる。第1層上部には、火山灰 (To-a?) が微量含まれている。また、壁際では暗褐色土の堆積も見られるが、床面の大半を覆っているのは黒褐色土である。ローム粒・塊の混入が見られ、人為堆積の可能性が高い。また、床面から床面直上にかけて、炭化材が検出された。

【炭化材】 今回の調査のなかでは、炭化材の検出状況は最も良好である。炭化材は燃焼の度合いや土圧によって、本来の状態を示していないと思われるが、検出時の観察による材の種類を板材、角材、丸材 (半丸材含む) の三つに分けて推定したものを、図32に示しておいた。ただし、上記の理由から場所によって表面のみ残存し空洞となっている部分や材の厚さが異なっている部分もあること、ある程度調査者の主観が混じっていることをお断りしておく。これによると、角材はほとんどなく板材・丸材が多い。どちらかといえば、中央付近に大きな板材が多いように見受けられ、屋根材の可能性が考えられる。丸材は壁に対して直角に近く検出されたものが数点あるが、南壁に見られる2本の

丸材は直径が7~8cmのものである。建築材料に用いられたとすれば、<sup>材が太く</sup>側柱にしては細すぎることから、腰板を押さえる材の可能性が考えられなくもない。なお、この2本の炭化材の樹種はエゴノキとモクレンということである。また、北東隅から中央に向かう炭化材の中に1m10cmの長さのものがある。樹種はクリである。柱あるいは上屋の構築材の可能性が考えられる。以上の他にも、ケヤキ、サクラという樹種同定の結果が得られているが、用材の多様さが目を引く。

〔出土遺物〕土師器の破片が住居堆積土から66点、カマド堆積土から2点、カマド煙出孔から7点が出土した。完形に復元できたものはなく、図示したものは、すべて復元実測である。石器は台石の破片が2点出土した。1点はカマド堆積土から(図33-8)、もう1点は床面から出土したもので(図33-9)、いずれも被熱している。また、床面から鉄器1点(名称不明、金具)、木炭の付着している多孔質の滓が1点(28.2g);カマド煙出孔堆積土から砂鉄3.5gが出土した。このほかに、住居堆積土から縄文土器1点が出土した。

〔小結〕炭化材の出土状況は他の検出例に比べると良好な状態であったが、住居の構造にまで立ち入ることができなかった。樹種同定資料6点は、5種類の樹種に及んでいることが判明し、用材の多様性がうかがわれた。また、カマドから台石、煙出孔から土師器の要の破片と砂鉄が出土しているが、自然流入や無意識的な廃棄行為のほかに、カマドの停止に伴って意識的におかれた可能性も考えられる。

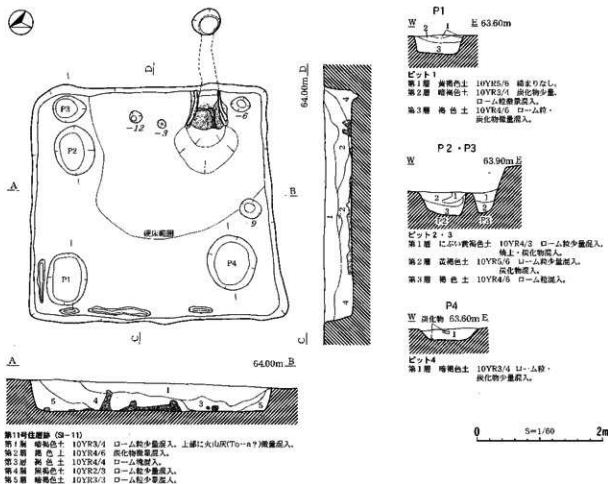


図31 第11号住居跡 1



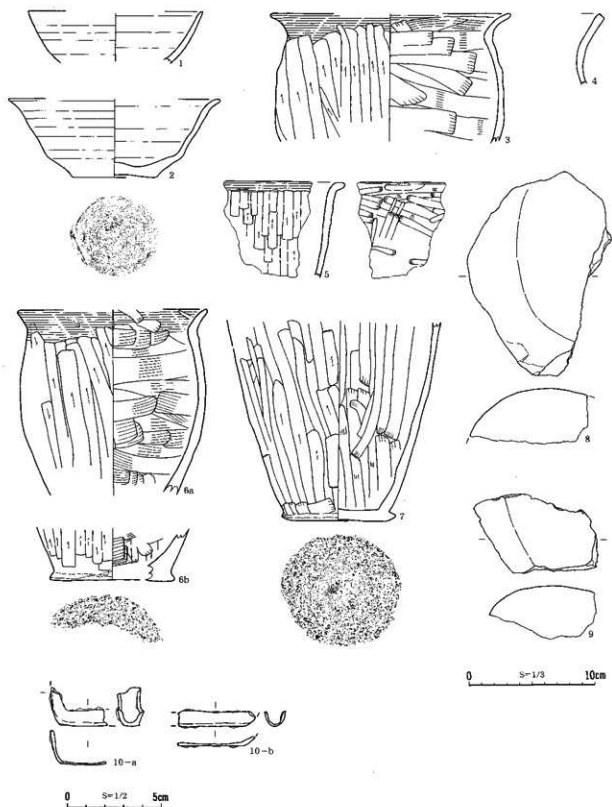


圖33 第11号住居跡3

## 第12号住居跡 (SI-12) (図34~39)

〔位置〕 I V・W-110・111グリッドに位置している。拡張の見られた住居跡で、3期に分けられる。新しい順に12A・12B・12C号として記述する。

## 第12A号住居跡

〔平面形・規模〕 東壁5.85m、南壁5.35m、西壁6.10m、北壁5.50mのほぼ方形である。床面積は30.97㎡、主軸方位はN-82°-Eである。

〔壁・床面〕 壁高は東壁20~25cm、南壁30~45cm、西壁20~30cm、北壁25cm前後であり、急な立ち上がりである。床面は、ほぼ平坦で、南西隅の部分が堅く踏み締められている。

〔カマド〕 新旧二つのカマドが検出された。新しい方をAカマド、古い方をBカマドとする。

Aカマドは東壁の南側、壁辺の1/5の場所につくられており、遺存状態は良好である。カマド本体は灰黄褐色の粘土主体につくられ、土師器甕を芯材に利用している。左袖には甕の胴部上半の破片を垂直に立て、右袖には完形の甕を伏せている。ともに袖内部に埋めているが、右袖の甕は半分近くが表面に出ており、焚口部の一部となっている。火床面は径50cm前後の楕円形で、中央部がとくに強く焼けている。燃焼部壁際には土師器の甕を利用した支脚が横に並列して2個検出されている。左側には粘土塊の上に1個の裏底部を伏せてのせている。右側にはやや大きめの甕を燃焼部底面に固定した上で、さらに3個の底部を伏せて重ねている。煙道部は地下式の構造で、壁外へ緩やかに深く掘り込まれている。壁辺から約1m離れたところに煙出孔があり、壁はやや傾して立ち上がる。煙出孔は径31cmの円形で、深さ50cmである。

Bカマドは、東壁の北寄りのところに検出された。火床面は約60cmの円形であり、改築前のDカマド煙道部の上に検出された。煙道部は地下式の構造で、長さ1.20m、やや急傾斜で煙出孔へ向かう。煙出孔は径43×48cmの楕円形で、深さ70cmである。

〔壁溝〕 北壁の中央付近と東壁及び南壁の一部が途切れているが、幅16~26cm、深さ5~15cmの壁溝が巡っている。

〔柱穴・ピット〕 床面から5個、壁溝から6個の柱穴状のピットを検出した。このうち、ピット2、6、8、9または11が主柱穴と思われる。改築によってピット11からピット6へ建て替えられている。また、床下から南壁際の西寄りのところにピット10を検出した。改築前のピットの可能性が考えられる。

〔土坑〕 西壁際でピット1、中央からやや南寄りのところにピット4を検出した。いずれも埋められていたピットで、約10cmほどの窪みとして検出した。ピット1は短軸1.22m、長軸1.57mの楕円形で、深さ50cmである。ピット4は短軸78cm、長軸94cm、深さ20cmである。

〔堆積土〕 8層に分層された。東側では黄褐色土と黒褐色土の互層が見られるものの、堆積土の大半はローム粒・塊や焼土粒・塊を含んだ暗褐色土が主体となっている。人為堆積である。

〔出土遺物〕 土師器の破片が住居堆積土から127点、床面、床面直上から68点、Aカマド堆積土から88点、煙道部から8点が出土した。図37-6は左袖、5は右袖の芯材に利用されたものである。また、図37-10は左側の、9、11~13は右側の支脚に転用されたものである。石器は、堆積土から台石(図38-4)、床面直上から砥石? (図38-3)、床面から砥石(図38-2)、台石(図38-1)、カマド煙道部から焼礫が出土した。鉄器は、床面直上から紡錘車の軸の破片が1点出土した。鉄滓は、

碗型鉄滓の破片と多孔質の滓、及び流動滓が総重量で592.1g出土している。また、羽口の小破片が1点住居堆積土から出土した。

Bカマド堆積土からは、土師器の破片42点、煙道部から9点のほか、縄文土器が数点出土した。

#### 第12B号住居跡

〔平面形・規模〕東西壁約4.30m、南北壁が約3.90mの長方形である。床面積は16.58㎡で、主軸方位はN-84°-Eである。

〔カマド〕東壁の南寄りのところ、壁辺の1/3の場所に検出した。これをCカマドとする。火床面と煙道部だけの検出である。火床面は60×72cmの楕円形で、強く焼けている。煙道部は地下式の構造で、煙出孔付近が徐々に深く掘り込まれている。煙出孔は改築後の住居跡壁外にあり、25×35cmの楕円形を呈し、深さ50cmである。

〔壁溝〕北壁、東壁中央、南壁から西壁にかけての部分で検出した。幅15～29cm、深さ5cmである。

〔柱穴・ピット〕検出されなかった。

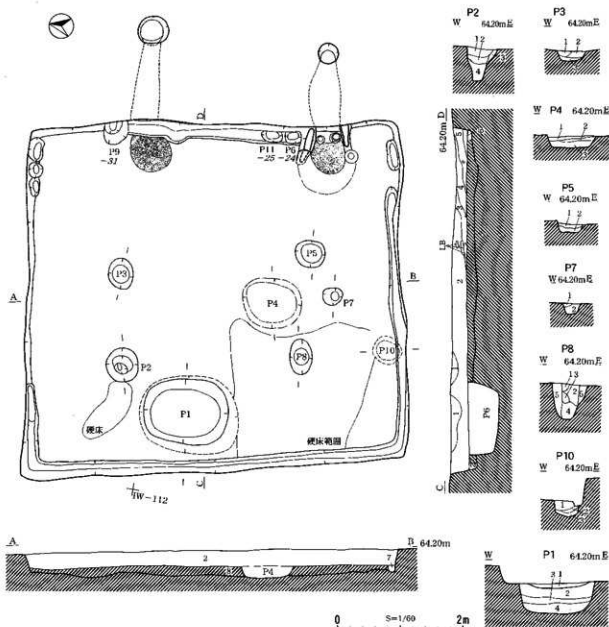
〔土坑〕東壁際の北寄りのところに、短軸80cm、長軸1.02mの楕円形の土坑を検出した。深さ14cmである。

〔出土遺物〕Cカマド堆積土及び煙道部から、土師器の破片13点が出土した。また、本住居跡に関わる遺物かどうか不明であるが、床面を剥いだ段階で、土師器の破片31点と砥石（図39-1）、敲石（図39-2）が出土した。

#### 第12C号住居跡

第12B号住居跡の内側に、さらに古い時期のカマドを検出した。このカマドをDカマドとする。カマドのみの検出であるため、平面形、規模等については不明である。火床面は42×48cmの楕円形で強く焼けている。煙道部は地下式の構造で、1.30mの長さである。第12B号住居跡の土坑により一部破壊されているが、煙道底面は緩やかな傾斜で、低くなっている。煙出孔は第12B号住居跡の外にあるが、上部は第12A号住居跡Bカマドの火床面となっている。煙出孔底面は、第12A号住居跡床面から26cmの深さであるが、本来の深さはおおむね50cm前後である。

〔小結〕本住居跡は2回の増築が行われた住居跡である。最も古い時期の住居跡については、カマドのみの検出であるため規模が不明であるが、東壁北側に地下式の構造のカマドを持つ住居跡である。これを拡張したB号住居跡は東壁南側にカマドを移している。東西約4.30m、南北約3.90mの規模で、床面積が16.58㎡である。2回目の拡張は、住居の軸線を2度西へずらして、各壁を拡張するかたちで行っている。この結果、床面積は2倍近い30.98㎡となり、約15㎡ほど増えている。このA号住居跡も最初は北側にカマドを設けていたが、改築に伴って南側にカマドを移し、柱も1本建てかえている。また、この時のカマドには芯材として両袖に土師器を埋め込んでいること（右袖には完形の甕）や支脚の設置の仕方などに際だった特徴が見られる。



第12号住居跡 (9-12)  
 第1層 黄褐色土 10YR3/2 ローム塊多量。  
 第2層 暗褐色土 10YR3/4 炭土、炭化材少量混入。  
 第3層 黄褐色土 10YR3/7 粘りなし。締まりややあり。  
 第4層 灰黄褐色土 10YR4/2 褐色土少量混入。  
 第5層 黄褐色土 10YR2/3 ローム状少量。  
 第6層 にごり黄褐色土 10YR3/3 炭土粒混入。  
 第7層 暗褐色土 10YR3/4 均質。  
 第8層 褐色土 10YR4/5 (層り方) 粘土粒少量混入。

ピット1  
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 ローム状。炭化材少量混入。  
 第2層 黄褐色土 10YR5/8 粘性。塑性なし。  
 第3層 褐色土 7.5YR4/6 ローム状。  
 第4層 暗褐色土 7.5YR5/6 粘性。締まりなし。  
 ピット2  
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 浮石少量混入。  
 第2層 暗褐色土 10YR3/2 粘性。締まりなし。  
 第3層 褐色土 10YR4/6 粘土塊混入。  
 第4層 暗褐色土 10YR3/4 粘性。締まりなし。

ピット3  
 第1層 褐色土 10YR4/5 ローム塊混入。  
 第2層 黄褐色土 10YR5/8 炭土粒混入。  
 第3層 暗褐色土 10YR3/4 炭化材。炭土粒少量混入。

ピット4  
 第1層 暗褐色土 7.5YR3/3 炭化材少量混入。  
 第2層 黄褐色土 10YR5/8 粘土まだらに混入。  
 第3層 褐色土 10YR4/5 粘土まだらに混入。

ピット5  
 第1層 黄褐色土 10YR2/3 締まりあり。粘性ややあり。  
 第2層 暗褐色土 10YR3/4 粘土粒少量混入。締まりなし。

ピット7  
 第1層 黄褐色土 10YR2/2 粘性。締まりややあり。  
 第2層 褐色土 10YR4/6 暗褐色土混入。

ピット8  
 第1層 褐色土 10YR4/6 土ぼらに暗褐色土混入。  
 第2層 暗褐色土 10YR2/3 粘性ややあり。締まりなし。  
 第3層 褐色土 10YR4/6 粘土混入。  
 第4層 暗褐色土 10YR4/4 褐色土混入。  
 第5層 褐色土 10YR4/6 浮石少量混入。

ピット10  
 第1層 褐色土 10YR4/6 小塊混入。  
 第2層 暗褐色土 10YR2/3 締まり。粘性なし。  
 第3層 黄褐色土 10YR5/8 小塊混入。

図34 第12号住居跡 1





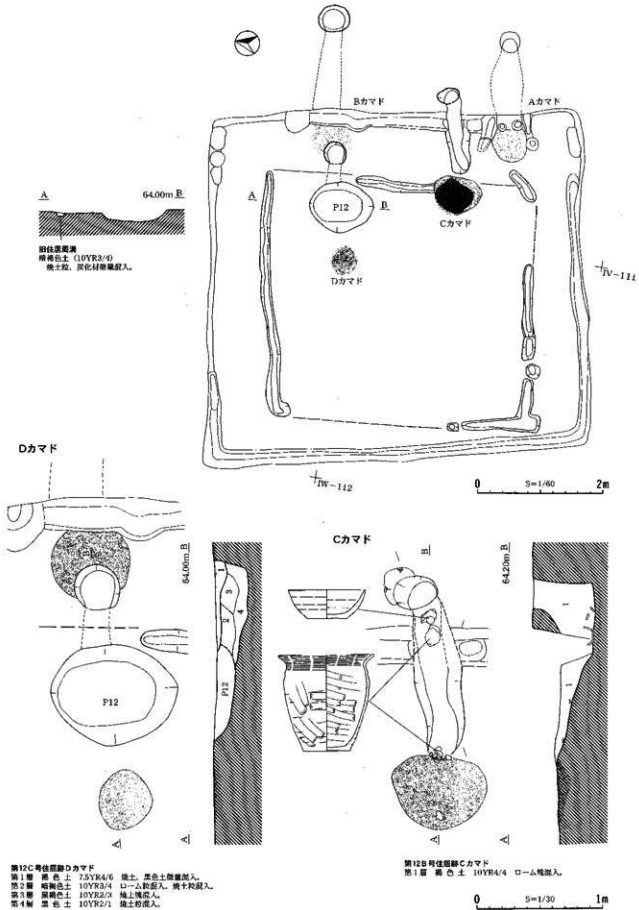


図36 第12号住居跡3

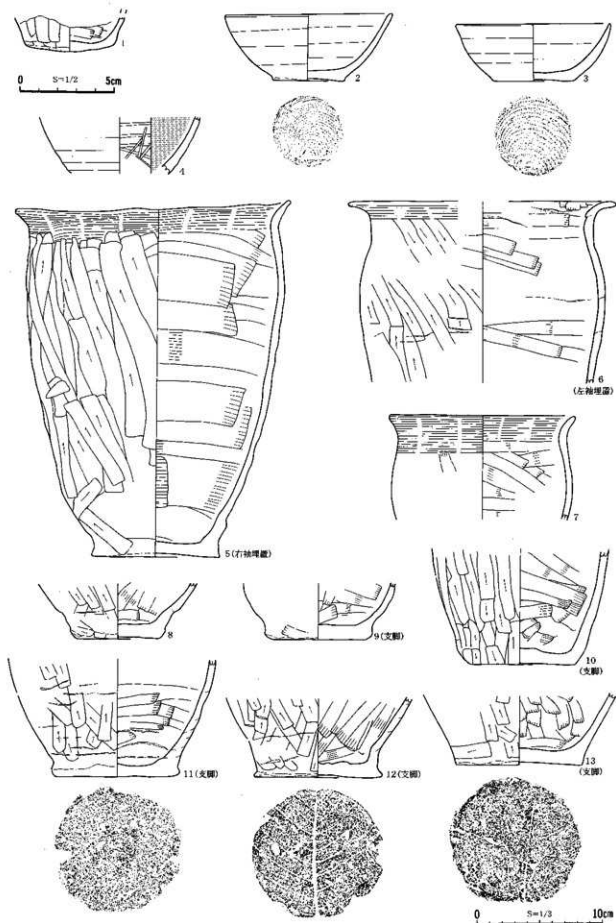
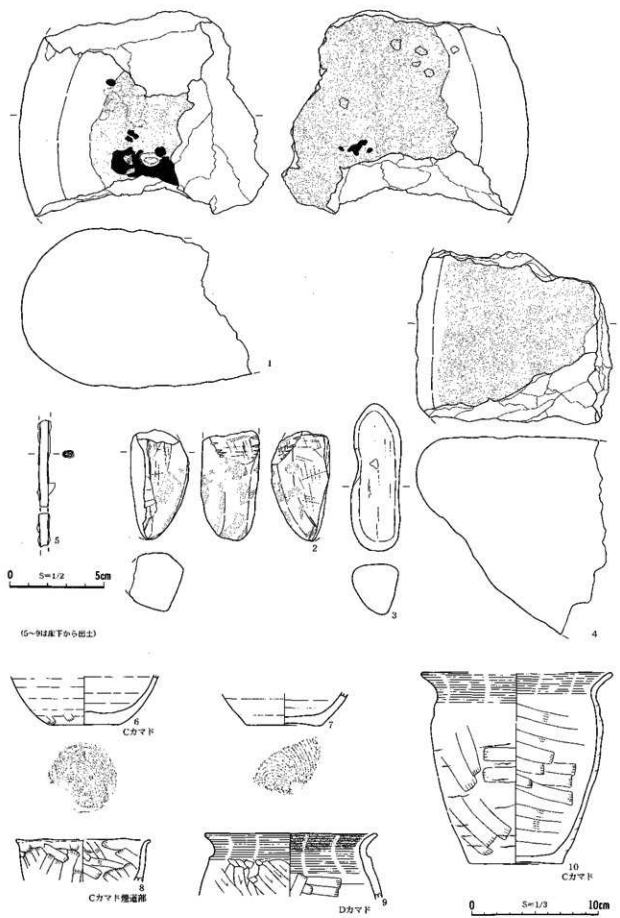


図37 第12号住居跡4



(5-914号下から出土)

図38 第12号住居跡5

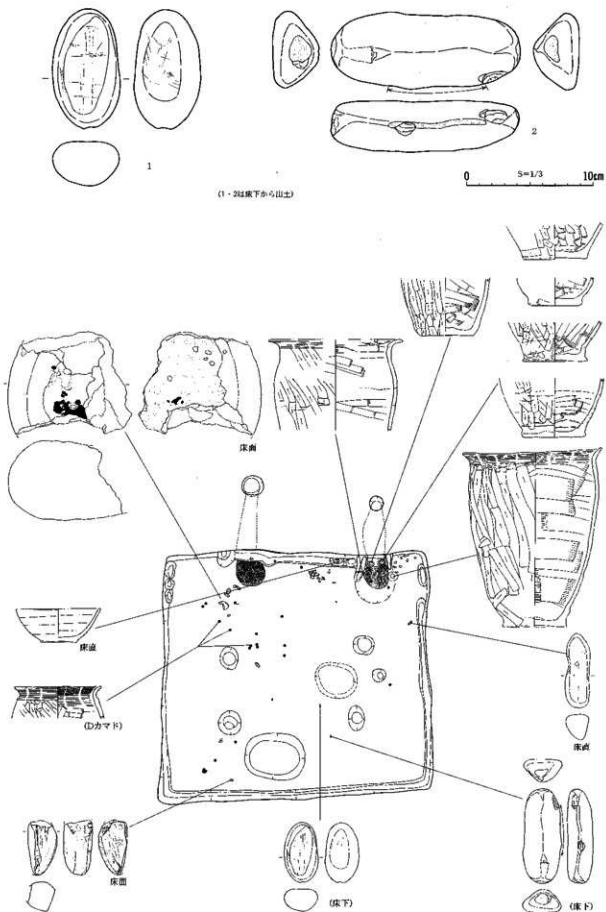


図39 第12号住居跡 6

### 第13号住居跡 (SI-13) (図40・41)

〔位置〕 I T・U-110・111グリッドに位置し、第12号住居跡の南に隣接している。拡張の見られた住居跡で、拡張後の新しい住居跡を第13A号、拡張前を第13B号として記述する。

〔重複〕 北壁で第18号土坑と重複しているが、本住居跡の方が新しい。

#### 第13A号住居跡

〔平面形・規模〕 東壁3.20m、南壁4.73m、西壁3.70m、北壁4.40mの台形状を呈し、拡張した東壁がやや狭くなっている。床面積は15.89㎡で、主軸方位はN-87° - Eである。

〔壁・床面〕 壁高は13~20cm前後で、急な立ち上がりである。また、拡張前の住居跡の部分にはローム粒やローム塊を含んだ暗褐色土を貼り床に、それ以外では地山を平坦にならして床面を構築している。とくに、中央付近は堅く踏みしめられている。南側には3cmほどの深さの窪みが二ヶ所見られ、そのうち壁際に近い窪みには焼土が認められた。その後の調査で、この二つの窪みは拡張前のカマドの火床面とその脇に掘り込まれたピットであることがわかった。

〔カマド〕 東壁の北寄りのところ、壁辺の1/3.5の場所につくられている。遺存状態は良好で、天井部は北側へ崩落した状況で検出された。カマド本体は小礫や焼土塊を含んだ褐色の粘土を主体につくられている。燃焼部底面はやや窪み、45×56cmの不整形の火床面が見られた。また、この奥のやや左寄りのところには、土製支脚が検出された。土製支脚は4cmほど掘り込まれてから設置され、粘土で固定されている。煙道部は半地下式の構造であり、40cm前後の幅で壁外へ1.10mのびている。底面は壁外に向かって緩やかな傾斜で低くなっている。

〔壁溝〕 検出されなかった。

〔柱穴・ピット〕 南西隅にピット1個を検出した。深さ34cmである。

〔堆積土〕 6層に分層できた。第4層から第6層にはローム粒やローム塊が不規則に含まれており、人為堆積の様相を呈している。

〔出土遺物〕 出土遺物は少ない。住居堆積土から縄文土器破片10点、土師器の破片45点、砥石1点、腕型鉄滓の破片が1点(59g)、カマド堆積土から土師器の破片6点、床面直上・床面から土師器の破片2点が出土した。図示した土器は、ほとんどが住居堆積土からのものである。図41-3の底部には木葉痕が見られ、4は砂底となっている。図41-6の砥石は流紋岩製で、三面が平滑であるが、うち一面に研ぎ痕が顕著である。

#### 第13B号住居跡

〔平面形・規模〕 東壁3.70m、南壁3.15m、西壁3.70m、北壁2.90mの南北に長い長方形を呈する。床面積は10.49㎡で、主軸方位はN-87° - Eである。

〔壁・床面〕 床面は5~10cmほど掘り込んだ後で、床面を平坦にならしている。カマド火床面の検出状況から、床面は拡張後のものと同じか、若干低いくらいと思われる。

〔カマド〕 東壁の南寄りのところ、壁辺の1/3.7の場所につくられている。火床面は平坦で短軸46cm、長軸78cmの長円形の酸化面を形成しているが、中央部がとくに強く焼けている。煙道部は30cm前後の幅で壁外へ約1mほどの長さでのびており、底面はやや急勾配で低くなっている。煙出孔の部分は、さらに一段低く掘り込まれている。深さは火床面のレベルよりも39cm低く、確認面から62cmである。地下式の構造であったことを推測できる。

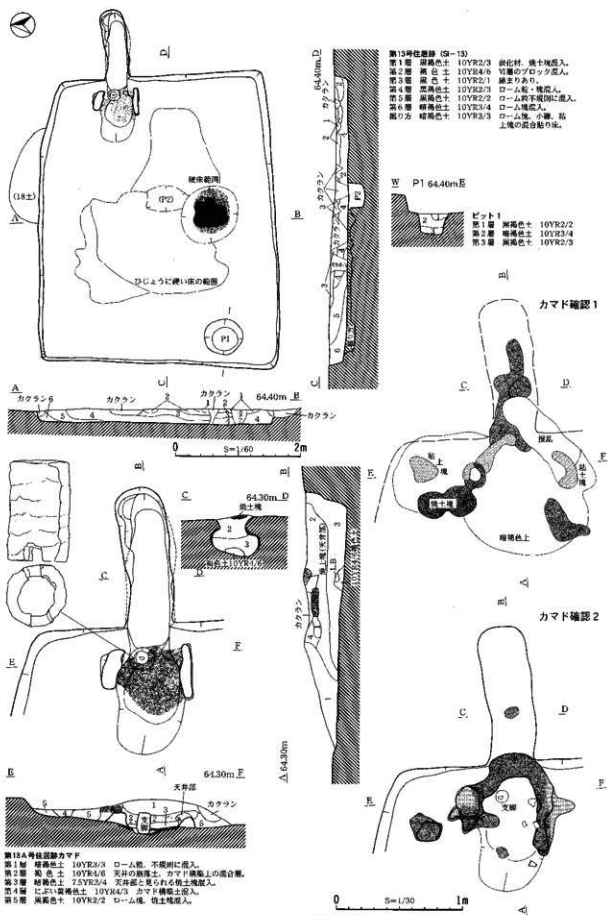


図40 第13号住居跡 1

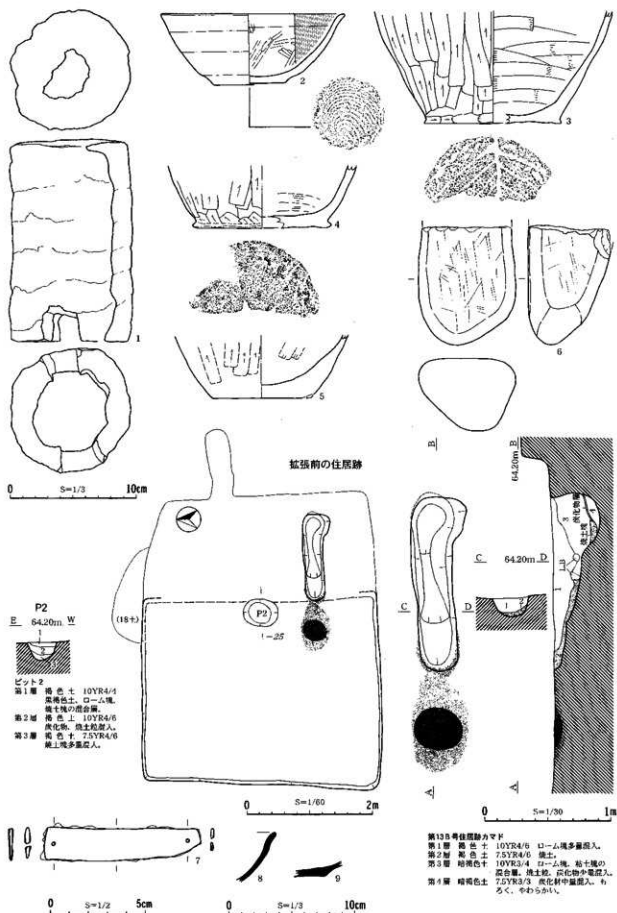


図41 第13号住居跡2



〔壁溝〕 検出されなかった。

〔柱穴・ピット〕 カマドの左脇、壁辺の中央付近にピット1個（ピット2）を検出した。深さ25cmである。

〔出土遺物〕 床面から土師器の破片8点、鉄器（手鎌）1点、ピット2堆積土から土師器の破片1点、須恵器（坏）の破片2点が出土しただけである。

〔小結〕 本住居は拡張が見られた住居跡である。拡張前は地下式のカマドを東壁の南寄りの場所に設置した住居で、おおむね短軸3m、長軸3.7mの南北に長い長方形を呈し、床面積10.49㎡の規模である。これを東壁側を1.6m拡張して、床面積を5.40㎡増やしている。拡張にともなって、カマドは北寄りの場所へ変更がなされ、構造も半地下式へと変更している。また、支脚には円筒状の土製支脚が使われている。土製支脚の使用例は、本遺跡の中では本住居跡だけである。

#### 第14号住居跡（SI-14）（図42・43）

〔位置〕 IX・Y-118・119グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 東壁3.50m、南壁3.52m、西壁3.40m、北壁3.50mのほぼ方形を呈している。床面積は11.29㎡で、主軸方位はN-90° -Eである。

〔壁・床面〕 壁高は40～50cm前後で、急な立ち上がりである。床面はほぼ平坦である。

〔カマド〕 東壁の南寄りのところ、壁辺の1/3.5の場所につくられている。遺存状態は非常に良好で、天井部がそのまま崩落したような状況で検出された。確認時の観察では、天井部崩落土の中央に掛け口と思われる軟らかな褐色土が円形に認められ、支脚よりもやや前方にずれた位置に確認された。カマド本体は、黄褐色の粘土を主体として暗褐色土や地山の第VI層などの混合土で構築されているが、袖部分は地山（第VI層）を10cmほど削り出して土台としている。燃焼部底面は10cmほどの深さのすり鉢状を呈し、37×48cmの楕円形の火床面が検出された。また、中央には粘土の土台に土師器坏を伏せて設置した支脚が検出された。煙道部は地下式の構造で、壁外へ1.09mのびている。壁際での幅は23cmであるが、壁外では27～32cmとやや広い。底面は支脚の辺りから壁際にかけていったん高くなるが、ここから煙出孔に向かって緩やかに低くなっている。煙出孔は径36×48cmの楕円形で、確認面からの深さは44cmである。

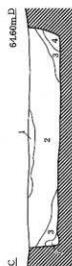
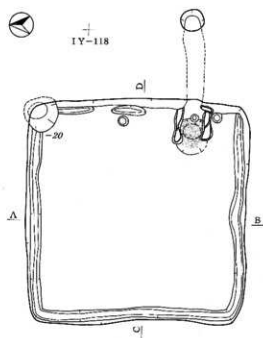
〔壁溝〕 東壁の一部に途切れる部分があるが、ほぼ一周する。幅15～20cm、深さ5～16cmである。

〔柱穴・ピット〕 2個検出した。いずれも深さ3cmほどの浅いピットで、東壁の中央付近とカマド右側に検出した。柱穴配置は不明である。

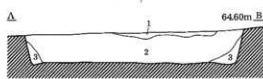
〔土坑〕 北東隅に径60cm、深さ29cmの円形のピットを検出した。北東側が袋状に掘り込まれている。

〔堆積土〕 5層に分層できたが、ローム粒・塊、炭化物、焼土粒を含んだ暗褐色土が大半を占めており（第2層）、人為堆積の様相を呈している。

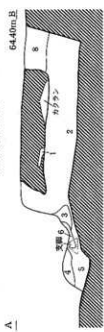
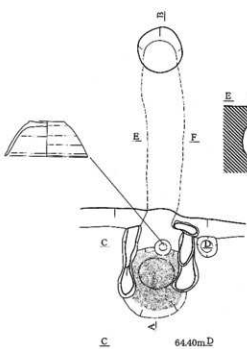
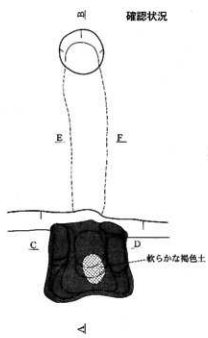
〔出土遺物〕 土師器の破片が住居堆積土から70点、床面直上から21点、床面から5点出土した。須恵器は、住居堆積土から壺の破片2点が出土した。また、床面直上から敲石（図43-8）、櫛型鉄滓の破片（34.7g）、羽口の破片が各1点ずつ出土した。図43-1の底部には木葉痕が、7の底面には



- 第14号住居跡 (59-14)
- 第1層 緑褐色土 10YR3/3 粘性なく、結まりあり。
  - 第2層 暗褐色土 10YR3/4 粘土粒少量、ローム層中葉、粘土粒混入。
  - 第3層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物微量混入、粘性、結まりややあり。
  - 第4層 褐色土 10YR4/6 非常に硬い粘土層。
  - 第5層 黄褐色土 10YR5/6 硬い。
- 第14号住居跡下方
- 第1層 緑褐色土 10YR3/4 ローム粒・塊混入、脆く、崩れやすい。
  - 第2層 黒褐色土 10YR3/2 粘土塊混入。
  - 第3層 濃い黄褐色土 10YR3/4
  - 第4層 褐色土 10YR4/4 粘土塊混入、粘土質。
  - 第5層 暗褐色土 10YR5/6 粘土少量混入。
  - 第6層 褐色土 7.5YR6/3 ローム層、粘土塊少量混入。
  - 第7層 黒褐色土 10YR3/2 粘土粒混入。
  - 第8層 濃い黄褐色土 10YR4/3 11-A粒混入、炭化物微量混入、粘土に濃い黄褐色土 10YR5/3 粘土、ローム等の混合土。



0 S=1/50 2m



0 S=1/30 1m

図42 第14号住居跡 1

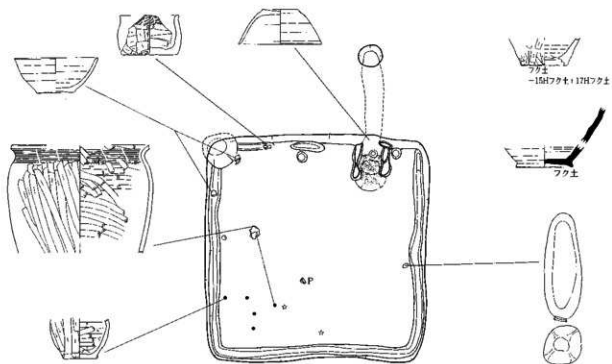
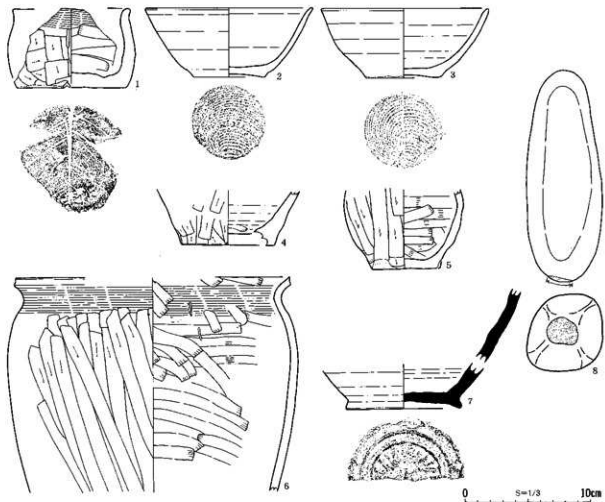


図43 第14号住居跡2

菊花文が見られる。

#### 第15号住居跡 (SI-15) (図44・45)

〔位置〕 I X・Y-120・121グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 東壁3.64m、南壁3.50m、西壁3.65m、北壁3.43mのほぼ方形を呈している。床面積は12.77㎡、主軸方位はN-93°-Eである。

〔壁・床面〕 壁高は各壁とも50cm前後で、急な立ち上がりである。床面は地山を掘りくぼめてから平坦にならして構築しているが、住居掘り方は、壁際ではやや深く、他では浅い。

〔カマド〕 東壁の南寄りのところ、壁際の1/4の場所につくられている。遺存状況は良好であり、そのまま崩落した状態で検出された。確認時の観察で、天井崩落土の一部に掛け口と思われる軟らかな黒褐色土が楕円形(10×15cm)に認められ、支脚の設置場所よりもやや北東(左袖奥)にずれて検出された。天井部が北東側へ崩落したものであると思われる。カマド本体は粘土を主体に構築されている。焚口部はやや窪むが、火床面は約3cm高く、燃焼部の中央には土師器環を伏せて設置した支脚が検出されている。煙道部は地下式の構造で、底面は煙出孔へ向かって徐々に低くなっている。煙道の長さ0.9mである。煙出孔は径30×34cmの円形で、壁はやや外傾しながら、ほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは75cmである。

〔壁溝〕 南壁と西壁の一部に検出しただけである。幅15cm、深さ6～12cmである。

〔柱穴・ピット〕 壁際と四隅に柱穴状のピットを検出しているが、主柱穴は四隅のピット(P2～5)と考えられる。深さ22～41cm前後である。また、壁際のピットは深さ5cm前後のものが多く、南壁際中央のピット6は25cmの深さがあり、補助的な柱穴とも考えられる。

〔堆積土〕 10層に分層できたが、大半は締まりのない褐色土や灰黄褐色土で覆われている。また、2枚の降下火山灰の堆積が見られたが、上位は白頭山火山灰(B-Tm)、下位は十和田a火山灰(To-a)と思われる。十和田a火山灰は、壁際から中央にかけてレンズ状に堆積している。

〔炭化材〕 床面直上から床面にかけて炭化材が出土したが、構造を推定できる状況にはない。図示した形状のわかる炭化材は、床面直上-十和田a火山灰の直上からの出土であることから、必ずしも本住居に伴うものとは云えない。中央付近の炭化材は板材と思われる、現状で長さ2.85m、厚さ1～2cm前後である。樹種同定ではサクラ属という結果を得ている。また、床面から出土した炭化材は小さなものや粉状になっているものがほとんどで、本来の形状は不明なものが多い。

〔出土遺物〕 住居堆積土から土師器の破片67点、須恵器の破片(環)1点、台石2点(図45-9、11)、弥生土器5点、床面直上から土師器の破片17点、椀型鉄滓の破片2点が出土した。鉄滓の総重量は586.2gで、この内40gが磁着した。また、床面から土師器の破片3点、カマド堆積土8層から土師器の破片(環)1点、台石1点(図45-10)が出土した。図示した土器のなかには、第14号住居跡や第17号住居跡の堆積土と接合したものや、第1号鉄関連遺構(第6号住居跡)床面出土のものと同接合したものもある(第1号鉄関連遺構に掲載)。また、図45-9はカマド堆積土から出土した台石で、片方の平坦面には弱い線条痕が、側面には敲打痕が観察される。

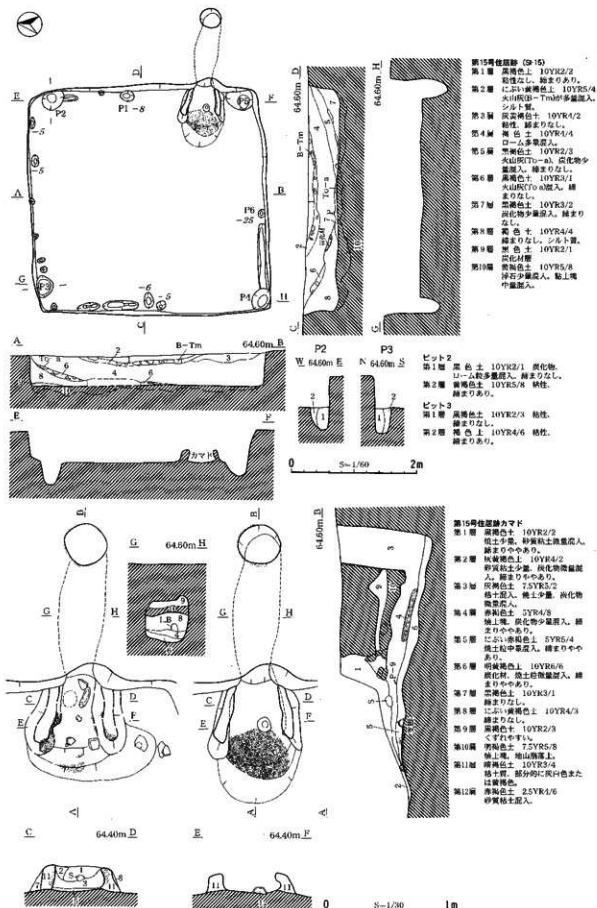


図44 第15号住居跡1

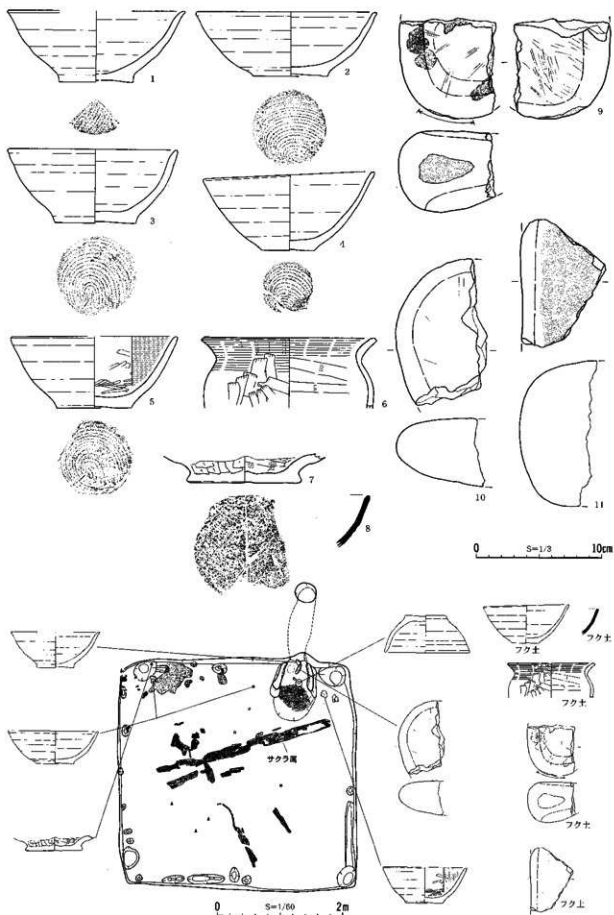


図45 第15号住居跡2

## 第16号住居跡 (SI-16) (図46~51)

〔位置〕 I S~U-118~120グリッドに位置している。大型で、改築が認められた住居跡である。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 東壁6.78m、南壁7.44m、西壁6.50m、北壁7.08mの長方形を呈している。床面積は50.32㎡である。主軸方位は、東カマドを基準にするとN-100° -Eであるが、西カマドを基準にするとN-82° -Wである。

〔壁・床面〕 壁高は40~60cmで、急な立ち上がりである。床面は、ほぼ平坦である。

〔カマド〕 新旧合わせて3基のカマドを検出した。東壁では2基のカマドを検出し、新しい方を東新カマド、古い方を東旧カマドとした。また、西壁で検出されたものを西カマドとして調査した。

東新カマドは東壁辺の南寄り、約1/3の場所につくられており、カマドの前面に前底部を有している。前底部はカマド両袖を囲むように40cmの幅でやや低く掘り込まれ、外縁には粘土、ローム粒、小礫等から成る混合土を幅20~25cm、厚さ5cmで半月状に張り付けている。カマド本体は粘土を主体に第VI層のいわゆるピンクロームと呼ばれる粘性の強い灰黄褐色土や暗褐色土を混ぜてつくっているが、左袖前には補強材として土師器製の破片を用いている。袖内側には幅60cm、奥行き54cmの火床面が見られ、奥には横に並列して支脚が検出された。右側には土師器の小型の甕(ほぼ完形)を伏せて設置し、左側には焼けた粘土塊が横に並んで検出されたが、右側は抜き取られた可能性が考えられる。煙道部は地下式の構造で、1.12mの長さで、壁外に向かって徐々に低くなるが、勾配は緩い。煙出孔は径30×35cmの円形で、確認面からの深さ51cmである。

東旧カマドは、東壁の中央からやや北寄りのところに位置し、煙道部のみが検出された。床面から24cmの高さの壁の途中から掘り込まれており、壁外へ1.76mのびている。幅は30~55cmで、壁際でやや広い。底面は徐々に低くなって煙出孔へ向かう。煙出孔はおよそ径35cmの円形を呈するものと思われ、確認面からの深さは38cmである。なお、煙道部が床面よりも高い位置にあることから、住居の改築が行われたと推測されるが、現住居跡の床面が旧住居跡の床面よりも深く掘り込んでつくられているため、旧住居跡については不明である。

西カマドは、西壁のほぼ中央につくられている。カマド本体は粘土を主体にしているが、調査時の不手際でほとんど除去してしまったため、詳細は不明である。燃焼部はややくぼんでいるが、火床面だけはそれよりもやや高くなっており、非常に堅く赤化している。煙道部は地下式の構造で、底面は壁際のところでいったん高くなってから煙出孔へ向かって徐々に低くなっている。壁辺から煙出孔までは1.64mのび、径27×30cmの煙出孔がつくられている。確認面からの深さは66cmである。煙道部が塞がれていなかったことや住居の東西セクションからも天井部の崩落が認められることから、このカマドが東新カマドと同時存在であることは間違いない。

〔壁溝〕 各壁で途切れる部分があるが、ほぼ一周する。おおむね幅10~20cm、深さ5~10cmであるが、北西隅の部分や北壁中央付近では20cmほどの深さである。

〔柱穴・ビット〕 床面から13個のビットを検出したが、このうちビット2~5が主柱穴である。ビットの確認面から想定して、断面が短辺17cm前後、長辺40cm前後の長方形の角柱を用いており、柱の長辺はカマド側へ向けている。

〔土坑〕 北西隅に、短軸86cm、長軸98cmの楕円形の土坑を検出した。深さ44cmである。堆積土から、

数点の土師器片が出土した。

〔堆積土〕10層に分層できた。壁際には壁の崩落土や廃棄された黄褐色土の堆積が見られるところもあるが、おおむね黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の順で堆積している。火山灰は2枚見られ、第3層の黒褐色土の下位には白頭山火山灰(B-Tm)、第7層の褐色土中には十和田a火山灰(To-a)を微量含んでいる。また、西壁際中央には西カマドの天井崩落土が見られた。

〔出土遺物〕住居堆積土から土師器の破片約100点、縄文土器1点、弥生土器12点が出土した。また、床面直上から土師器の破片約140点、床面から土師器の破片41点、東新カマドから土師器の破片30点、西カマドから土師器の破片7点が出土した。多量の遺物が出土したものの破片が多く、また、接合関係でも離れた場所から出土した遺物が接合している。さらに、東新カマドで天井部崩落土とともに出土した土師器の破片は、他の場所から出土したものと接合している。これらのことから、大半の遺物が廃棄されたものと思われる。なお、他の住居跡出土の遺物と接合関係にあるのは、東新カマドの補強材に使われた土師器製の破片と第1号鉄関連遺構のAカマド堆積土から出土した破片が接合した例、床面・床面直上から出土した土師器製の破片と第23号住居堆積土の破片が接合した例がある。

図48-1は手づくねによる小型の鉢で、器面にはヘラナデによる整形が施されているが、内面底辺部のそれはケズリに近いものとなっている。口唇部はほぼ水平にちかく、端部は外反する。底面は砂底であった可能性が高く、砂粒の痕跡が見られる。また、図48-2は灯明具に転用されている円で、内外面に煤状炭化物の付着が見られる。ほぼ完形である。図49-8はロクロ整形の小型甕で、カマドの支脚に転用された土器である。

石器は住居堆積土から縄文時代の半円状扁平打製石器1点(図91-6)、床面直上から磨石1点(図50-14)、敲石2点(図50-11、12)、台石6点(図50-6~8、10)、搬入礫2点(図50-9、13)、東新カマドの前底部から砥石1点(図51-1)が出土した。図50-14は卵形で全体が滑らかであるが、とくに一部(図の内側の破線で囲まれた部分)が滑らかとなっている。図50-11は欠損品で、棒状礫の端部と両側面に敲打痕が見られる。器面は滑らかで、煤状炭化物が付着している。図50-12は棒状礫の片方の端部に強い磨痕が見られるものである。図51-1は全体に整形が施されているもので、4面に研ぎ痕が見られる。細粒凝灰岩製である。台石は6点のうち1点是小片、1点は完形、他は破損品である。図50-8は凹凸の見られる扁平礫で、全体が被熱し、片方の面には弱い敲打痕と鉄錆状の物質が礫表面の小さな気孔内に見られる。図50-7は両面が平滑で煤状炭化物が付着している。図50-10は片方の平坦面が平滑である。また、搬入礫のうち図50-9は不整な扁平礫で、被熱している。両面に磨痕のような痕跡が認められる。図50-13は自然礫ともとれる小楕円礫である。

鉄器は、床面直上から刀子1点が出土している。先端部を欠損し、柄部に木質部分が付着している。また、床面直上から、砂鉄734.7gが出土した。

〔小結〕本住居跡は、改築の認められた住居跡であるが、改築に当たって、さらに深く掘り込んで床面を構築しているため、改築前の状況は全く不明である。改築後の住居は本遺跡の中でも最大規模の住居であり、東壁と西壁に地下式のカマドを持つことが特徴となっている。なお、二つのカマドを持つ例としては第2号住居跡がある。また、東新カマドの支脚は、小型甕と粘土塊が並列して検出されたが、片方の支脚はカマドの停止に伴って、抜き取られた可能性が考えられる。



安田(2)遺跡Ⅱ

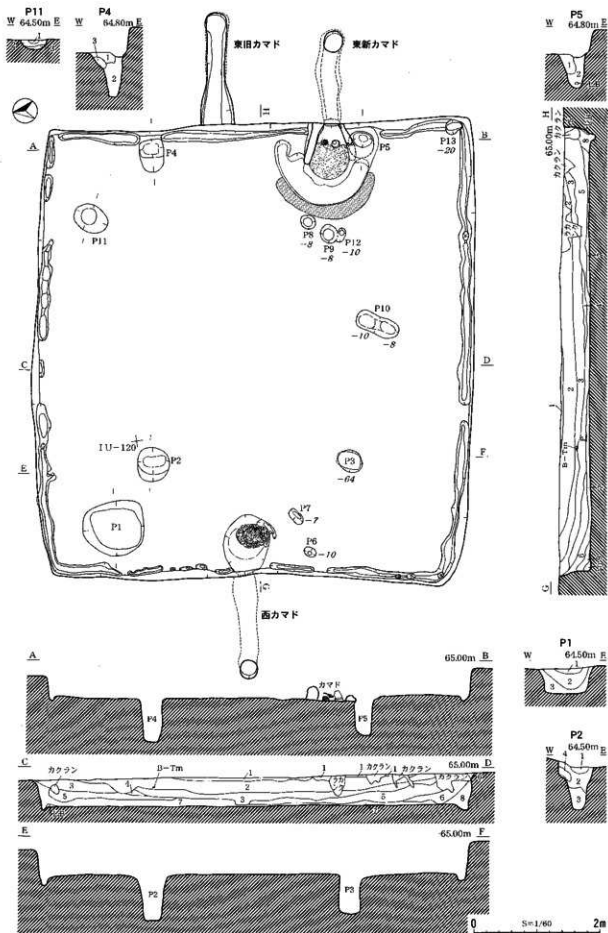
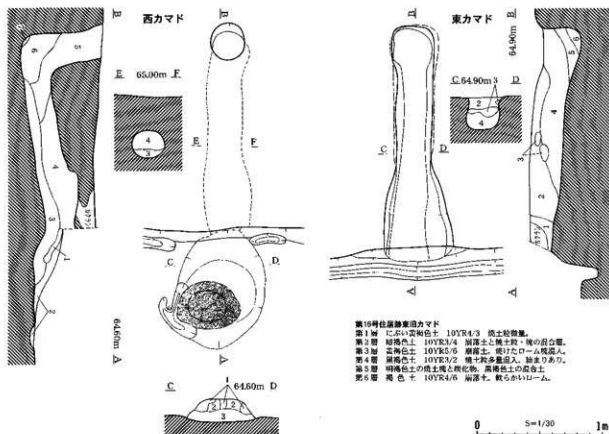


図46 第16号住居跡1





第16号住居跡東カマド

- 第1層 におい黄褐色土 10YR4/3 灰土粒混入。
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4 腐植土・雑土粒・炭の混入層。
- 第3層 黄褐色土 10YR5/6 腐植土、焼けたローム状混入。
- 第4層 黄褐色土 10YR3/2 焼土粒多量混入。粒まきあり。
- 第5層 暗褐色土の焼土塊と炭化物、黄褐色土の腐植土
- 第6層 褐色土 10YR4/6 腐植土、軟らかいローム。

0 5=1/30 1m

第16号住居跡西カマド

- 第1層 におい黄褐色土 10YR5/4 腐植土、粒まきあり。
- 第2層 灰黄褐色土 10YR4/2 炭化物微量混入。粒まきややあり。
- 第3層 褐色土 10YR4/6 焼土粒少量、天井部崩落の焼土塊。
- 第4層 灰黄褐色土 10YR4/2 天井部崩落の焼土塊、あらい。
- 第5層 灰黄褐色土 10YR4/2 腐植土付の焼土と炭との混入層、炭化物微量混入。粒まきややあり
- 第6層 黄褐色土 10YR2/2 軟く、軟らかいシルト質。
- 第7層 におい黄褐色土 10YR5/4 すわらかい。

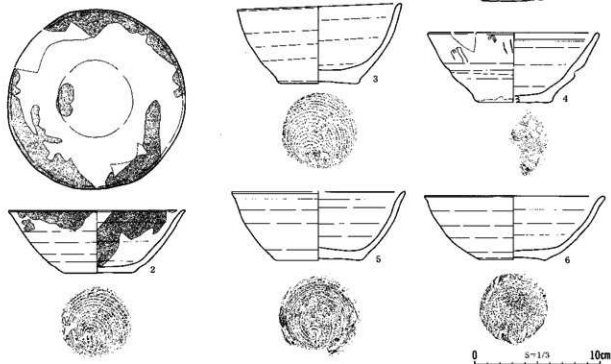


図48 第16号住居跡 3

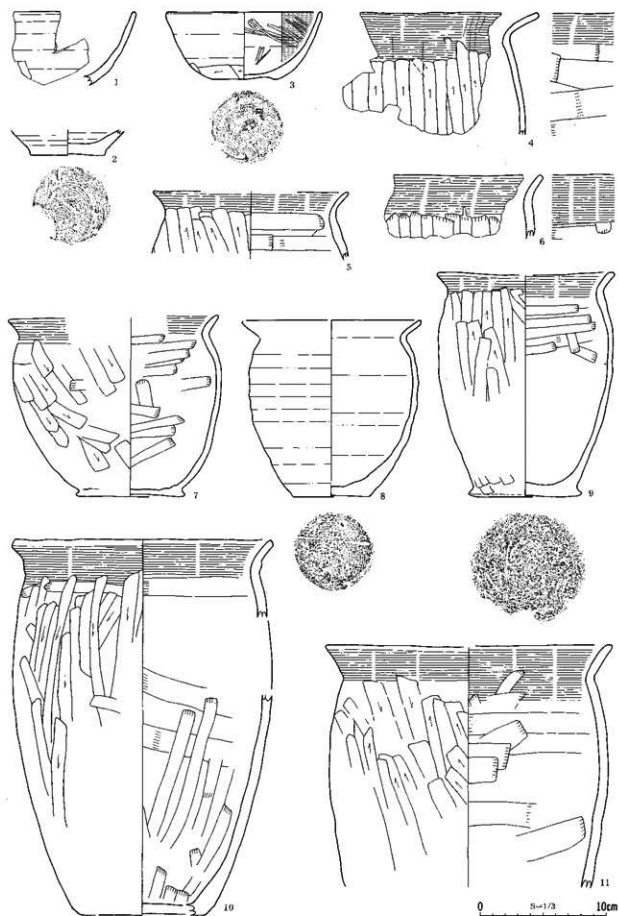


图49 第16号住居跡4



图50 第16号住居跡 5

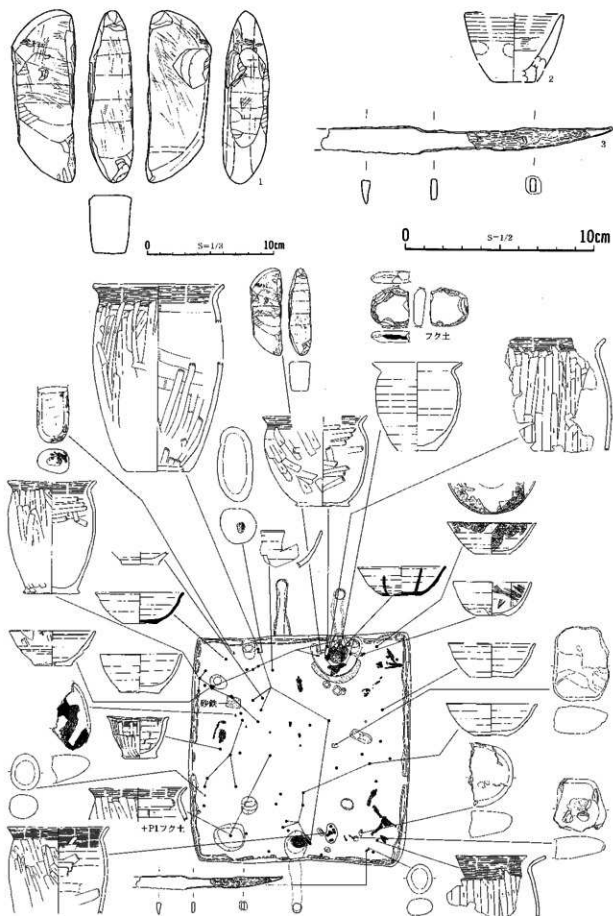


図51 第16号住居跡6

## 第17号住居跡 (SI-17) (図52~55)

〔位置〕 I W・X-121・122グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 東壁4.14m、南壁4.10m、西壁4.25m、北壁4.13mのほぼ方形を呈している。床面積は15.84㎡、主軸方位はN-77°-Eである。

〔壁・床面〕 壁高は35~55cmで、急な立ち上がりである。床面は平坦であり、東側の半分以上が堅く踏みしめられている。

〔カマド〕 東壁の南寄りのところ、壁辺の1/4の場所につくられている。遺存状況は良好であり、天井部はそのまま崩落した状況を呈している。カマド本体は、粘土と地山の第Ⅵ層の灰黄褐色土との混合土を主体につくられている。焚口部底面はやや窪み、燃焼部手前に径35×40cmの楕円形の火床面が形成されている。燃焼部奥は火床面より5cmほど高くなっており、土師器甕の破片が重なり合っているのが見られた。5点の破片を重ね、その周りを別の破片で囲んでいる状況で検出されたが、その重なりは強固なものでなく、むしろ置いたという感じである。支脚とも考えられるが、むしろ意図的に置かれたものと考えられる。また、上部の崩落土からも同じ個体の破片が出土している。煙道部は地下式の構造である。壁辺から1.07mの長さで、煙出孔へ向かって緩やかに下降している。煙出孔は径29×33cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは50cmである。煙出孔の中央には粘土塊が、底部付近では土師器甕の破片が2点出土した。この2点の破片はそれぞれ別個体のもので、燃焼部に置かれた土器片やその上部から出土した土器片とも接合し、2個体に復元することができた。なお、後述するが、これらの土器は住居堆積土や他の住居から出土したものと接合関係にある。

〔壁溝〕 北壁の一部が途切れるが、ほぼ一周している。幅10~15cm、深さ10~15cmである。

〔柱穴・ピット〕 北壁際の壁溝内に3個、北東隅に1個柱穴状のピットを検出したが、柱穴配置は不明である。

〔堆積土〕 9層に分層できた。上部の第1・2層は自然堆積であり、第2層には白頭山火山灰(B-Tm)を微量含んでいる。大半が人為堆積であり、暗褐色土と褐色土で占められている。

〔出土遺物〕 住居堆積土から、多量の遺物が出土した。土師器では坏の破片約100点、甕の破片500点、ミニチュア土器の破片10点、須恵器11点がある。このうち、19点の土師器と5点の須恵器を図示したが、接合状況は出土量に比べるとあまり良くなく、他の住居跡から出土した遺物との接合関係にあるものが目につく。他の住居跡から出土した例としては、図54-6 (第3号住居跡堆積土と)、13 (第14号住居跡堆積土と)、14 (第14号住居跡堆積土・床面直上、第15号住居跡堆積土と)のほか、図79-3 (第1号鉄関連遺構床下Bカマド確認面・ピット3堆積土・第8号住居跡床面と)、図76-9 (第1号鉄関連遺構堆積土と)、図77-1 (第1号鉄関連遺構床面と)、図33-7 (第11号住居跡カマド煙道部と)、図43-4 (第14号、15号住居跡堆積土と)等の例がある。

このうち、図54-13、14は前述のカマド燃焼部底面におかれた土器や堆積土及び煙出孔から出土したものと接合関係にあり、13は離れた地点から出土したものと接合関係にある。13、14ともに短い口縁部を有し、胴部上半の肩の張る器形であることから、同一時期のものと考えられる。また、この2点の土器の出土状況から、カマドの燃焼部底面に破片を重ねておくと同時に煙出孔にも粘土塊とともに廃棄し、残りの破片を住居内に廃棄する意識的な行為をうかがうことができる。

石器は砥石と台石が出土した。図55-10の砥石は扁平な自然礫の片方の平坦面を利用しているものである。石材は流紋岩である。使用面は滑らかな面を形成しているが、他の砥石のように研ぎ痕は明瞭でない。土製品は、羽口の小破片10点と土玉5点（床面直上から2点、堆積土から3点）、名称不明のもの2点が出土した。土玉は径が約1cm大のものから3cm大のものが見られ、うち1点に貫通孔が見られる。名称不明の図55-16は径2.3×2.9cm、厚さ9mmの楕円形を呈し、中央に穴を有するようにつくられている。かなり粗雑なつくりで、成形時の粘土をこねた跡跡が残っている。また、図55-17は厚さ1.2mmの棒状のもので、端部には2個の穴が穿たれている。うち1個は貫通し、1個は途中で止まっている。

鉄滓は梶型鉄滓の破片・細片と多孔質の滓及び少量の流動滓が出土した。総重量は2,308.2gで、金属探知器に反応したものは1,099.1gである。また、砂鉄913.8gも出土した。

以上の他に、炭化したオニグルミ2点、カマドの構築材である焼けた粘土塊少量、縄文土器（後期）1点が出土している。

〔小結〕本住居跡の廃絶後には、多量の遺物が廃棄されている。とくにカマドに廃棄された遺物に興味深い状況が見られ、カマド祭祀に関連する行為と考えることができる。カマド祭祀については、カマドの破壊行為と関連して論じられることが多いが、本住居跡の例はカマドの遺存状況が良好で、故意に破壊された状況にないことが特徴となっている。

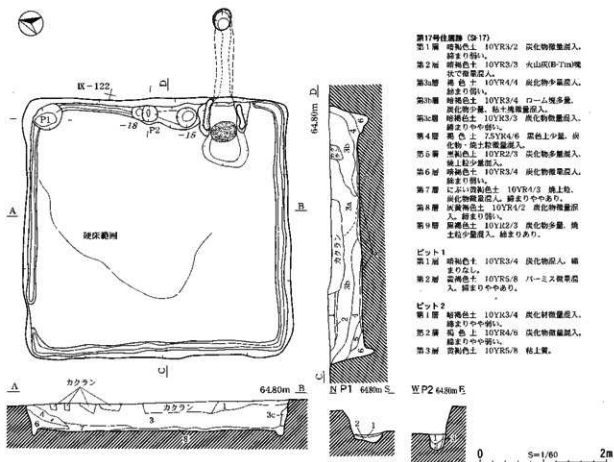


図52 第17号住居跡 1



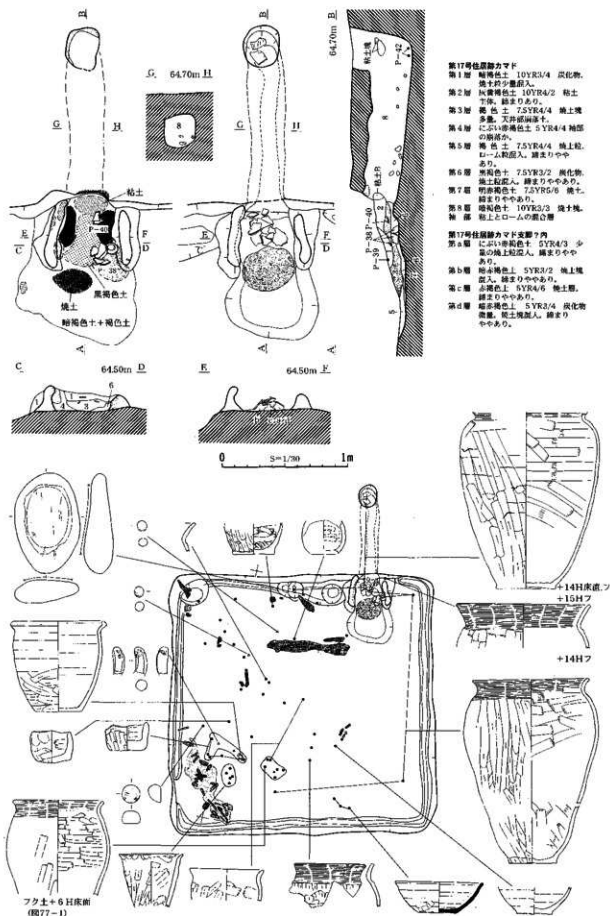


図53 第17号住居跡 2

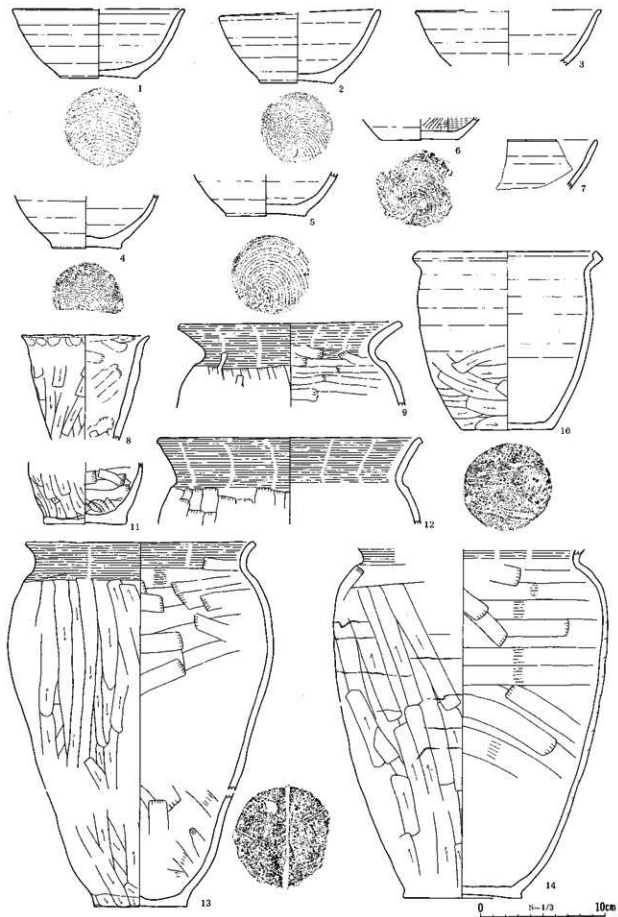


图54 第17号住居跡3

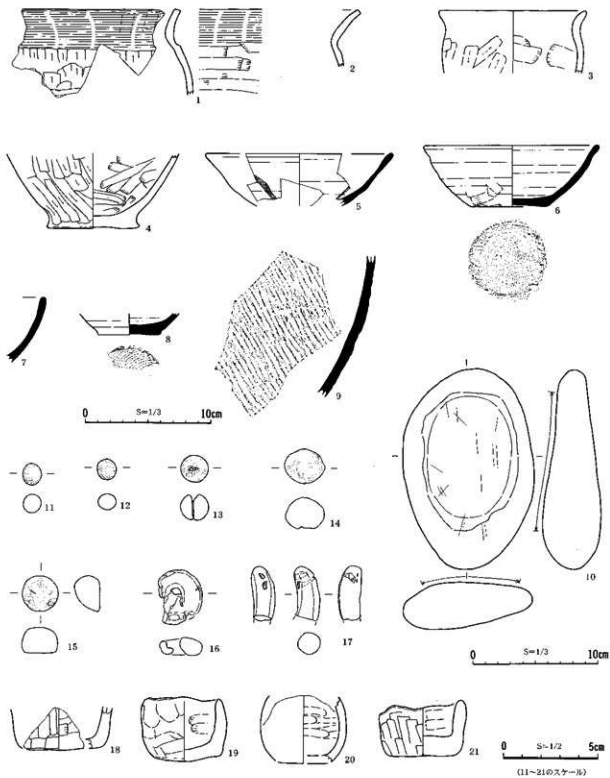


図55 第17号住居跡4

## 第18号住居跡 (SI-18) (図56~58)

〔位置〕 II G・H-122・123グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 南東隅の部分が耕作により不明であるが、東壁3.40m (推定)、南壁3.10m (推定)、西壁3.44m、北壁3.17mのほぼ方形を呈するものと思われる。推定床面積は約10㎡で、主軸方位はN-105°-Eである。

〔壁・床面〕 壁高は東壁9cm、北壁15cm、南・西壁20~30cmであり、急な立ち上がりである。床面は地山を掘りくぼめた後に、地山の明褐色土を主体に黒褐色土を混ぜた土を踏み固めて、平坦にならしている。

〔カマド〕 東壁の南寄りのところにつくられているが、攪乱を受けているため、遺存状況は悪い。構築材である粘土塊は周辺にわずかに見られた程度で、燃焼部底面と煙出孔の底部を検出しただけである。燃焼部底面はやや窪み、20×30cmの楕円形の火床面が見られた。煙道部は破壊されて検出できなかったが、壁辺から1.25mのびるものと推測される。煙出孔は底辺部のみを検出であるが、短軸26cm、長軸37cmの楕円形を呈している。確認面からの深さは35cmである。

〔壁溝〕 検出されなかった。

〔柱穴・ピット〕 東壁の中央に1個(ピット2)検出した。堆積土には、焼土塊や粘土塊を含んでいる。

〔土坑〕 北東隅に短軸57cm、長軸67cm、深さ38cmの楕円形の土坑を検出した(ピット1)。埋められていた土坑である。

〔堆積土〕 7層に分層できた。第1層は自然堆積と思われる層で、白頭山火山灰(B-Tm)を微量含んでいる。これより下位は炭化物や焼土粒を含んだ暗褐色土や黒褐色土が大半で、中央付近には廃棄された焼土主体の褐色土がやや厚く見られた。人為堆積である。

〔出土遺物〕 住居堆積土から多量の遺物が出土したが、復元できたものは少ない。土師器では坏の破片180点、甕の破片780点(小型土器の破片含む)、須恵器の破片4点、石器は敲石2点、台石1点、砥石片1点、鉄器1点、土製品は羽口の破片5点、土玉3点、土鈴?1点が出土した。また、鉄滓は、梶型鉄滓の破片と炉壁の溶融物を含む滓が出土した。鉄滓は大型のものが多く、総重量2,301.7gである。また、縄文土器(後期)の破片5点が出土した。

図57-7は高台付の坏の底部破片、図57-19はへら書きが見られる須恵器壺底部破片である。

図58-1は台石の破損品で、片面には広い敲打痕が見られる。被熱している。図58-2は棒状礫の両端に敲打痕が見られる敲石で、器面には煤状炭化物が付着している。図58-3は扁平礫の両端及び両側面に敲打痕が見られる敲石である。両面は滑らかになっており、片面には線条痕も見られる。

土玉は径1cm前後の大きさで、2点が丸玉、1点が平玉である。丸玉の1点と平玉には貫通孔が穿たれている。図58-7は紐の部分がつくられていないが土鈴に似た土製品である。体部は球体を呈し、その上部にはへら状工具による穴が穿たれている。また、下部には鈴口に似た切り込みが見られる。図58-11は長さ5.5cm、幅1.9cm、厚さ1.1cmの棒状の鉄塊である。表面の部分が1mm前後の厚さで剥がれやすくなっている。

〔小結〕 住居跡廃絶後に多量の遺物が廃棄された住居跡である。カマドの遺存状況は非常に悪い。攪乱によって大部分が破壊されているとしても、カマドは破壊されていた可能性が高い。

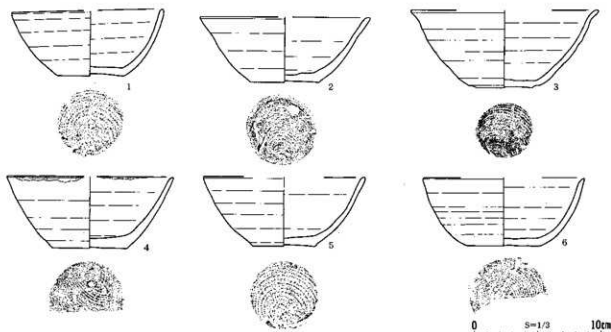
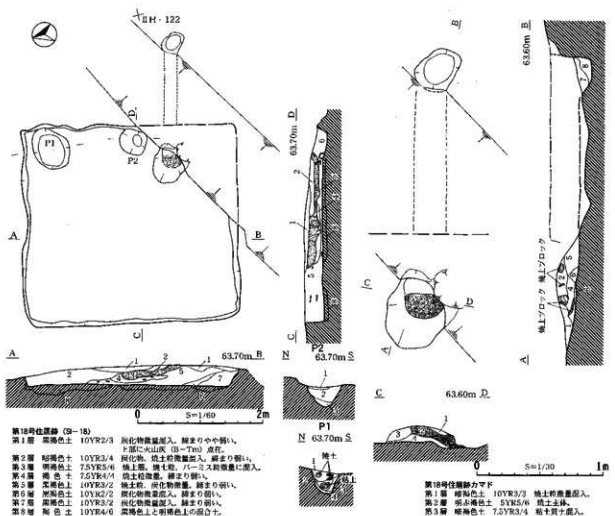


図56 第18号住居跡1

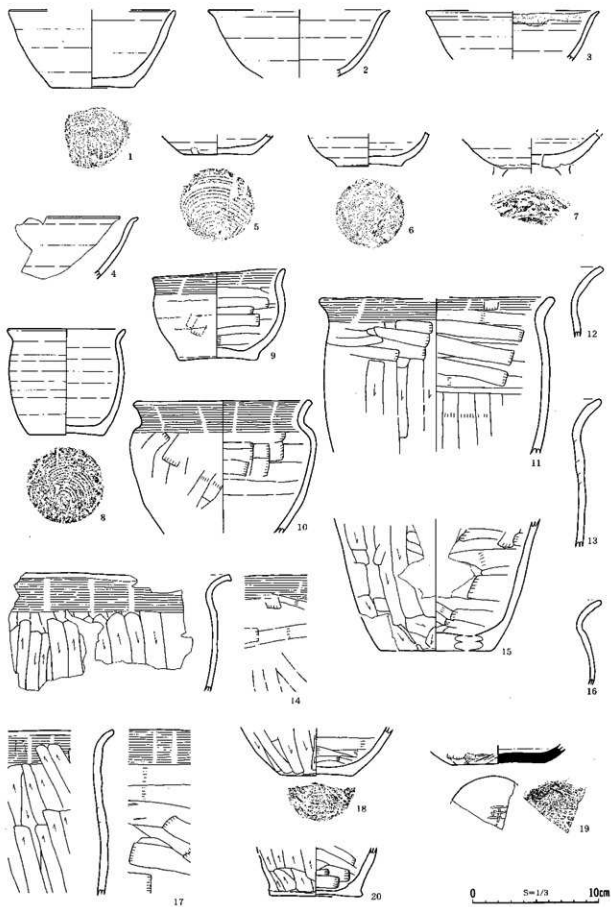


图57 第18号住居跡2

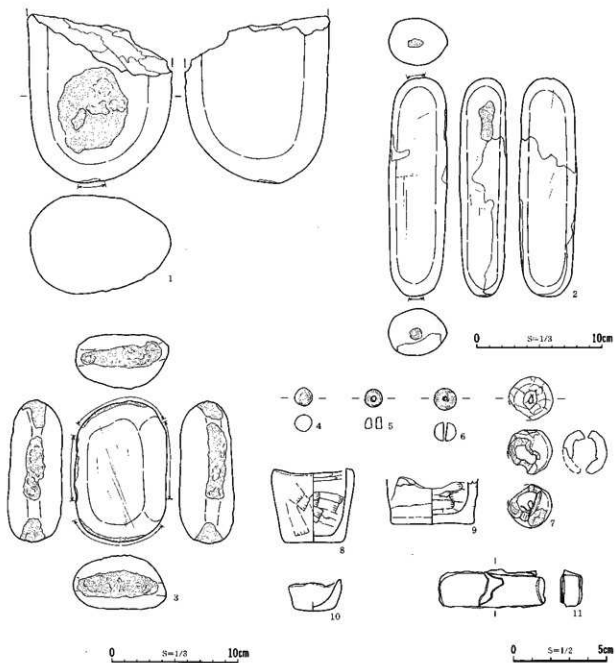


図58 第18号住居跡3

## 第19号住居跡 (SI-19) (図59、60)

〔位置〕ⅡI・J-120・121グリッドに位置している。北側の大半が攪乱を受けており、南側の一部しか確認できなかった。焼失家屋である。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕南壁は4.65m、他は不明である。東壁南側に確認した焼土がカマド火床面の痕跡と考えられることから、主軸方位はN-95°-Eと推測される。

〔壁・床面〕検出できた部分の壁高は25~38cmで、急な立ち上がりを呈している。床面はほぼ平坦であるが、ピット4の東側の部分は削平されている。

〔カマド〕削平されていたものの、東壁の南側のところに、地山が被熱し、赤化している部分を検出した。カマド火床面の痕跡と考えられる。

〔壁溝〕検出した部分では、幅15cm、深さ3~20cmの壁溝を検出した。壁溝内には腰板の一部が検出された。

〔柱穴・ピット〕3個のピットを検出した。このうち、ピット3が柱穴と考えられ、確認の段階で柱痕と思われる暗褐色土の広がりが見られた。短辺17cm、長辺30cmの長方形の角柱と推定され、長辺が東側を向いている。

〔土坑〕南西隅に短軸70cm、長軸1.15mの隅丸長方形の土坑を検出した。深さ37cmであるが、北東側がさらに20cm深く掘り込まれている。堆積土は3層に分層できたが、第1層は住居跡堆積と同じもので、この直下に炭化物と焼土塊の層が見られた。この炭化物層の直下からは被熱した土師器杯1点、壺2点と須恵器杯2点が出土した。

〔堆積土〕3層に分層できたが、大半が黒褐色土で覆われている。堆積土中及び床面には、炭化材が検出されている。

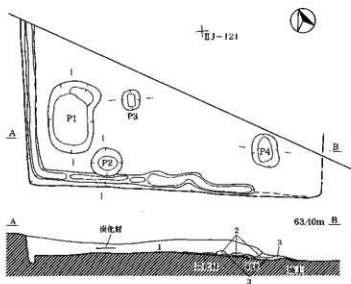
〔炭化材〕炭化材が検出されたが、構造を推定できる状況にはない。また、南壁際の壁溝内には腰板の一部が検出された。腰板の樹種はクリ材である(来年度報告)。

〔出土遺物〕出土遺物は少ない。住居堆積土から土師器の破片28点、床面、床面直上から土師器の破片十数点と須恵器杯の底部破片が出土した。また、床面から2点の土師器の杯(略完形、図60-2、3)が伏せた状態で重なって出土した。さらに、土坑(ピット1)から略完形の須恵器の杯2点(8、9)、土師器の杯1点(1)、土師器の短頸の広口壺(6)と壺の胴下半部(5)、高台付杯の破片(4)などがまとめて出土し、床面から出土した破片と接合したものもある。

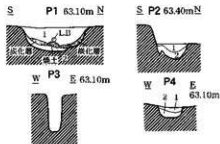
図60-2はやや大ぶりの杯で、胎土に砂粒を含み、ややざらついた感じのもので、内面が黒褐色を呈している。図60-5、6ともにロクロ成形の壺で、6の器外面にはへら書きが見られる。図60-7は壺の破片で粗雑な調整が施されている。このほかに、土玉3点、土製紡錘車(紡輪)1点、鉄器1点(刀子)が出土した。土玉は径1~1.3cm前後の大きさのもので、貫通孔が穿たれている。図60-12の刀子には木質部の一部が残存している。

〔小結〕本住居跡は焼失家屋であるが、南側の一部しか検出できなかった。カマドは残存していないが、東壁の南寄りに構築されていたものと思われる。床面から床面直上にかけて土坑から土師器の杯や壺、端、須恵器の杯などが出土した。また、土玉や紡錘車、刀子等も出土し、大部分を破壊されていたわりには、良好な資料を得ることができた。





第19号住居跡 (2-19)  
 第1層 灰褐色土 10YR2/3 炭化物微量混入。跡まじりあり。  
 第2層 黒褐色土 10YR2/4 焼上焼。焼土粒少量混入。  
 第3層 黒色土 10YR2/1 炭化物微量。跡まじりあり。



**ビット1**  
 第1層 灰褐色土 10YR2/3 炭化物微量混入。伴出跡第1層に対応。土粒も多量含有。住居跡第3層に対応。  
 第2層 黒褐色土 10YR3/4

**ビット2**  
 第1層 灰褐色土 10YR2/3 住居跡第1層に対応。  
 第2層 黒褐色土 10YR3/4 ローム塊混入。

**ビット4**  
 第1層 黒褐色土 10YR3/4 ローム塊多量混入。  
 第2層 黒色土 10YR4/4 ローム塊中量混入。

P1遺物出土状況

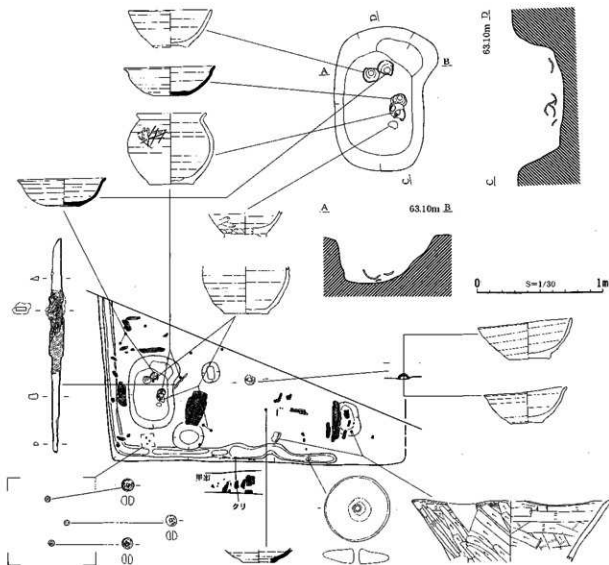


図59 第19号住居跡1

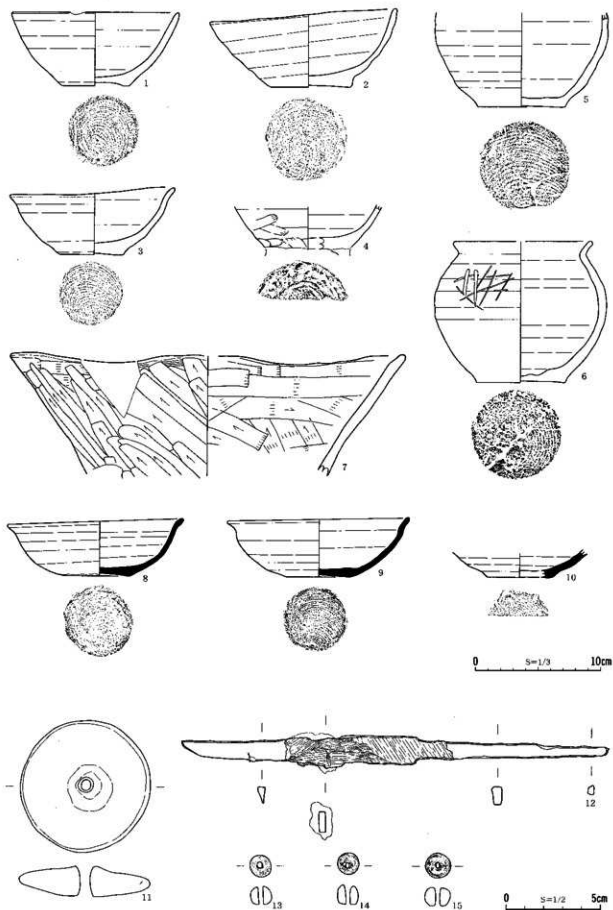


图60 第19号住居跡2

## 第21号住居跡 (SI-21) (図61、62)

〔位置〕 IR・S-109・110グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 東壁4.26m、南壁4.43m、西壁4.23m、北壁4.40mのほぼ方形を呈している。床面積は17.39㎡、主軸方位はN-88°-Eである。

〔壁・床面〕 壁高は50～60cmで、急な立ち上がりである。床面は地山を掘りくぼめてから、平坦にならして構築している。ほぼ全面が堅く踏みしめられているが、とくに東側のカマド周辺が堅く踏みしめられている。

〔カマド〕 東壁の南寄りのところ、壁辺の1/3.5の場所につくられている。遺存状況はやや良好で、カマド材は左右及び前方に広がって散在して検出された。焚口部前方にやや広い前底部を有するカマドで、前底部は短軸1.25m、長軸1.4mの楕円形状に窪んでいる。カマド本体は、灰白色粘土を主体につくられている。確認時における観察では右袖に2個の小ビット、袖を取り除いた段階では左袖の下に2個、右袖下に3個の小ビットを検出した。おそらく、木の棒を芯材としてカマドがつくられたものと考えられる。焚口部直下には径30×43cmの楕円形の火床面が見られ、周辺から2cmほど高くなっている。支脚は検出されなかった。煙道部は壁外へ97cmのび、煙出孔へと緩やかに低くなっている。煙出孔は径32×36cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは80cmである。壁はやや外傾しながらも、ほぼ垂直に立ち上がっている。

〔壁溝〕 東壁の一部が途切れているが、ほぼ一周している。幅20cm、深さ5～15cmである。

〔柱穴・ビット〕 床面から3個、東壁と南壁にそれぞれ1個のビットを検出した。床面から検出したビットのうち、ビット1は埋められていたビットである。また、他のビットは検出位置・規模から見て柱穴とは考えられない。東壁のビットは径約15cmで床面より5cm上、南壁のビットは径約20cmで床面より28cm上にあり、いずれも壁に対して斜め上方から掘り込まれている。また、東壁のビットはカマドや土坑(ビット3)があるためやはずれた位置にあるが、南壁のビットは壁辺の1/3のところに掘り込まれている。上屋を支える斜め材の柱痕の可能性が考えられる。

〔土坑〕 東壁のほぼ中央、カマドの左脇(北側)に短軸60cm、長軸72cm、深さ19cmの土坑を検出した(ビット3)。堆積土に焼土塊やローム粒・塊を多量に含んでおり、検出時には埋められていたものである。壁から50cm外へ張り出してつくられている。

〔堆積土〕 9層に分層できた。上部には土器や炭化物、焼土、ローム粒・塊を含んだ暗褐色土や黒褐色土、その下位にはローム粒・塊が主体の褐色土や黄褐色土の堆積が見られた。人為堆積である。

〔出土遺物〕 住居堆積土から縄文及び弥生土器の破片5点、土師器の破片約200点、須恵器の破片9点、鉄器(鉄斧)1点、土製品1点、床面直上から土師器の破片8点と破礫(焼礫)1点が出土した。図示した遺物は堆積土上部の第1、2層出土のものが多い。図62-2の底部破片は、製塩土器に見られるような円筒状の器形と思われる。胎土・焼成等は良好である。図61-2の土製品は径8mmの円柱状の小型のもので、欠損している。

〔小結〕 カマドに木の棒を芯材として利用した例は第3号住居跡にも見られたが、本住居跡のほうが小ビットの検出数が多く、とくに右袖には並んで検出されたことから、より妥当性がある。また、上屋を支える斜め材と思われる柱穴が検出された例は本住居跡だけである。

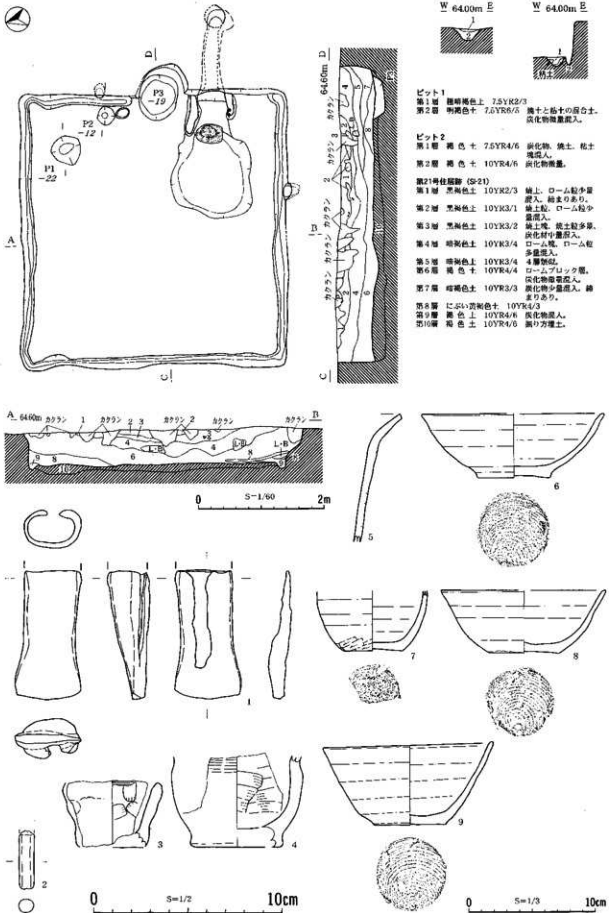


図61 第21号住居跡 1

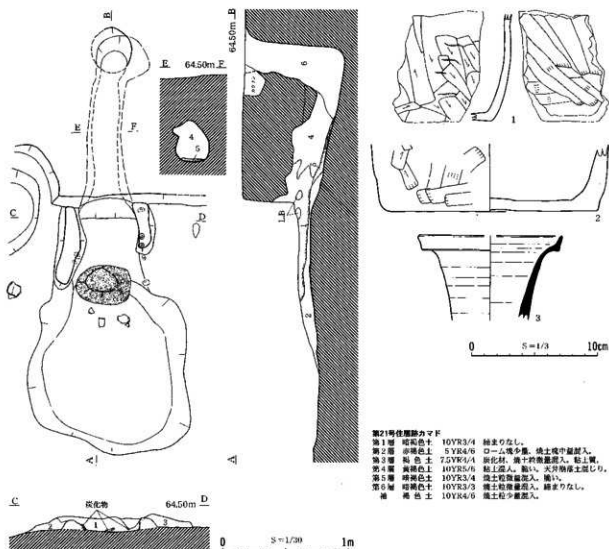


図62 第21号住居跡 2

## 第22号住居跡 (SI-22) (図63, 64)

〔位置〕 I P-110・111グリッドに位置している。焼失家屋である。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 東壁3.46m、南壁3.63m、西壁3.40m、北壁3.60mのほぼ方形を呈している。床面積は11.68㎡、主軸方位はN-83°-Eである。

〔壁・床面〕 壁高は30~40cmで、やや南側が高く、急な立ち上がりである。床面はやや凹凸があるが、中央付近からカマドにかけて、堅く踏みしめられている。また、壁面及び床面の広い範囲が焼けていた。

〔カマド〕 東壁の南寄りのところ、壁辺の1/4の場所につくられている。遺存状況は良好であり、カマド材は左右（とくに左側に多い）に崩落した状況で検出された。カマド本体は灰白色粘土を主体につくられている。燃焼部底面がやや窪み、径44cmの円形の火床面が形成されている。支脚は検出されなかった。煙道部は地下式の構造で、底面は煙出孔へ向かって、緩やかに低く掘り込まれている。

煙道天井部には崩落が見られ、かなり凹凸がある。また、煙道中央部には、ほぼ完形の土師器の坏が出土している。煙出孔は径40cm前後の円形を呈し、深さ65cmである。煙道部堆積土は天井部の崩落を考慮に入れても、黄褐色土が多く見られ、人為的な堆積の様相を呈している。

〔壁溝〕 検出されなかった。

〔柱穴・ピット〕 床面から4個のピットと40個の小ピットを検出したが、柱穴配置は不明である。ピット2は埋まっていたピットであり、検出時は浅い窪みとして確認した。深さ18cmである。ピット3は深さ6cmで、柱穴としてはやや浅い。また、東壁中央付近に検出したピット4は23cmの深さを持つしっかりとしたもので、柱穴の可能性が高い。ピット1は短軸32cm、長軸53cmの楕円形を呈し、東側が袋状に掘り込まれている。深さ8cmである。また、床面から検出した多数の小ピットには規則性が見られず、深さは南西隅のものが38cm～60cm、他は2～30cm前後である。

〔堆積土〕 5層に分層された。暗褐色土が主体となっているが、壁際にはローム粒や焼土粒を含んだ黒褐色土や褐色土の堆積も見られた。人為堆積である。

〔炭化材〕 床面の西側で炭化材を検出した。一部に棒状のものやタルキ状のものも見られるが、大半は板材である。板材は南北方向に4枚が並んでいるものと東西方向に十数枚が平行して見られるものがある。南北方向に並ぶ板材は東西方向に並ぶ板材の下にあり、床面に密着するように検出されていることから、板敷きであった可能性が考えられる。東西方向に並ぶ板材は、床面より約10cm上に検出され、南西隅に広く検出された。板壁がくずれ落ちた可能性が考えられる。これらの炭化材について、3点を選び、樹種同定を実施した。結果は図64に示したように、腰板の一部と見られるNo.11はクリ、東西方向に並ぶ板材のうち1点はクリ、これに隣接する板材はサクラ属という結果が得られた。東西方向に並ぶ板材が、壁の倒れたものとするばクリ材だけでなく、サクラ属も利用されたこととなる。

〔出土遺物〕 住居堆積土から土師器の破片47点、縄文時代後期土器片3点、台石片1点が出土した。また、床面直上からとカマド煙道部からほぼ完形の土師器の坏が出土した。

〔小結〕 炭化材の検出状況から、本住居において板敷きの場があった可能性を考えることができる。また、住居やカマド煙道部の堆積状況からは人為的な堆積状況が見られ、住居焼失後のある段階で埋め戻しが行われたことが推測できる。本住居跡のカマドの遺存状況は良好であり、カマドの破壊行為が行われたかどうか、判断が難しいが、他の住居跡例からすれば、焼失家屋にしてはカマドの残りが悪いように思われる。住居焼失後にカマド破壊が行われた可能性と住居廃絶に際してカマド破壊が行われ、火放しによって住居が焼失した可能性も考慮に入れる必要がある。また、土師器の坏が煙道中央部から出土していることは、意識的な行為がなければあり得ない出土状況である。これも、カマド祭祀の一つの形態といえるかもしれない。

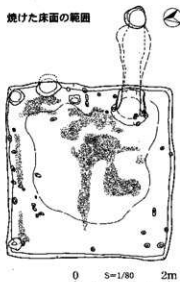


図63 第22号住居跡1



## 第23号住居跡 (SI-23) (図65~67)

〔位置〕 I P・Q-112・113グリッドに位置する。焼失家屋である。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 東壁3.46m、南壁3.60m、西壁3.84m、北壁3.46mのほぼ方形を呈する。床面積は12.19㎡、主軸方位はN-114° - Eである。

〔壁・床面〕 壁高は、南壁が16cmと低い、他の壁は36~45cmである。また、壁溝内の一部に炭化材(腰板)が検出されている。床面は全体に堅緻で、平坦である。また、床面全体が被熱し、炭化物が付着している部分もある。

〔カマド〕 東壁の南寄りのところ、壁辺の約1/3の場所につくられている。カマドの遺存状況は不良で、袖部の残りも悪い。燃焼部底面のやや窪んだところに厚さ2cmの黄褐色土の高まりが見られ、この上に40×45cmのほぼ円形の火床面が形成されている。火床面の壁際中央には、粘土塊の上に土師器の坏を伏せて設置した支脚が検出されている。煙道部は半地下式の構造で、広く掘りくぼめた掘り方に、灰白色粘土を用いて側壁を構築している。側壁の厚さは約10cm、煙道の幅は約50cmで、底面は徐々に高くなっている。長さ約1mである。

〔壁溝〕 ほぼ一周する。幅15cm前後、深さ5~10cmである。

〔柱穴・ピット〕 検出されなかった。

〔土坑〕 検出されなかった。

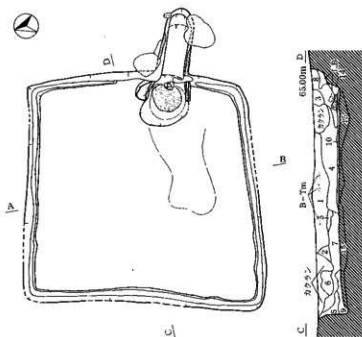
〔堆積土〕 14層に分層できたが、炭化物や焼土粒、ローム粒、粘土塊などを含んだ暗褐色土や黒褐色土が主体である。第1層上部に白頭山火山灰(B-Tm)がブロック状に点在している。また、床面直上の辺りから炭化材や遺物が多く見られるようになる。人為堆積である。

〔炭化材〕 床面から炭化材が出土したが、残りは良い方ではなく、構造を推定できる状況にはなかった。また、各壁の壁溝から腰板の一部もされた。炭化材の大半は板材と見られるものが多く、このうちの1点を選び樹種同定を行った結果、クリ材という報告を得た。

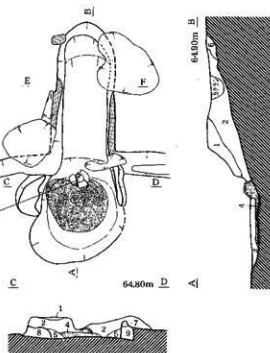
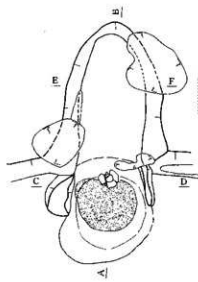
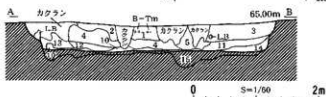
〔出土遺物〕 住居堆積土から土師器の破片220点、土製紡錘車1点、縄文・弥生時代の土器片2点、床面直上から土師器の破片6点、須恵器(坏)の破片2点、床面から土師器の破片104点、石器3点、カマドから支脚に転用された土器1点が出土した。石器は台石2点(図67-1、2)、搬入礫1点(図67-3)が出土した。3は不整形の小型の礫で、器面に鉄錆状の物質が付着している。また、鉄滓は椀型鉄滓の破片1点(141.1g)と金属錆を伴うコークス状の滓2点が出土した。椀型鉄滓は磁着と金属探知器に反応し、コークス状の滓の1点は磁着、他の1点は探知機に反応した。

図67は床面及び床面直上から出土した遺物の出土状況を示した図である。まとまって出土した土器でも、離れた地点から出土した破片と接合している例や一緒に出土した遺物に複数個体の破片が含まれている状況がわかる。住居廃絶後に廃棄されたものと思われる。





- 第23号住居跡 (39-23)
- 第1層 赤色土 10YR2/1 炭化物微量混入。
  - 第2層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物、焼土の微量混入。締まりあり。
  - 第3層 赤色土 10YR2/1 と褐色土10YR4/6の混合土。炭化物微量混入。
  - 第4層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物、焼土微量混入。締まりあり。
  - 第5層 黒褐色土 10YR2/2 と暗褐色土10YR3/4の混合土。炭化物混入。
  - 第6層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物、焼土微量混入。締まり強。
  - 第7層 黒褐色土 10YR2/2 焼土粒、炭化物微量混入。締まりややあり。
  - 第8層 黒褐色土 10YR3/1 と褐色土10YR4/4の混合土。ローム塊少量混入。
  - 第9層 赤褐色土 10YR2/2 焼土粒、炭化物微量混入。締まりあり。
  - 第10層 褐色土 10YR1/7/4 炭化物塊、焼土少量混入。
  - 第11層 暗褐色土 10YR3/3 焼土塊少量混入。締まりあり。
  - 第12層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物少量、焼土粒微量混入。
  - 第13層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物、焼土微量混入。締まりあり。
  - 第14層 褐色土 10YR2/1 炭化物微量、焼土塊少量混入。
  - 第15層 褐色土 10YR4/6 廻り方壁土。



第23号住居跡カマド

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化材多量、焼土粒少量混入。
- 第2層 褐色土 10YR4/4 焼土土の層。焼土塊・焼土塊・暗褐色土の混入。
- 第3層 黒褐色土 7.5YR2/2 天井掘削層土と炭化材塊の混合層。
- 第4層 赤褐色土 5YR4/6 ローム塊微量混入。
- 第5層 暗褐色土 10YR3/4 炭化したローム塊少量混入。
- 第6層 赤い暗褐色土 10YR5/4 ローム粒多量、炭化材微量混入。
- 第7層 赤い暗褐色土 5YR4/4
- 第8層 暗褐色土 10YR5/6
- 第9層 褐色土 7.5YR4/4

図65 第23号住居跡 I

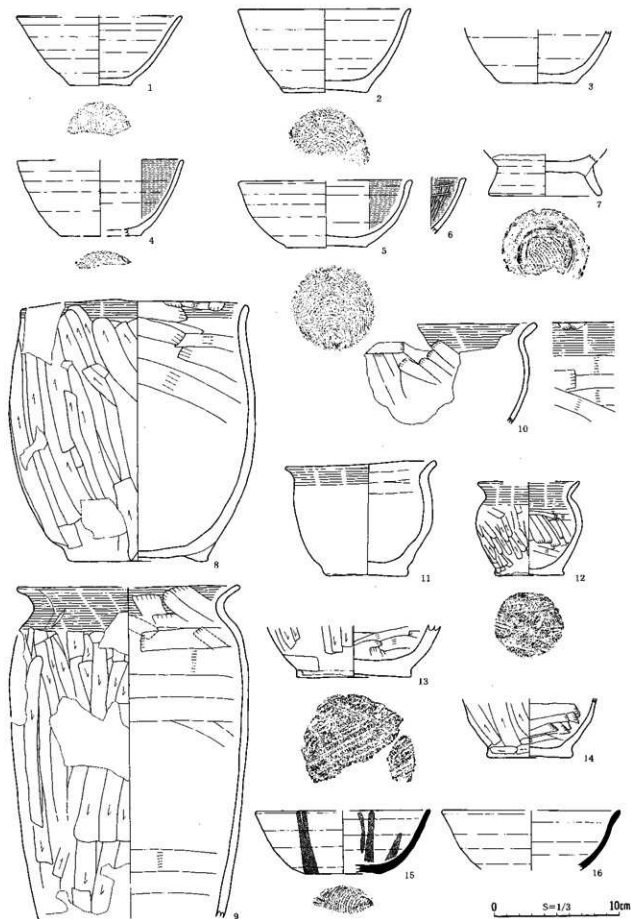


図66 第23号住居跡2

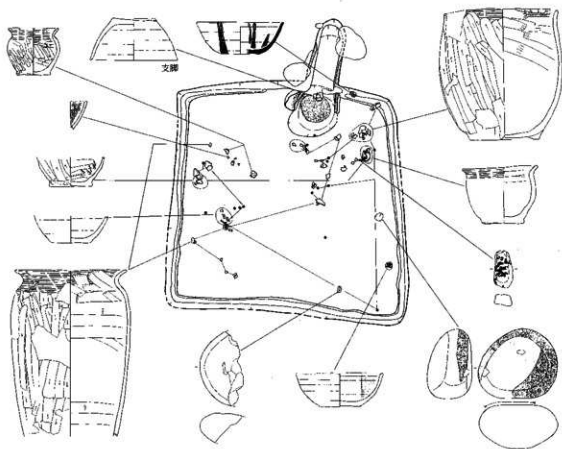
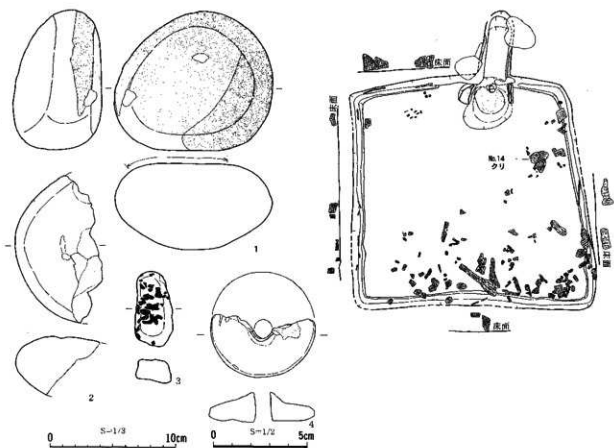


図67 第23号住居跡3

## 第24号住居跡 (SI-24) (図68)

〔位置〕 IS-112グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 東壁2.40m、南壁2.44m、西壁2.42m、北壁2.52mのほぼ方形を呈する。床面積は5.64㎡、主軸方位はN-15°-Eである。

〔壁・床面〕 耕作によって削平されているが、もともと掘り込みの浅い住居のようである。そのため北壁は検出できなかったが、他の壁は8~10cmである。床面は耕作による攪乱を受けているが、範囲を確認することはできた。

〔カマド〕 残存していない。北壁中央付近に火床面を検出したただけである。位置から、カマドは北壁につくられたものと推定される。

〔壁溝〕 検出されなかった。

〔柱穴・ピット〕 検出されなかった。

〔堆積土〕 2層に分層したが、ほとんどローム粒・塊を不規則に含んだ黒褐色土で覆われている。第2層は廃棄された焼土である。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 住居堆積土から土師器の破片68点、須恵器(坏)の破片2点、弥生時代の土器片1点、床面直上から土師器の破片15点と砥石(図68-4)が出土した。図示したのは、土師器の坏2点と甕の口縁部破片1点、砥石1点であり、住居堆積土及び床面直上から出土している。砥石は小型のもので、一部を破損している。砥面には、礫の平坦面ではなく、3cmほどの狭い側面を利用している。石材は流紋岩である。

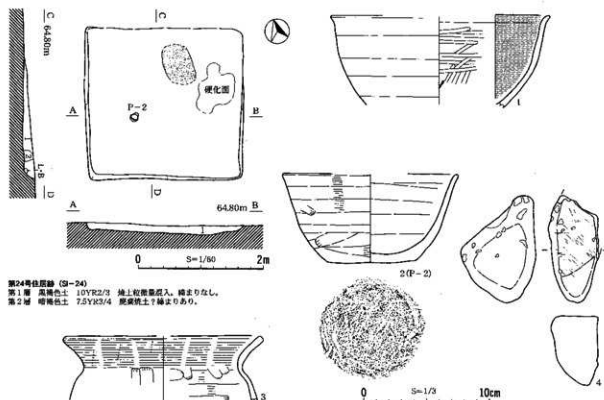


図68 第24号住居跡

## 第25号住居跡 (SI-25) (図69～71)

〔位置〕 I L-98グリッドに位置している。第5号住居跡とともに集落の東端に位置する住居跡である。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 東壁4.40m、南壁3.94m、西壁4.40m、北壁4.00mのほぼ方形を呈している。床面積は16.64㎡、主軸方位はN-83°-Eである。

〔壁・床面〕 壁高は50～65cmで、急な立ち上がりである。床面は地山を掘り込んだ後、地山の土を平坦にならして構築している。また、カマドの周辺を含んだ広い範囲が堅く踏みしめられている。

〔カマド〕 東壁の北寄りのところ、壁辺の1/4の場所につくられている。遺存状況はやや良好である。カマド本体は粘土とピンクロームとの混合土を主体につくられ、土師器(甕)の破片を芯材としている。火床面は床面より若干高く、かなり厚く焼け、赤化している。火床面の中央奥には、粘土塊の上に土師器の坏を伏せて設置した支脚が検出された。支脚(坏)の周囲には、さらに粘土で囲って補強している状況が見られた。煙道部は半地下式の構造である。幅35cm前後で、底面は緩やかに高くなり、壁外へ1.19mのびている。煙出孔は崩落のため明確ではない。確認面からの深さは23cmである。

〔壁溝〕 検出されなかった。

〔柱穴・ピット〕 床面から2個のピットを検出したが、柱穴配置は不明である。

〔土坑〕 西壁際で2基検出した。いずれも埋められていた土坑である。ピット3は径66～68cmのほぼ円形で、深さ16cmである。ピット4は短軸53cm、長軸1.40mの長方形で、深さ20cmである。

〔堆積土〕 6層に分層できた。自然堆積である。壁際では暗褐色土の堆積が見られるが、黒色土や黒褐色土が主体となっている。第4層下部では白頭山火山灰(B-Tm)が見られ、とくに中央付近に多い。また、壁際では十和田a火山灰(To-a)が見られ、とくに北西壁際では厚さ2cmの部分もあった。

〔出土遺物〕 出土遺物は少ない。住居堆積土からは縄文・弥生土器22点のほか、土師器の破片95点、須恵器(坏)の破片4点、床面直上からは土師器の破片35点、ピット1堆積土から土師器の破片41点、須恵器(甕)の破片5点、ピット2堆積土から土師器の破片7点が出土した。また、カマドから支脚に転用された土師器の坏1点のほか、カマド堆積土から土師器の破片59点(芯材)、煙道堆積土(崩落土の上)から須恵器の破片1点が出土した。

石器は住居堆積土から台石片、床面直上から台石、床面から蔽石(図71-1)、台石片が出土した。図70-12は床面直上と床面から出土した台石片が接合したものである。土器について接合状況を見ると、床面から床面直上にかけて出土した遺物でも住居堆積土のものと接合した例が見られる。図70-5は接合した破片の大部分が住居堆積土から出土したものである。また、カマド堆積土から出土した土器はピット1及び住居堆積土の遺物とも接合している。以上のことから、本住居跡に共存する遺物は少なく、大部分は廃棄されたものが主体を占めるものと思われる。

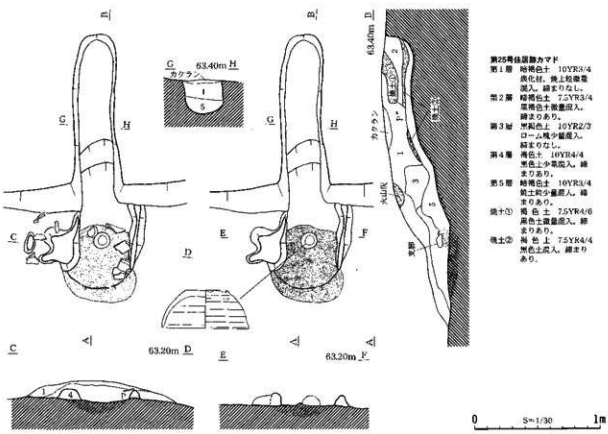
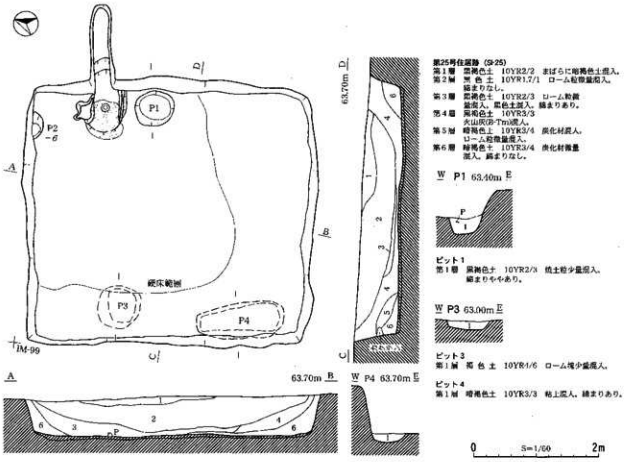


図69 第25号住居跡1

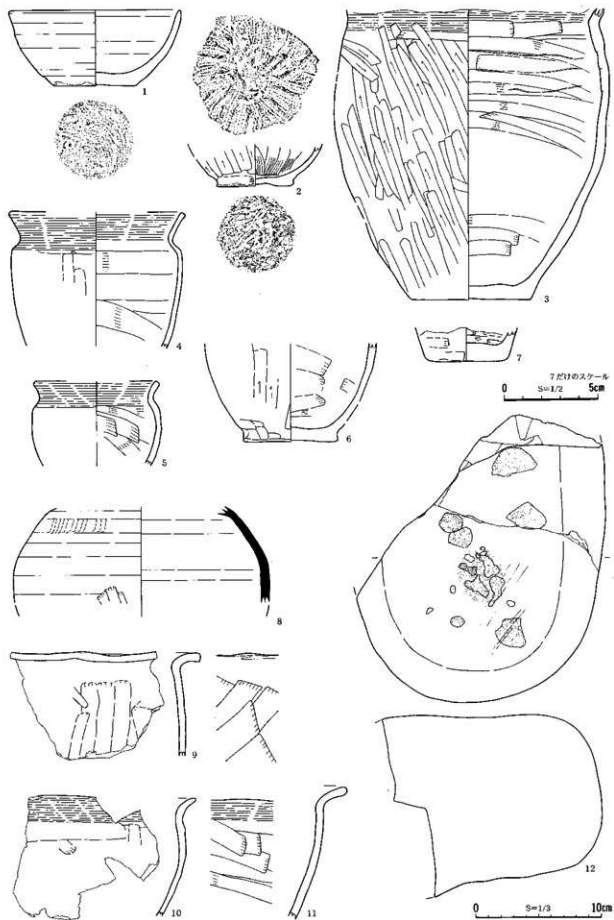


図70 第25号住居跡 2

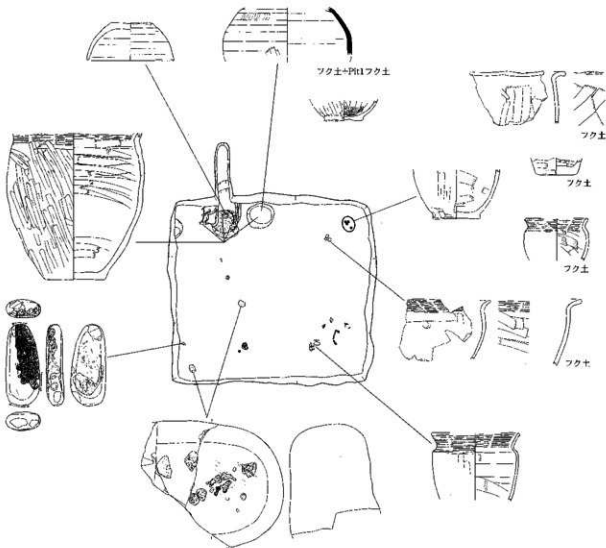
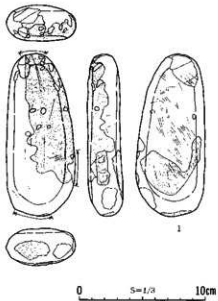


図71 第25号住居跡3



## 第2節 鉄関連遺構

### 第1号鉄関連遺構（第6号住居跡：SI-06）（図99～106）

〔位置〕ⅡB～D-122～124グリッドに位置している。焼失家屋であり、拡張が行われた住居でもある。

〔重複・改築〕重複なし。改築については不明な点が多いが、少なくとも5回以上が考えられる。

〔平面形・規模〕東西壁は6.98m、南北壁は6.55mの方形を呈し、床面積は44.96㎡である。主軸方位はN-65°-Eであるが、煙道部はやや南へ15度ずれている。この煙道部のズレは拡張前のカマドの煙道部を利用した結果によるものである。

〔壁・床面〕壁高は30～40cmで、急な立ち上がりである。壁溝から腰板の一部（炭化材）が検出されている。床面は、平坦で、広範囲に堅く踏みしめられている。また、床面、床面直上から炭化材が出土し、床面が被熱している部分が広範囲に見られた。とくに東側が顕著であり、被熱部分は4cmほどの厚さがあった。

〔カマド〕東壁に3基、床面を剥いだ段階で1基検出した。東壁の北寄りの場所に検出したカマドは重複して2基検出され、新しい方をAカマド、古い方をBカマドとした。また、東壁の南寄りの場所に検出したカマドをCカマド、床面を剥いだ段階で検出したカマドをDカマドとした。

Aカマドは、東壁の北寄り、壁辺の1/3.5のところと位置している。カマド本体は灰白色の粘土を主体としてつくられている。火床面はやや窪み、堅い。支脚は検出されなかった。煙道部は半地下式の構造で、56cmの幅で壁から90cmのびている。なお、このカマドの下には、Bカマドが確認された。

Bカマドは、Aカマドと位置が若干ずれて検出された。火床面と煙道部のみの検出であるが、セクションや煙出孔底部の状況からは、少なくとも4回の改築の痕跡が観察された。最も新しいのは半地下式の構造のものである。セクションの観察からその存在が確認できたが、平面では確認できず、規模については不明である。おそらく、Aカマドとほぼ同じくらいの規模であろう（図74に、推定線で示した）。これより古いものは地下式の構造のものである。煙出孔底面に掘り込まれているピットの数から、少なくとも3回は改築が行われていたことを推測することができるが、後述のCカマドの煙出孔も存在する可能性があることから断定できない。なお、検出した火床面は古い段階のものである。以上のことから、Bカマドには、古段階のものと新段階のものが見られ、煙道部の構造は古段階の地下式から新段階の半地下式の構造へと変遷していることがうかがわれる。

Cカマドは、床面を剥いだ段階で検出したものである。Bカマドの西側にあり、火床面だけの検出である。このカマドを有する住居のプランは不明であるが、北向きのカマドの可能性と東向きのカマドの可能性が考えられ、後者の場合、Bカマドで検出した煙出孔と重複関係にある可能性もある。

Dカマドは、東壁の南寄りのところ、壁辺の約1/3の場所に検出した。煙道部のみの検出であり、壁外に煙出孔が存在する。煙出孔は短軸32cm、長軸36cmのほぼ円形で、確認面からの深さ42cmである。このカマドに対応する住居のプランは不明であるが、壁外のすぐ近くにあることや煙道の長さを考慮に入れると、現住居よりも内側に存在していたことがわかる。

〔壁溝〕一部途切れる部分があるものの、ほぼ一周する。壁溝の幅5～15cm、深さ10～20cmである。

〔柱穴・ピット〕床面から7個、壁外から1個検出した。このうち、ピット4、9、11は主柱穴と考

えられる。なお、これらの柱穴と対応する柱穴にビット15があるが、ビット15は貼り床の下から、しかも半分がAカマドの左袖下から検出されているため、本住居の最終段階では埋められていたことが判明している。住居の改築に伴ってカマドも新たに造り替えられ、ビット15が埋められたことがわかるが、調査では、これに代わる柱穴を検出することができなかった。

Bカマドの新段階では、前述の柱穴配置が該当するものと考えられる。また、床面を剥いだ段階で、新たに18個のビットを検出した。この中には柱穴と考えられるものが多数あるが、このことについては小結で記述する。

[土坑] 6基の土坑を検出した。このうち、ビット3、7は最終段階の住居に伴うことが確実である。ビット3は北東隅に位置し、短軸95cm、長軸1.13mの楕円形を呈し、深さ39cmである。堆積土中から土師器片が出土した。ビット7はカマドの右脇に位置し、短軸68cm、長軸73cmのほぼ円形を呈し、深さ52cmである。

ビット1、2、13、14の4基は埋められていた土坑である。このうち、ビット1、2は確認時において、深さ約20cmの土坑として検出された。床面であった部分が落ち込んだ可能性が考えられ、ビット1では第4層上面、ビット2では第5層上面は堅く、また被熱して、周辺の床面と同じ状況であった。ビット1は短軸70cm、長軸76cmのほぼ方形で、本来の深さは70cmである。ビット2は短軸88cm、長軸1.02mの隅丸長方形で、本来の深さは64cmである。

ビット13は短軸1.50m、長軸1.75mのやや不整形な方を呈し、検出時は10cmほどの窪みとして確認した。上部には貼り床が施され、非常に堅く踏みしめられている。本来は短軸1.50m、長軸1.55m、深さ71cmのほぼ方形を呈した土坑である。南西隅には台石（金床石）が据え付けられており、北側約1.6m離れた場所には鍛冶炉が設置されている。埋められて窪地になってからは、作業場として使われた可能性が考えられる。また、床面を剥いだ段階でビット14を検出した。短軸64cm、長軸68cmのほぼ円形を呈し、深さ67cmの土坑である。

[鍛冶炉] 3基の鍛冶炉を検出した。北壁際のやや西寄りのところに位置し、これらがほぼ南北に直線状に並ぶが、北側の1号炉が最も新しく、南側の3号炉が最も古い。

1号炉は、平面形が短軸38cm、長軸52cmの楕円形で、断面形は深さ15cmの鍋底状を呈している。北側には、炉底に向かってやや傾斜する幅18cm、長さ47cm、深さ5～10cmの溝が付随している。炉底は真っ黒になっており、鍛造剥片が付着していた。また、この下位は2cmの厚さで赤化している部分が見られた。また、堆積土中からは鍛造剥片(17.2g)のほか、鉄滓、羽口の先端部破片、破砕片等が出土している。なお、北側の溝状の部分は、送風口の可能性が考えられ、羽口が装着されていた可能性が高い。現状では大型の羽口（第4号住居跡出土の羽口の平坦面を上にして置いてみた）がすっぽり入る大きさであるが、小型の羽口にしても掘り方と考えると粘土で固定することも可能である。

2号炉は、短軸58cm、長軸73cmの不整形楕円形で、北側が楕円状に深くなっている。この部分でも深く、深さ16cmである。鍛造剥片は、25.1g出土している。

3号炉は径58cmの円形で、深さ7cmである。鍛造剥片が17.8g出土している。

なお、鍛造剥片は、周辺からも約5g出土しているほか、微細な鉄滓が少量出土している。

[堆積土] 12層に分層された。上部は自然堆積で、十和田a火山灰（To-a）を含んでいる。大半は多量のローム粒・塊や焼土粒を含んだ黒褐色土や黄褐色土などで覆われている。人為堆積である。ま

た、炭化材や炭化物も見られ、とくに床面や床面直上に多く見られた。

〔炭化材〕床面及び床面直上から炭化材が少量検出された。構造を推定できる状況にはないが、壁際には腰板の一部が検出された。腰板の一部について、樹種同定を実施したところ、クリ材という結果が得られた。

〔出土遺物〕確認面及び住居堆積土から縄文・弥生時代の土器片20点のほか、土師器の破片222点、須恵器の破片5点、床面から床面直上にかけて土師器の破片136点、須恵器の破片3点が出土した。また、床面を剥いだ段階で、縄文時代のフレイク1点、土師器の破片53点、Bカマド周辺から土師器の破片11点が出土した。多量の遺物が出土したわりには、接合できたものが少なく、図示したものは、破片実測されたものが多い。また、離れた地点のものが接合したり、他の住居跡から出土した遺物と接合したのもも少なくない。他の住居跡のものとの接合関係にある例には、第17号住居跡堆積土と接合した図77-7や18、第15号住居跡床面直上及び第17号住居跡堆積土と接合した図77-5、第17号住居跡堆積土及び第18号住居跡床面と接合した図79-3などがある。また、図76-1は土師器(環)の底部片で、底面には墨書が見られる。図77-22は灯明具に転用された完形の須恵器(環)である。また、図77-16は須恵器(壺)の頸部片で、ヘラ記号が見られる。

石器では、床面直上から台石片9点(図78-3、4)、破礫2点、床面から台石5点(うち4点は破片)、砥石片1点、破礫4点(台石片か)、ピット1堆積土から砥石片1点、カマド火床面から敲磨器の破片1点(図78-2)が出土した。図78-1は住居に据え付けられていた金床石で、長さ92cm、幅45cm、厚さ16cm、重量約100kgの大きなものである。器面の両面に、被熱の痕跡と敲打痕や鉄錆状の物質(鍛造剥片)の付着が見られる。図78-2は第7号住居跡床面から出土したものと接合したものである。また、図78-4は離れた地点から出土したものが接合したもので、器面には鉄錆状の物質(鍛造剥片)の付着が見られる。

鉄器は、住居堆積土から鉄錆片1点、床面直上から棒状鉄器1点(図78-7)、床面を剥いだ段階で紡錘車の棒軸部分2点(図79-6、7)が出土した。棒状鉄器の出土は、刀子や鉄斧、棒軸などの製品だけでなく、それらの素材となる物品の生産も行われていた可能性を示唆するものであり、本遺跡の鉄生産の様相を考える上で、貴重な遺物である。

また、鉄滓は椀型鉄滓、炉壁の溶融物を含む多孔質の滓、流動滓が出土した。椀型鉄滓は略完形品が1点で、ほとんどが破片又は細片である。また、多孔質の滓も多数出土している。出土総重量は7.578.1gで、この内磁着したもの1.010.1g、金属探知器に反応したもの1.179.1gである。さらに、鍛冶炉からは、椀型鉄滓の細片と多孔質の滓が多く出土している。

羽口は、床面から1点と数点の小破片、鍛冶炉からも小破片が数点出土した。図78-5は、床面の離れた地点から出土したものとピット2の下部から出土したものと接合したもので、6は鍛冶炉から出土したものである。

〔小結〕本住居跡は、改築の見られる遺構である。カマドのあり方からや床面を剥いだ段階の調査から、少なくとも5回以上の改築が考えることができる。最終的には、深く掘り込んで床面を構築しているため、改築前の状況は不明なことが多いが、おおむね、以下のような変遷をたどるものと思われる。

図72-3は床面を剥いだ段階の柱穴を基に推定してみた古い段階の状況である。不明瞭ながらも観察することができた床面の輪郭を破線で示している。また、柱穴配置は二通りを考えることができ

だが、推定の域を出ない。この時のカマドは、CカマドとDカマドが該当すると思われる。また、一部分しか確認できなかったが、Bカマドのそばに検出した壁溝は、ぼんやりと見えたラインよりも外側にあり、もう1軒の住居の存在を推定することができる。これが、南側へ延びているものと仮定すれば、DカマドからBカマド（古段階）への改築が行われた可能性もある。いずれにしろ、数回の改築が行われていたことは確かであるが、この段階の住居跡には不明な点が多い。なお、この段階では鍛冶炉は存在していなかった可能性が高い。

図72-2は、最終段階の直前の状況である。前段階の住居から拡張が行われているが、この時の主軸方位は、改築前と若干のズレが生じている。ほとんど同じ場所にカマドを構築したことが、このズレを生じさせる原因と考えられる。カマドはBカマドの新段階と考えられ、地下式から半地下式の構造に変遷している。また、この時の主柱穴はピット4、9、11、15の4本柱である。すでに鍛冶炉がつくられ、鉄生産が行われている。また、ピット13は埋められ、作業場的な空間として利用されていたものと推測される。

図72-1は、最終段階の状況である。カマドはAカマドで、改築によっていくぶん北側へ移動しているため、ピット15の柱穴を余儀なくされている。この時には、1号鍛冶炉が稼働している。最終的には、火災にあって操業を停止するが、それは十和田a火山灰の降下前のことである。

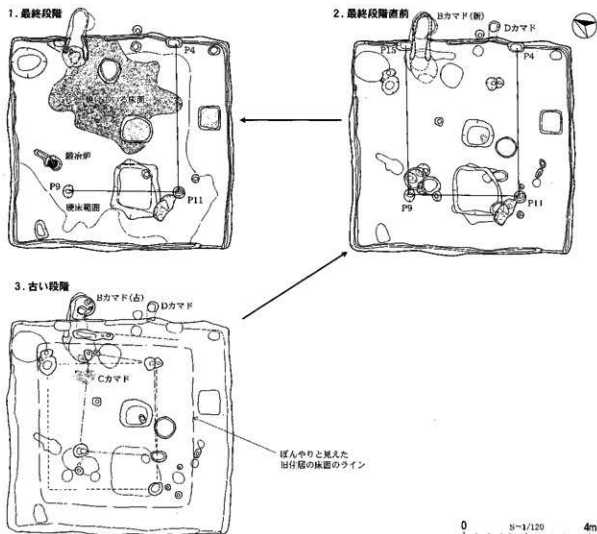
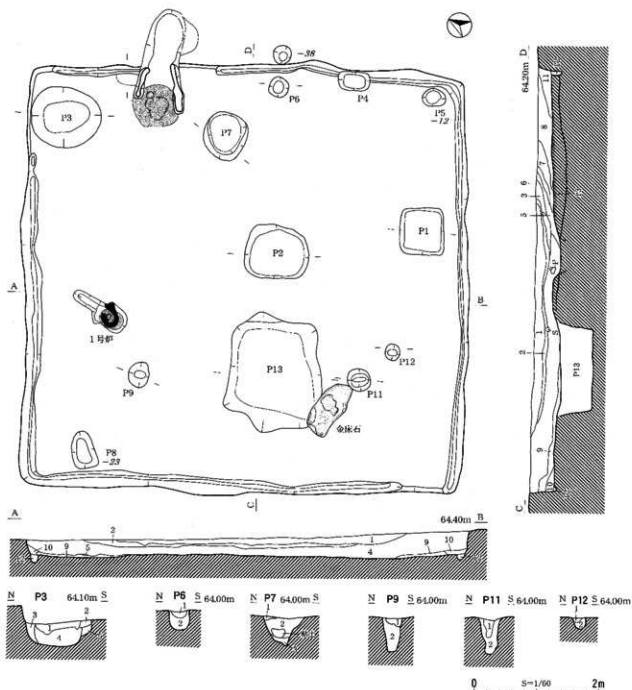


図72 第1号鉄関連遺構1（住居の変遷）



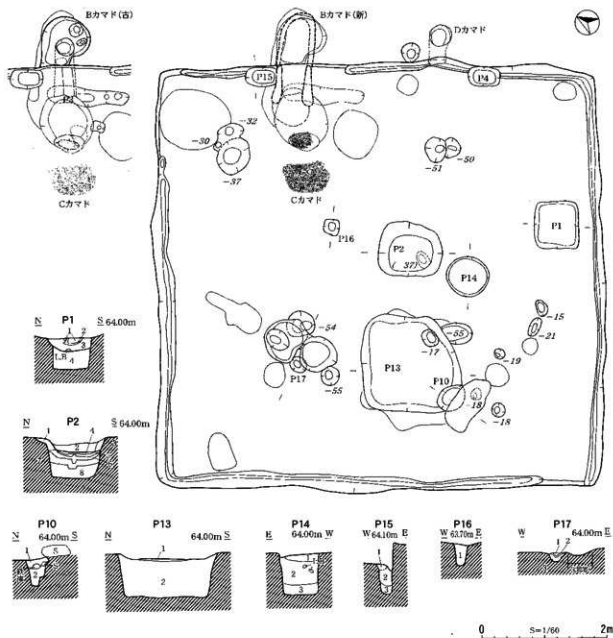
第1号鉄関連遺構 (9-06)

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 ローム少量、炭化物微量混入。
- 第2層 褐色土 10YR4/4 ローム粒、火山灰 (Toa) 塊状に少量混入、締まりなし。
- 第3層 褐色土 10YR4/4 ローム粒少量、炭化物微量混入。
- 第4層 暗褐色土 10YR3/2 ローム塊少量、炭化物微量混入、粘性ややあり、締まりあり。
- 第5層 褐色土+10YR4/5 (砂質) と、濃い黄褐色土+10YR6/4 (粘土質) との混合土。
- 第6層 濃い黄褐色土 10YR4/5 ローム塊少量混入。
- 第7層 濃い黄褐色土 10YR4/5 ローム塊少量混入。
- 第8層 黒褐色土 10YR2/2 ローム少量、粘土塊微量、炭化物微量混入、締まりややあり。
- 第9層 暗褐色土 10YR2/2 炭化物多量混入、粘性あり、締まりややあり。
- 第10層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒、粘土塊微量、粘性、締まりあり。
- 第11層 黒褐色土 10YR2/2 ローム塊微量、炭化物・粘土塊微量混入、粘性・締まりあり。
- 第12層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物微量混入、締まりあり。
- 第13層 暗褐色土 10YR3/3 とローム塊、粘土質の混合、南方。

ビット3

- 第1層 暗褐色土 10YR2/2 炭化物微量、ローム塊中量混入。
- 第2層 褐色土 10YR4/4 炭化物微量混入。
- 第3層 褐色土 10YR4/4 炭化物、粘土塊微量混入。
- 第4層 褐色土 10YR4/6 炭化物微量、粘土塊中量混入。
- 第5層 暗褐色土 10YR3/2 ローム、粘土中量混入。
- ビット6
- 第1層 暗褐色土 10YR3/2 炭化物少量、粘土混入。
- 第2層 褐色土 10YR4/4 炭化物少量、ローム中量混入。
- ビット7
- 第1層 褐色土 10YR4/6 上部粘土層。
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物、粘土混入、締まりあり。
- 第3層 褐色土 10YR4/4 炭化物微量混入、締まりあり。
- ビット9
- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 炭化材微量混入、締まりあり。
- 第2層 濃い黄褐色土 10YR5/4 ローム粒少量混入。
- ビット11
- 第1層 暗褐色土 10YR3/2 締まりあり。
- 第2層 濃い黄褐色土 7.5YR5/4
- ビット12
- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 締まりややあり。
- 第2層 褐色土 10YR4/6 締まりあり。

図73 第1号鉄関連遺構2 (最終段階)



- ピット 1**  
 第1層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物少量混入。  
 第2層 灰色土 10YR2/1 炭化物多量。粘土粒少量混入。  
 第3層 黄褐色土 10YR2/2 地上粒少量混入。  
 第4層 褐色土 10YR4/6 小石・黄褐色土少量混入。
- ピット 2**  
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 地上土多量。締まりややあり。  
 第2層 黄褐色土 10YR3/2 炭化物。粘土粒少量混入。締まりあり。  
 第3層 紅色土 10YR4/4 炭化物。粘土粒少量混入。締まりあり。  
 第4層 赤褐色土 5YR4/1 焼土塊多量混入。地上土少量混入。締まりあり。  
 第5層 黄褐色土 10YR5/6 炭化物。地上土少量混入。締まりあり。  
 第6層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物。地上土少量混入。締まりあり。  
 第7層 赤褐色土 10YR2/2 ローム状少量混入。締まりあり。  
 第8層 褐色土 10YR4/6 炭化物。粘土粒少量混入。締まりあり。
- ピット 10**  
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物少量混入。締まりあり。  
 第2層 褐色土 10YR4/4 炭化物。小石少量混入。締まりややあり。

- ピット 13**  
 第1層 暗褐色土 7.5YR5/6 千鳥厚石。炭土化。堅い。  
 第2層 黄褐色土 10YR6/6 V-VII層の残土。塊の原土上。
- ピット 14**  
 第1層 暗褐色土 10YR6/6 小石。粘土粒少量混入。堅い。  
 第2層 灰色土 10YR2/1 ローム地少量混入。締まりなし。  
 第3層 に近い黄褐色土 10YR5/4 粘土質。炭化物少量混入。
- ピット 15**  
 第1層 黄褐色土 10YR5/6 締まりあり。  
 第2層 褐色土 10YR4/4 粘土粒少量混入。堅い。  
 第3層 に近い黄褐色土 10YR4/3 締まりあり。
- ピット 16**  
 第1層 黄褐色土 10YR6/6 ローム。粘土粒混入。
- ピット 17**  
 第1層 褐色土 10YR4/6 焼土粒少量混入。  
 第2層 黄褐色土 10YR2/3 ローム混入。締まりあり。  
 第3層 に近い黄褐色土 10YR4/3 ローム混入。締まりあり。

図74 第1号鉄関連遺構3 (床面を削いだ段階)



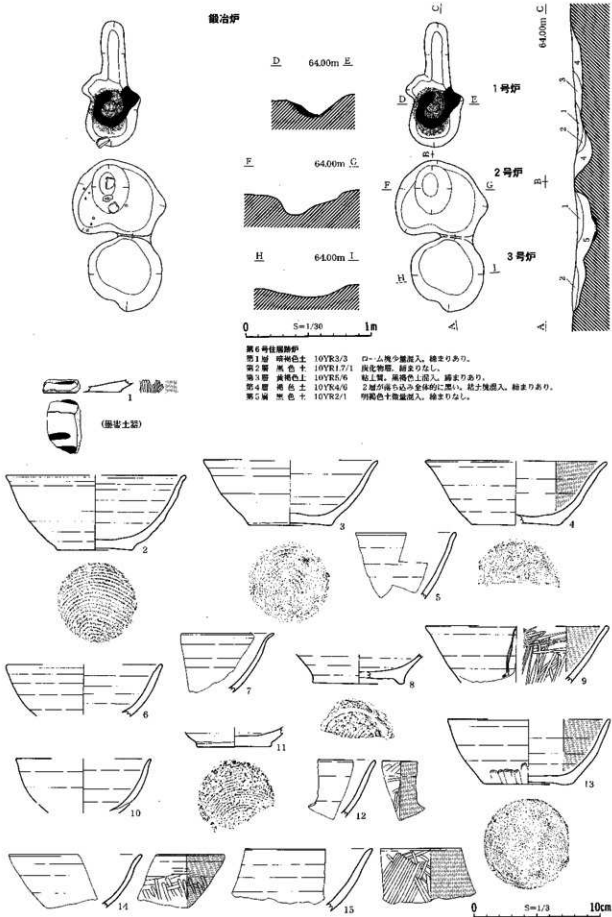


図76 第1号鉄関連遺構4 (鍛冶炉と出土遺物)



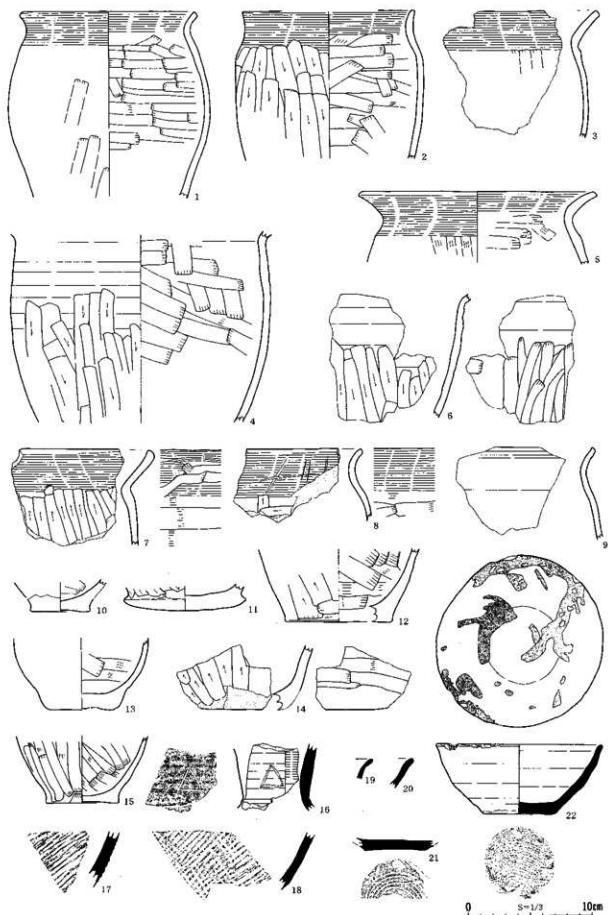


図77 第1号鉄関連遺構（出土遺物）

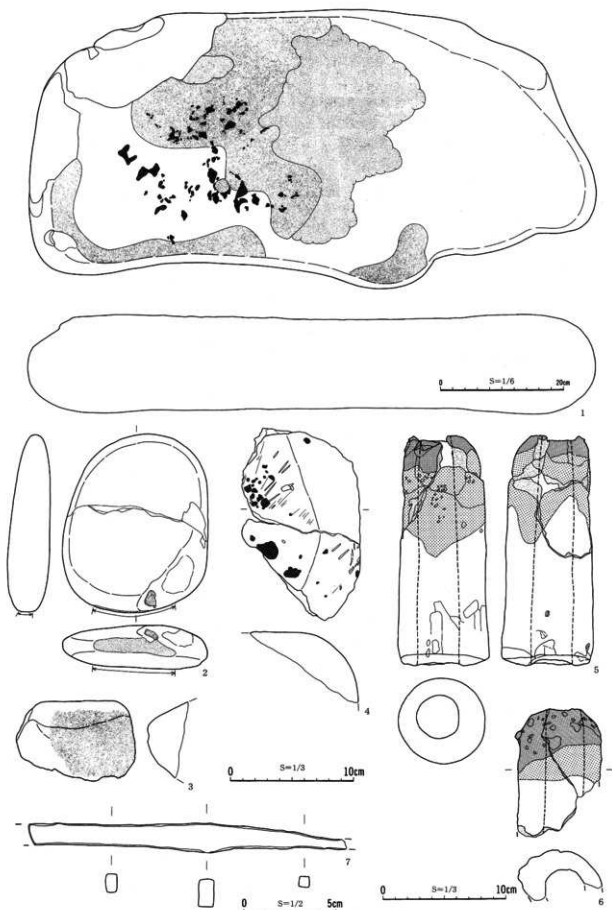


図78 第1号鉄関連遺構（出土遺物）

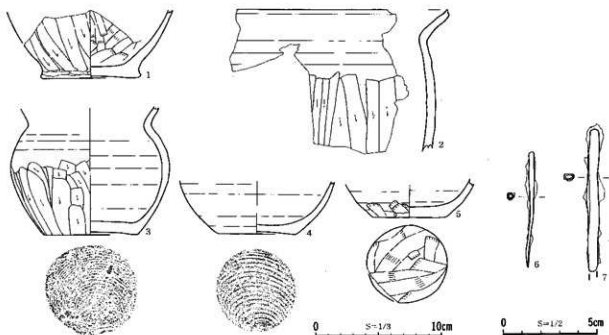


図79A 床下からの出土遺物

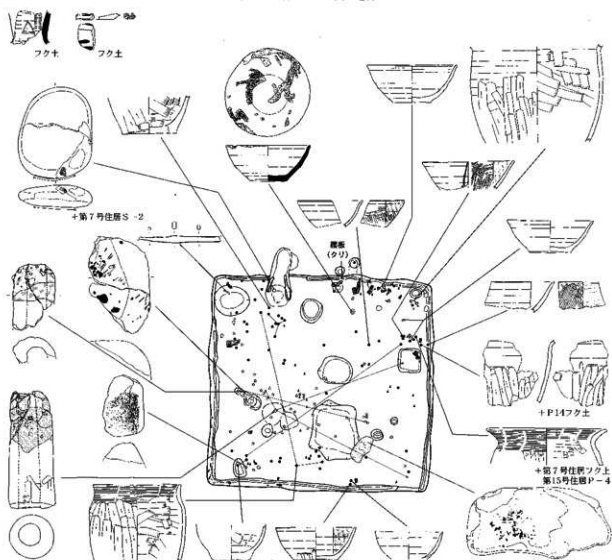


図79B 遺物の出土状況

図79 第1号鉄関連遺構 (出土遺物、遺物の出土状況)

## 第2号鉄関連遺構（第10号住居跡；SI-10）（図80～83）

〔位置〕 IY・IIA-111・112グリッドに位置し、第11号住居跡の東側に隣接している。

〔重複〕 第13号土坑と重複し、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕 東壁3.74m、南壁3.92m、西壁3.75m、北壁3.85mのほぼ方形を呈する。床面積は13.03㎡、主軸方位はN-106° -Eである。

〔壁・床面〕 壁高は25～40cmで、急な立ち上がりである。床面は地山を掘りくぼめてから、黄褐色土と暗褐色土の混合土で貼り床し、平坦にならしている。また、壁際の部分を除いた広い範囲が堅く踏みしめられている。

〔カマド〕 東壁の南寄り、壁辺の1/3.5のところにつくられている。遺存状態は良好である。カマド本体は粘土主体につくられている。燃焼部底面はやや窪み、壁際の辺りで若干高くなっている。火床面はこの間の低くなっているところに見られ、強く焼けている。また、支脚は検出できなかったが、壁際の高くなっている部分に設置されていた可能性がある。煙道部は半地下式の構造で、幅35cmの溝状に掘りくぼめてから、やや砂質気味の粘土で覆っている。煙道底面には凹凸が見られるが、ほぼ水平に1.40mのびている。煙出孔は約30cmほどの円形を呈し、確認面からの深さは43cmである。なお、煙道の壁に近い場所から大型の砥石が出土しているが、被熱の痕跡は見られない。カマド停止に伴って、意図的におかれた可能性が高い。

〔鍛冶炉〕 床面中央に新旧3基の鍛冶炉を検出した。1号炉は最も新しい時期の炉で、短軸65cm、長軸75cmの不整形を呈し、深さ17cmである。堆積土中にはローム粒や焼土粒、炭化物のほか、鉄滓や鍛造剥片を含んでいる。炉底は煤状の炭化物が付着し、真っ黒になっている。これを取り除くと青白色（土色帯では灰オリーブ色；7.5Y4/2）の部分が見られたが、すぐ赤く焼けた面が現れた。また、炉底には鍛造剥片が付着していた。

2号炉は1号炉の東側に隣接し、短軸30cm、長軸43cmの不整形円形を呈している。深さ17cmで、炉底が2面検出された。いずれも褐色土で覆われていたが、下部はやや黒色気味で鍛造剥片を含んでいる。3号炉はこれらの炉の中間に検出された。1号炉と重複し、西側を破壊されている。短軸は28cmで、深さ4cmである。2号炉との新旧関係は不明であるが、おそらく2号炉→3号炉→1号炉の順で操業されていたものと思われる。

〔壁溝〕 検出されなかった。

〔柱穴・ピット〕 7個のピットを検出したが、柱穴配置は不明である。

〔土坑〕 北東隅に短軸56cm、長軸72cm、深さ23cmの土坑を検出した（ピット1）。堆積土から土師器の破片が出土している。

〔堆積土〕 10層に分層できたが、大半はローム粒・塊混じりの暗褐色土と黒褐色土が主体となっている。また、褐色土のローム主体の層や西側の堆積状態などから人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 出土遺物は少ない。土器は住居堆積土から土師器の破片142点、ミニチュア土器の破片2点、床面から床面直上にかけて土師器の破片32点が出土した。また、住居堆積土と床面から縄文土器がそれぞれ1点ずつ出土した。図82-3はロクロ不使用の坏で、内外面が黒褐色を呈する土師器である。また、10は墨書土器の破片で、土師器坏の底部付近のものである。

石器は、鍛冶炉から台石1点、カマド煙道から砥石1点が出土した。図82-12は鍛冶炉から出土

した台石で、一部破損している。全体が被熱し、器面には鉄錆状の物質が付着している。図83-1は大型の砥石で、使用面は4面で、うち1面には幅1mm前後の強い線条痕が見られる。細粒凝灰岩製の軟らかい石材を利用している。

また、床面から羽口の破片4点、住居堆積土から羽口の細片1点が出土した。図83-2は2片が接合したものである。また、2、3の羽口片の器面にはモミ痕が見られる。

鍛造剥片は、1号鍛冶炉で18.8g、2号鍛冶炉で78.5g、3号鍛冶炉で5.1g出土した。

鉄滓は椀型鉄滓の破片・細片と炉壁の溶融物を含む多孔質の滓、及び少量の流動滓が出土した。総重量は3247.9gで、この内磁着したものは主に炉跡から出土した椀型鉄滓の細片で150.8gである。また、金属探知器に反応したものは、1点(11.1g)である。

[小結] カマドは半地下式の構造であるが、煙道が深く掘り込まれている点に地下式の構造に似ている。地下式から半地下式へと変遷する過渡的なものの可能性が考えられる。また、煙道に砥石が残されていたが、意図的な行為と考えられる。カマド祭祀の一形態であろうか。さらに、住居堆積土に墨書土器の破片が廃棄されている点も気になる。墨書土器は本遺跡から2点出土しているが、もう1点は、前述した第1号鉄関連遺構(第6号住居跡)堆積土にも廃棄されていた。この種の遺構にのみ見られる現象であろうか。

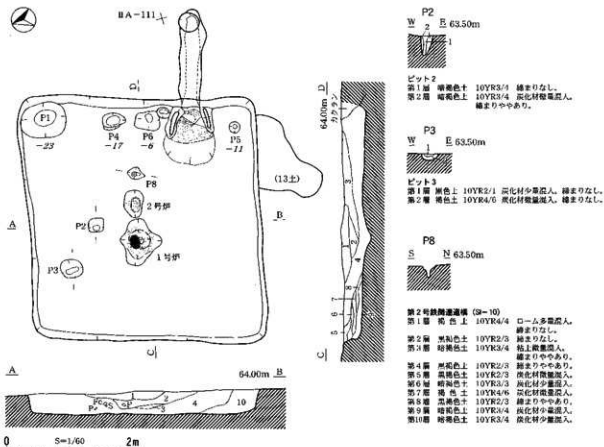
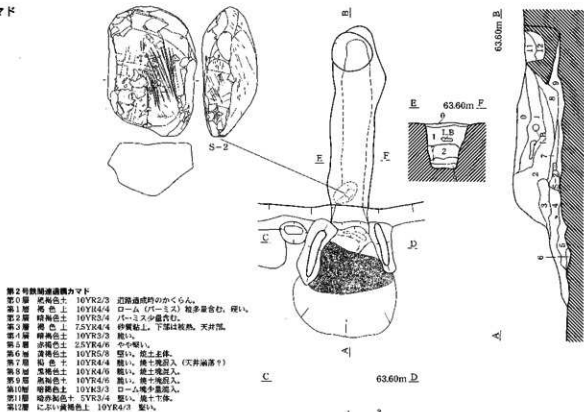


図80 第2号鉄関連遺構1

## カマド



## 鍛冶炉

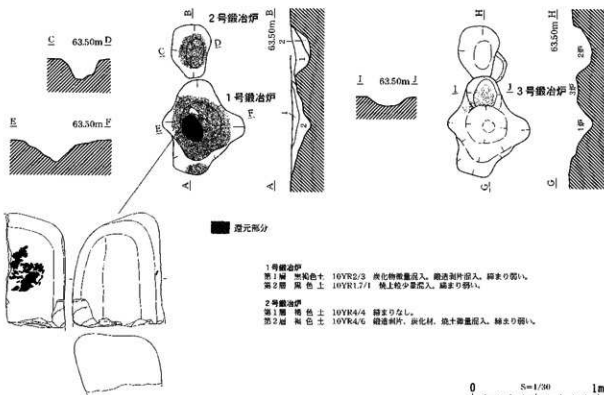


図81 第2号鉄間連遺構 2

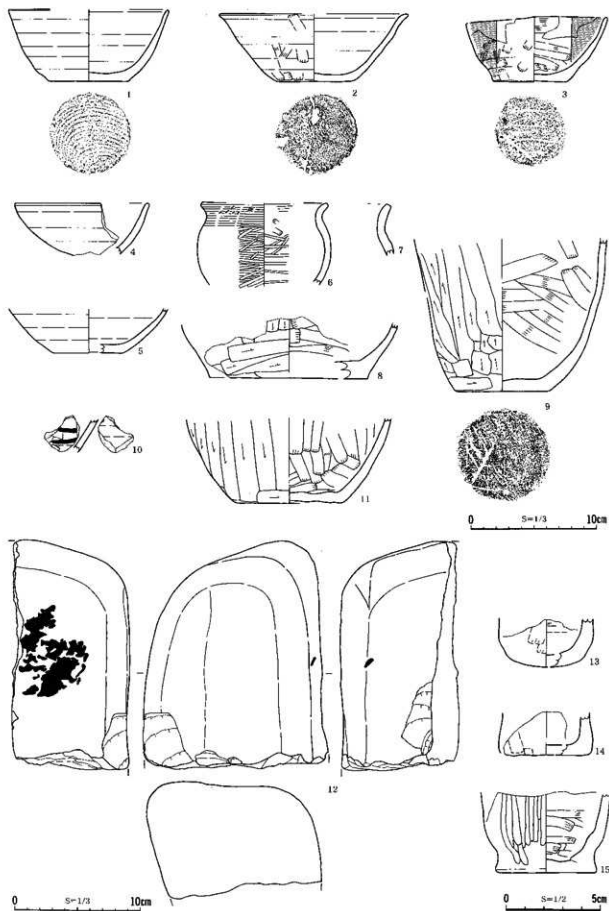


図82 第2号鉄関連遺構 3

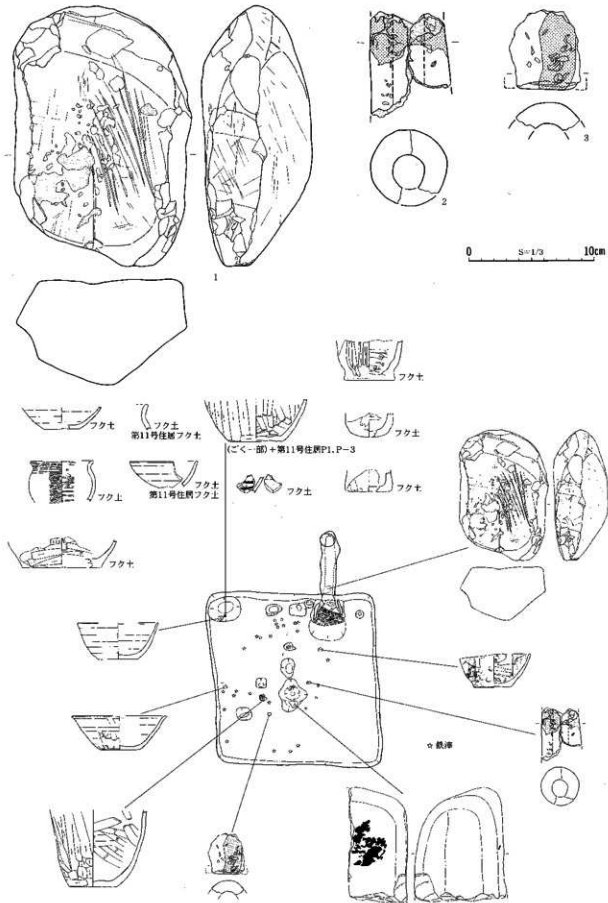


図83 第2号鉄関連遺構 4



### 第3節 掘立柱建物跡

#### 第1号掘立柱建物跡 (SB-01) (図85)

[位置] I W～X・115～117グリッドに位置している。

[重複] 第11号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

[形態・規模] 南北方向柱列が2間、東西方向柱列が3間の建物跡で、平面形は長方形である。長軸方向はN-90°-Eであり、南北方向柱列は真北(座標北)を向いている。

[柱間寸法] 南北方向柱列は東側が5.20m (2.60m+2.60m)、西側が5.40m (2.70m+2.70m)であり、東西方向柱列は北側、南側ともに6.60m (2.20m+2.20m+2.20m)である。

[柱穴] 柱穴掘り方は径が50～70cmで、平面形は円形、楕円形である。深さは35～45cmである。

[出土遺物] なし。

[その他] 東西柱穴列の南側列において、柱穴が重複して検出された。同位置での建て替えが行われたものと考えられる。

#### 第2号掘立柱建物跡 (SB-02) (図84)

[位置] II B・C・118・119グリッドに位置している。

[重複] なし。

[形態・規模] 南北方向柱列が2間、東西方向柱列が2間の総柱の建物跡で、平面形は方形である。長軸方向はN-31°-Eである。

[柱間寸法] 東西方向柱列は北側が3.47m (1.62m+1.85m)、南側が3.53m (1.68m+1.85m)、南北方向柱列は東側が2.8m (1.30m+1.50m)、西側が2.65m (1.15m+1.50m)である。

[柱穴] 柱穴掘り方は径20～35cmで、平面形は円形、楕円形である。深さは10～20cmである。

[出土遺物] なし。

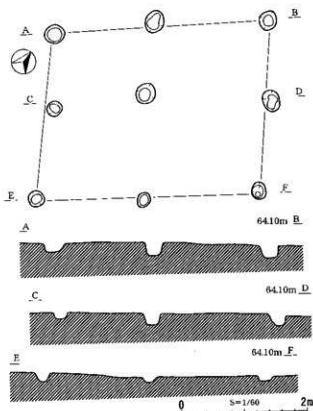


図84 第2号掘立柱建物跡

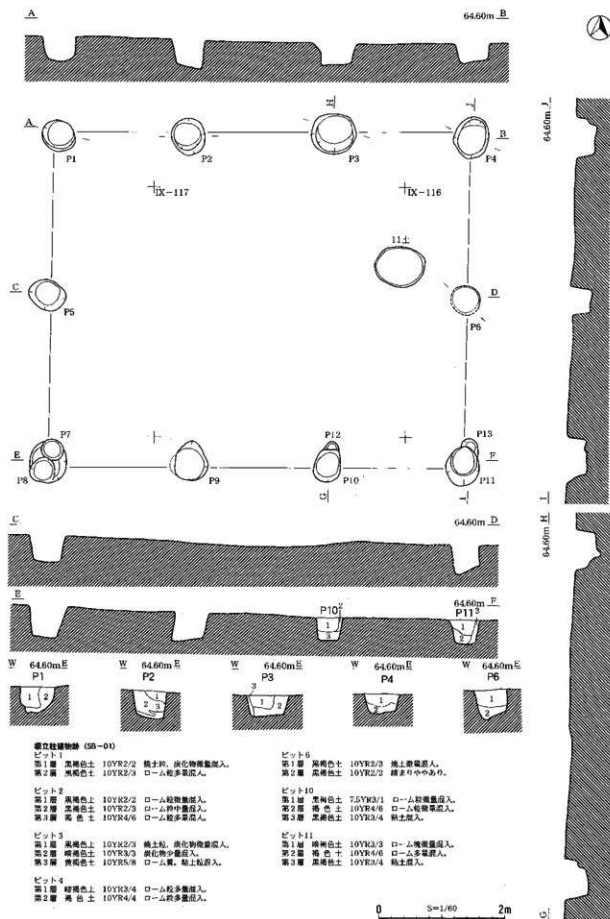


図85 第1号掘立柱建物跡

## 第4節 土坑

### 第1号土坑

平成9年度調査（第255集に収録）。

### 第2号土坑（SK-02）（図86）

平成9年度の調査では約半分しか調査できなかったが、今回の調査で残り半分を調査することができた。前回の調査と合わせて報告する。

〔位置〕 I P・Q-83グリッドに位置する。

〔平面形・規模〕 平面形は短軸1.56m、長軸1.70mの楕円形を呈し、深さ1.09mである。

〔壁・底面〕 壁は垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 9層に分層できたが、おおまかに第1～3層、4～7層、8・9層の三つに分けられる。第1～3層は暗褐色土が主体で、中央に焼土の堆積が見られる。第4～7層は下部に暗褐色土、上部に黒色土と黒褐色土の堆積が見られる。第8・9層は暗褐色土と褐色土の堆積である。

〔出土遺物〕 縄文時代前期とこれ以降と考えられる土器の破片が少量、凹基無茎の石鏃1点、フレイク2点が出土した。

〔年代〕 縄文時代前期以降と考えられるが、明確な時期は不明である。

### 第3号土坑（SK-03）（図86）

〔位置〕 II D-121・122グリッドに位置し、第7号住居跡の北側に隣接している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸1.40m、長軸1.75mの長方形を呈している。深さ41cmである。

〔壁・底面〕 壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。北側がとくに堅く踏みしめられている。

〔堆積土〕 2層に分層できた。上部は暗褐色土で、大半は炭化物を含む黒褐色土で占められている。人為堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器の破片約50点と底面から小礫1点が出土した。また、本土坑から出土した遺物の中に第1号鉄関連遺構（第6号住居跡）と接合したもの（図76-5）もある。

〔年代〕 平安時代。

### 第4号土坑（SK-04）（図86）

〔位置〕 I X-104グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸1.06m、長軸1.12mのほぼ円形を呈する。深さ52cmである。

〔壁・底面〕 壁は垂直に近く外傾して立ち上がる。底面中央部はやや窪む。

〔堆積土〕 ローム粒を含む黒色土が主体である。人為堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から弥生土器が1点出土した。

〔年代〕 不明。弥生時代の可能性もある。

## 第5号土坑 (SK-05) (図86)

〔位置〕 I T・U-103グリッドに位置し、第5号住居跡の西側に隣接している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸1.13m、長軸1.39mの楕円形で、深さ30cmである。

〔壁・底面〕 北壁の部分では垂直に近く立ち上がる。北東から南側の部分では、底面が徐々に高くなっているため、はっきりとした壁をもたない。また、北東部の底面が深さ14cmのピットが掘り込まれている。

〔堆積土〕 暗褐色土、黒褐色土が主体である。上部に焼土の混入が見られる。

〔出土遺物〕 なし。

〔年代〕 不明。

## 第6号土坑 (SK-06) (図87)

〔位置〕 II J-124グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 径が1.05mの不整形円形を呈し、深さ1.10mである。

〔壁・底面〕 壁は垂直に近く立ち上がり、底面中央には、深さ47cmの楕円形のピットが掘り込まれている。

〔堆積土〕 壁際に暗褐色土や黒褐色土、中央部には黒色土の堆積が見られる。

〔出土遺物〕 なし。

〔年代〕 不明。

## 第7号土坑 (SK-07) (図87)

〔位置〕 II E-119グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸61cm、長軸71cmの楕円形で、深さ22cmである。

〔壁・底面〕 壁は垂直に近く立ち上がり、底面は平坦である。

〔堆積土〕 やや締まりのある黒色土と黒褐色土で覆われ、壁際には粘土が混入している。

〔出土遺物〕 なし。

〔年代〕 不明。

## 第8号土坑 (SK-08) (図87)

〔位置〕 I N-80・81グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 一辺が1.80mの隅丸方形で、深さ22cmである。

〔壁・底面〕 壁は垂直に近く立ち上がり、床面は平坦である。壁、床面ともに焼けている。

〔堆積土〕 上部に焼土粒、炭化物を少量含んだ褐色土、下部に炭化材を含んだ黒褐色土の堆積が見られた。

[出土遺物] 炭化材が出土した。

[年代] 平安時代と考えられる。

#### 第9号土坑 (SK-09) (図87)

[位置] I N-80グリッドに位置している。

[重複] なし。

[平面形・規模] 短軸1.05m、長軸1.13mの不整楕円形で、深さ1.34mである。

[壁・底面] 壁は袋状に掘り込まれている。底面は径1.67mの円形で、平坦である。

[堆積土] 2層しか確認していない。上部中央には褐色土が見られ、黄褐色土のブロックが壁際に見られた。これ以外の堆積土は、やや粘性のある褐色土や黄褐色土が全体に観察され、部分的に暗褐色土の混入が見られた。土器片も数点出土した。

[出土遺物] 縄文時代中期の土器片19点が出土した。

[年代] 出土遺物から、縄文時代中期(円筒上層期)と思われる。

#### 第10号土坑 (SK-10) (図87)

[位置] I N-78・79グリッドの緩斜面上に位置している。

[重複] なし。

[平面形・規模] 短軸1.74m、長軸1.77mの方形で、深さ20~48cmである。

[壁・底面] 壁は急な立ち上がりで、底面は平坦である。

[堆積土] 5層に分層された。底面には焼土粒、炭化物を含む黒褐色土が見られ、その上に西側から黄褐色土が廃棄されている。これより上位は自然堆積で、白頭山火山灰を含んでいる。

[出土遺物] 縄文時代中期の土器片1点と、時期不明の土器片15点が出土したが、細片が多い。

[年代] 平安時代。白頭山火山灰の降下以前と考えられる。

#### 第11号土坑 (SK-11) (図87)

[位置] I W-115・116グリッドの第1号掘立柱建物跡の内側に位置している。

[重複] 第1号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。また、これの付属施設である可能性も考えられる。

[平面形・規模] 短軸63cm、長軸78cmの楕円形で、深さ21cmである。

[壁・底面] 壁は垂直に近く立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 締まりのある褐色土のみ確認した。人為堆積である。

[出土遺物] なし。

[年代] 不明。

## 第12号土坑 (SK-12) (図87)

〔位置〕 IH-19グリッドに位置している。調査区の東端に検出した遺構で、沼のほとりに立地している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸96cm、長軸98cmの方形で、深さ13cmの浅い土坑である。

〔壁・底面〕 壁は急な立ち上がりを呈し、底面は平坦である。

〔堆積土〕 3層に分層できたが、黒褐色土と黒色土が主体である。上部の暗褐色土には白頭山火山灰を含んでいる。

〔出土遺物〕 上部から縄文時代後期前葉の土器片11点が出土した。また、底面から炭化材が多数出土した。

〔年代〕 平安時代。白頭山火山灰の降下以前と考えられる。

## 第13号土坑 (SK-13) (図88)

〔位置〕 IY-111グリッドに位置している。第2号鉄関連遺構の南壁東側に検出した。

〔重複〕 第2号鉄関連遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕 全体の形状は不明である。現状で短軸(南北)約1m、長軸(東西)1.15mであり、深さ15cmである。

〔壁・底面〕 壁はやや緩やかに立ち上がる。底面は第2号鉄関連遺構床面より5cm前後高い位置につくられ、やや凹凸が見られる。東側はピット状に15cm窪んでいて、炭化物と焼土が見られる部分がある。また、南側の突出した部分では深さ10cmの小ピットが掘り込まれている。

〔堆積土〕 黒色土と黒褐色土が主体で、焼土粒を含んでいる。

〔出土遺物〕 なし。

〔年代〕 平安時代と思われる。

## 第14号土坑 (SK-14) (図88)

〔位置〕 IR-118グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸95cm、長軸1.28mの楕円形である。深さ26cmである。

〔壁・底面〕 壁は急な立ち上がりで、底面は平坦である。壁及び底面は被熱し、とくに中央付近が強く赤化している。

〔堆積土〕 黒褐色土と黒色上の2層に分層できた。上部には十和田a火山灰が見られ、下部には炭化材が見られた。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器甕の破片3点と炭化材が出土した。

〔年代〕 平安時代。

第15号土坑 (SK-15) (図88)

[位置] I Q-118グリッドに位置している。

[重複] なし。

[平面形・規模] 短軸96cm、長軸1.73mの楕円形で、深さ10cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] ローム粒、焼土粒、炭化物を含んだ黒褐色土を確認した。

[出土遺物] なし。

[年代] 平安時代と思われる。

第16号土坑 (SK-16) (図88)

[位置] I S・T-116グリッドに位置している。

[重複] なし。

[平面形・規模] 短軸1.20m、長軸1.75mの長方形で、深さ29cmである。

[壁・底面] 壁は急な立ち上がりで、底面は平坦である。壁・底面とも被熱している。

[堆積土] 3層に分層できた。上部に暗褐色土が厚く見られるが、底面を覆っているのは黒褐色土である。また、底面から底面直上にかけて炭化材の出土が見られた。

[出土遺物] 堆積土から土師器(甕)の破片5点、底面直上から磁石の破片が出土した。

[年代] 平安時代と考えられる。

第17号土坑 (SK-17) (図88)

[位置] I S-115グリッドに位置している。

[重複] なし。

[平面形・規模] 短軸93cm、長軸1.30mの長方形で、深さ34cmである。

[壁・底面] 壁は垂直に近く立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 3層に分層できたが、ローム粒を含む黒褐色土が主体である。

[出土遺物] なし。

[年代] 平安時代と思われる。

第18号土坑 (SK-18) (図88)

[位置] I U-110グリッドに位置している。

[重複] 第13号住居跡と重複し、これよりも古い。

[平面形・規模] 短軸96cm、長軸1.50mの楕円形で、深さ33cmである。

[壁・底面] 壁は急な立ち上がりである。底面には凹凸が見られ、いくぶん窪んでいる。

[堆積土] 2層に分層できたが、黒褐色土が主体である。

[出土遺物] 縄文時代中期の土器片が1点とカマド構築材と思われる焼成粘土塊の破片が1点出土した。

[年代] 不明である。

## 第19号土坑 (SK-19) (図88)

〔位置〕 IM-95グリッドに位置し、第21号土坑と隣接している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸1.06m、長軸1.13mのほぼ円形を呈し、深さ38cmである。

〔壁・底面〕 壁は急な立ち上がりで、底面は平坦である。

〔堆積土〕 上から黒褐色土、暗褐色土、褐色土の順で堆積している。底面を覆っている褐色土には、黄褐色土が多量に含まれている。

〔出土遺物〕 なし。

〔年代〕 不明。

## 第20号土坑 (SK-20) (図89)

〔位置〕 IT-113・114グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸1.25m、長軸1.33mの隅丸長方形で、深さ17cmである。

〔壁・底面〕 壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦であるが、やや窪んでいる。

〔堆積土〕 締まりのない黒褐色土と締まりのある暗褐色土の堆積が見られた。

〔出土遺物〕 なし。

〔年代〕 平安時代と思われる。

## 第21号土坑 (SK-21) (図88)

〔位置〕 IM-95グリッドに位置し、第19号土坑と隣接している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸1.33m、長軸1.48mの楕円形で、深さ47cmである。

〔壁・底面〕 壁は急な立ち上がりで、底面は平坦である。

〔堆積土〕 締まりのある黒色土と黒褐色土の堆積が見られた。

〔出土遺物〕 なし。

〔年代〕 不明。

## 第22号土坑 (SK-05) (図89)

〔位置〕 IP・Q-110グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸83cm、長軸96cmの不整楕円形で、深さ35cmである。

〔壁・底面〕 壁は緩やかに立ち上がり、底面は窪んでいる。

〔堆積土〕 6層に分層できた。下部には褐色土が厚く、上部では暗褐色土や焼土の堆積が見られた。

〔出土遺物〕 なし。

〔年代〕 不明。



### 第23号土坑 (SK-23) (図89)

[位置] I P・Q-101グリッドに位置している。

[重複] なし。

[平面形・規模] 短軸1.22m、長軸1.32mのほぼ円形で、深さ36cmである。

[壁・底面] 壁は急な立ち上がりで、底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できたが、上部に柔らかな黒色土が厚く堆積し、下部に締まりのある黒褐色土が堆積している。

[出土遺物] なし。

[年代] 不明。

## 第5節 溝状土坑

### 第1号溝状土坑

平成9年度調査 (第255集に収録)。

### 第2号溝状土坑 (SV-02) (図89)

[位置] I V-114・115グリッドに位置している。

[重複] なし。

[平面形・規模] 短軸は40~80cmで、西側が狭く、東側が広い。長軸は3.92mで、深さ55cmである。

[壁・底面] 短軸壁面は垂直に近く立ち上がるが、長軸端の壁はやや緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] ローム塊を含んだ黒褐色土の堆積が見られた。

[出土遺物] 上部から、縄文土器1点と土師器の破片9点、須恵器甕の破片1点が出土した。

[年代] 不明。

## 第6節 焼土遺構

### 第1号焼土遺構

平成9年度調査（第255集に収録）。

### 第2号焼土遺構（SN-02）（図89）

〔位置〕 I L-67・68グリッドの斜面下位に位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸1.45m、長軸3.94mの不整形で、東西に長い。厚さ10～15cmである。

〔出土遺物〕 弥生時代の土器片2点と時期不明の土器片1点、搬入礫1点が出土した。

〔年代〕 不明。

### 第3号焼土遺構（欠番）

### 第4号焼土遺構（SN-04）（図89）

〔位置〕 I Q-116グリッドに位置している。基本層序第IV層下位で確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸38cm、長軸45cmの楕円形である。基本層序第V層上面が焼けている。

〔出土遺物〕 なし。

〔年代〕 不明。

### 第5号焼土遺構（欠番）

### 第6号焼土遺構（SN-06）（図89）

〔位置〕 I L-96グリッドに位置している。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 短軸43cm、長軸45cmの不整形である。基本層序第V層上面が焼けている。

〔出土遺物〕 なし。

〔年代〕 不明。

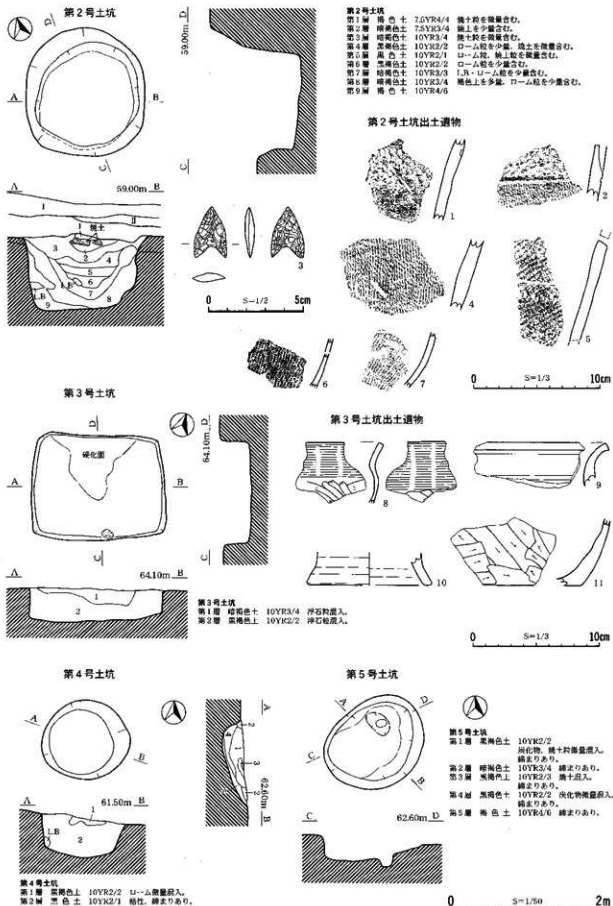


図86 土坑1 (第2号~第5号土坑)

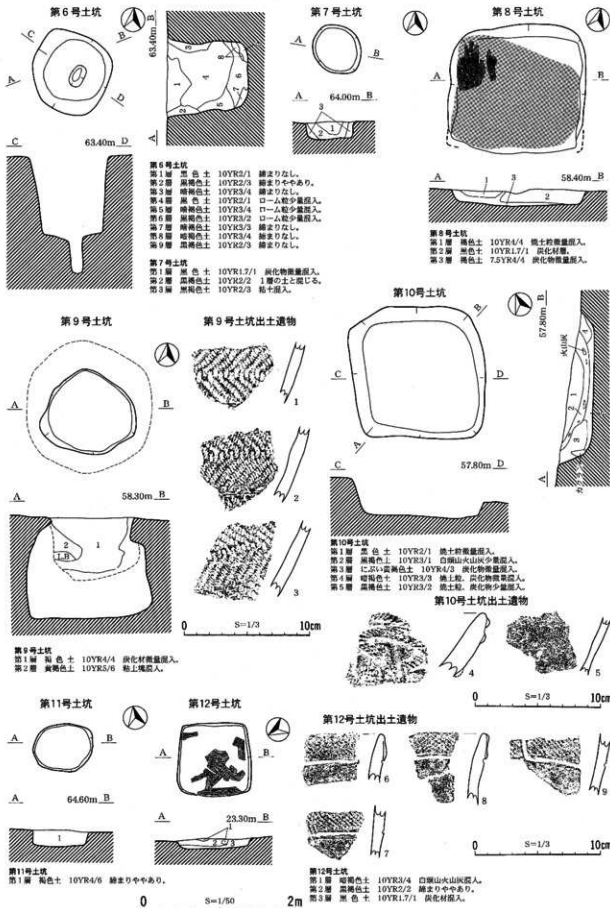


図87 土坑2 (第6号~第12号土坑)

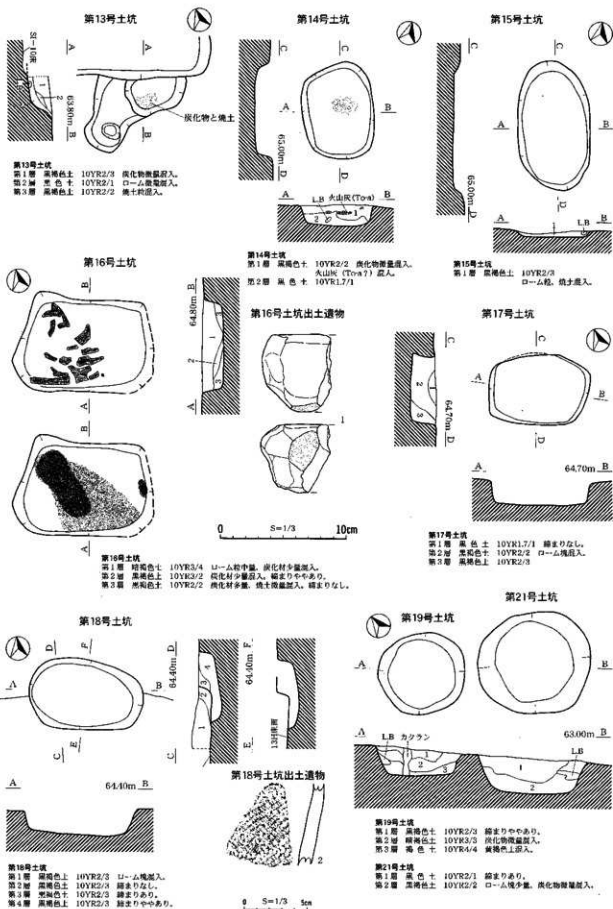
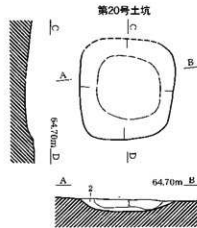
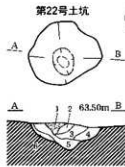


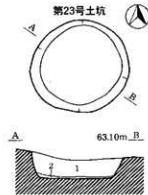
図88 土坑3 (第13号~第19号、21号土坑)



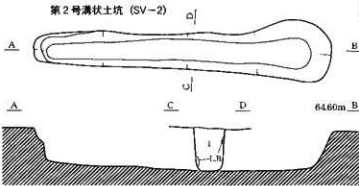
第20号土坑  
第1層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物微量混入。  
第2層 暗褐色土 10YR3/3 締まりあり。



第22号土坑 (SV-5)  
第1層 明褐色土上 5YR5/8 褐色土少量混入。  
第2層 褐色土 10YR4/4 粘土塊混入。  
第3層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土少量混入。  
第4層 暗褐色土 10YR4/4 締まりややあり。  
第5層 褐色土 10YR4/4 ローム中混入。  
第6層 褐色土 10YR4/4 ローム中混入。



第23号土坑  
第1層 黒色土 10YR2/1  
第2層 黒褐色土 10YR2/2 締まりややあり。



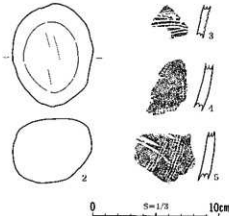
第2号溝状土坑 (SV-2)

第2号溝状土坑出土遺物

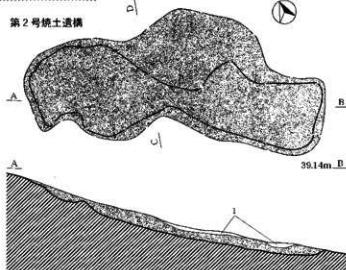


第2号溝状土坑 (SV-2)  
第1層 黒褐色土 10YR2/3 締まりなし、ローム少量混入。

第2号焼土遺構出土遺物

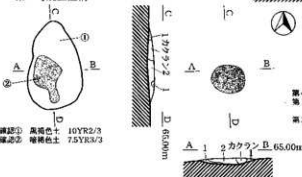


第2号焼土遺構



第2号焼土遺構  
第1層 黒褐色土 7.5YR3/2 粘土多量混入。  
第2層 褐色土 7.5YR3/4 粘土塊、黒褐色土混入。

第4号焼土遺構



跡部① 黒褐色土 10YR2/3  
跡部② 暗褐色土 7.5YR3/3

第4号焼土遺構  
第1層 暗褐色土 10YR2/3  
ローム混。炭化物微量混入。  
第2層 暗褐色土 7.5YR3/3  
粘土粒、炭化物微量混入。

第6号焼土遺構



図89 土坑4 (第20号、第22号、23号土坑)、溝状土坑、焼土遺構

### 第3章 遺構外出土石器

遺構外から出土した土器については、来年度刊行予定の報告書に掲載する事とし、本章では遺構外と平安時代の住居跡から出土した縄文時代の石器を取り扱う（平成12年度調査分も一部含む）。なお、今回の調査で出土した石器（平安時代含む）は以下の表のとおりである。

表1 出土地別石器一覧表

	A区		小計	B区		小計	合計
	遺構内	遺構外		遺構内	遺構外		
石鏃	(1)	4	5	0	0	0	5
石錐	0	1	1	0	1	1	2
石匙	1	0	1	0	2	2	3
石筥	0	2	2	0	0	0	2
楔形石器	0	0	0	16	0	16	16
不定形石器							
スクレイパー	1	3	4	6	8	14	18
Rフレイク	0	4	4	2	5	7	11
Uフレイク	0	3	3	2	3	5	8
フレイク	4	28	32	70	29	99	131
コア	1	1	2	0	2	2	4
敲磨器							
磨石	0	0	0	0	3	3	3
敲石	11	1	12	0	6	6	18
凹石	0	0	0	1	18	19	19
磨石+凹石	0	0	0	1	1	2	2
敲石+凹石	0	0	0	0	2	2	2
半円状扁平打製石器	1	0	1	0	0	0	1
北海道式石冠	0	1	1	0	1	1	2
台石・石皿	43	0	43	1	3	4	47
磨製石斧	1	2	3	0	1	1	4
砥石	11	0	11	0	0	0	11
小計	75	50	125	99	85	184	309

\* A区の遺構内出土石器のほとんどは平安時代。A区遺構外及びB区は縄文時代。

\* ( ) 内の1点は平成9年度の第2号上坑出土のもの。

## 第1節 A区出土の石器

### 石鎌 (図90-1~4)

4点出土した。基部形態から見て、凸基有茎鎌3点、破損して不明のもの1点がある。4は黒曜石製で、石匙のつまみ部に似た基部を持つ。このほかに、第2号土坑から出土した凹基無茎鎌がある。

### 石錐 (図90-5)

1点出土した。棒状錐で両端が尖っている。

### 石匙 (図90-6)

平安時代の住居跡堆積土から1点出土した。縦型で裏面右側縁に光沢痕が見られる。

### 石篋 (図90-7・8)

2点出土した。2点とも両面加工であるが、7の片面(裏面)は縁辺部加工である。7は表面刃部付近に、8は刃部の両面に光沢痕が見られる。

### 不定形石器 (図90-9~15)

平安時代の住居跡から1点、遺構外から10点出土した。スクレイパー4点(9、10、13、14)、Rフレイク4点(11、12、15)、Uフレイク3点がある。9は厚みのある剥片の片側縁に急斜度の調整が加えられている。14は石槍か両面加工の石匙の破片と思われるものである。10は平安時代の住居跡から出土したもので、片側縁に連続した浅型調整が加えられている。11、12は縁辺に粗雑なリタッチが加えられている。

### フレイク

平安時代の住居跡から2点、遺構外から28点出土した。

### コア (図90-16、図91-1)

平安時代の住居跡から1点、遺構外から1点出土した。

### 敲磨器 (図91-4)

1点出土した。敲石の類で、破損品である。棒状礫の端部に敲打痕が見られる。

半円状扁平打製石器 (図91-6) 平安時代の住居跡から1点出土した。片側縁に打痕、もう片方の側縁に敲打痕が見られる。

### 北海道式石冠 (図91-5)

1点出土した。器面は滑らかに整形され、下側面、端部及び中央の溝は敲打痕が見られる。

### 磨製石斧 (図91-2、3)

遺構外から完形品1点、体部破片1点、平安時代の住居跡(第3号住居跡)から刃部破片1点が出土した(3)。2の器体整形は粗雑であり、使用による刃部が破損している。縦斧である。

## 第2節 B区出土の石器

### 石錐 (図92-1)

1点出土した。完形で、大きなつまみ部を持ち、小さく短い錐部を持つ。

### 石匙 (図92-2、3)



2点出土した。2は大きめのつまみ部を持ち、両面とも縁辺部に加工が加えられている。とくに刃部は丁寧な調整となっている。3は小型で、刃部は片面加工である。

**不定形石器 (図92-4~13)**

スクレイパーは8点出土した(4~7、9、11~13)。5は末端が先細で、裏面から急斜度調整が加えられている。6は薄手の剥片を素材とし、両面の縁辺に浅型調整が見られ、一部にノッチが加えられている。Rフレイクは5点(図92-8、10)、Uフレイクは3点出土した。

**フレイク (図92-14)**

29点出土し、このうち、両極剥片が3点含まれている。

**コア (図93-1)**

2点出土した。

**敲磨器 (図93-3~6、図94)**

30点出土した。磨石3点、敲石6点、凹石18点、磨石に窪み孔が見られるもの1点、敲石に窪み孔が見られるもの2点である。図93-4は磨石の両面に複数の窪み孔が見られるもので、器面は滑らかである。凹石には、台石か石皿の破片を利用したものが2点あるが、他は礫素材を利用したものである。図93-7は扁平な円礫の周縁に敲打痕が見られるものである。

**北海道式石冠**

破片が1点出土した。

**磨製石斧 (図93-2)**

1点出土した。完形で、刃部が潰れている。砂岩製。

**石皿・台石類**

3点出土した。

**搬入礫 (図93-8)**

6点出土した。8は流紋岩の柱状節理のものである。

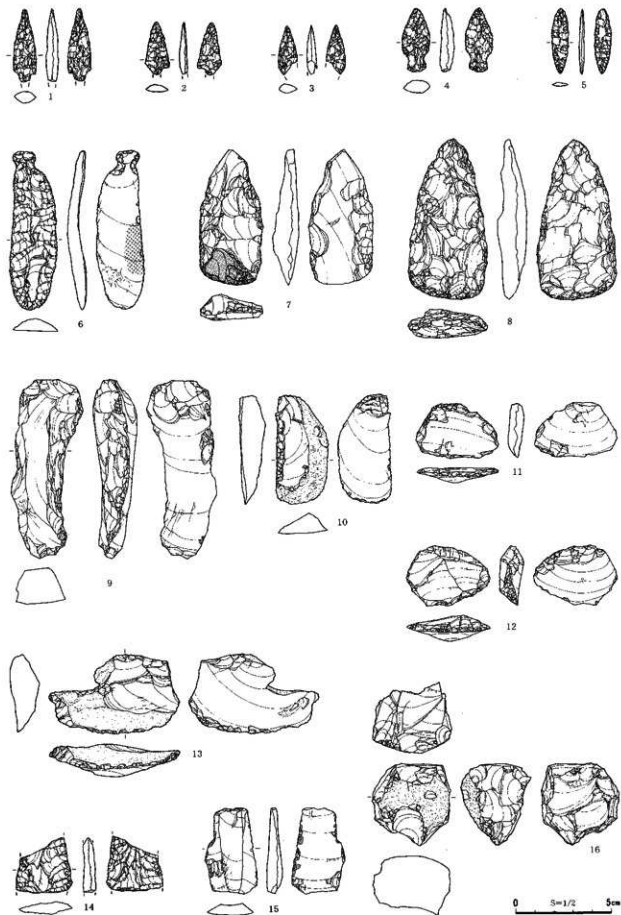


图90 遺構外出土石器 1 (A区)

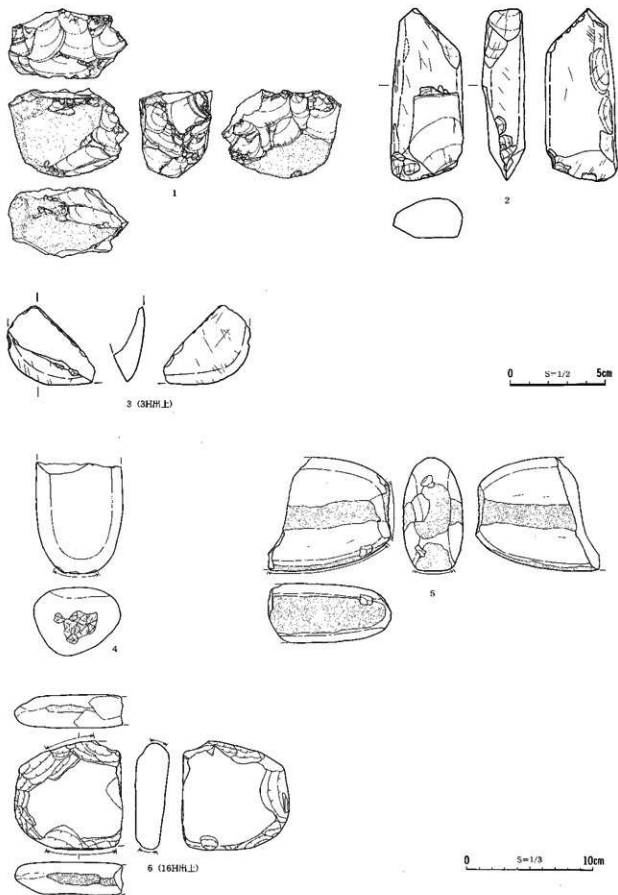


図91 遺構外出土石器2 (A区)

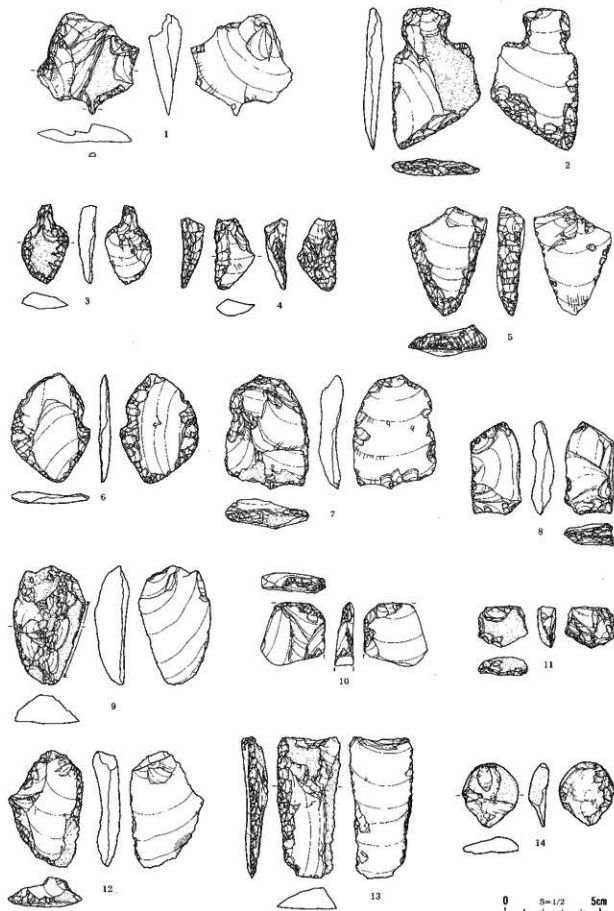


图92 遺構外出土石器3 (B区)

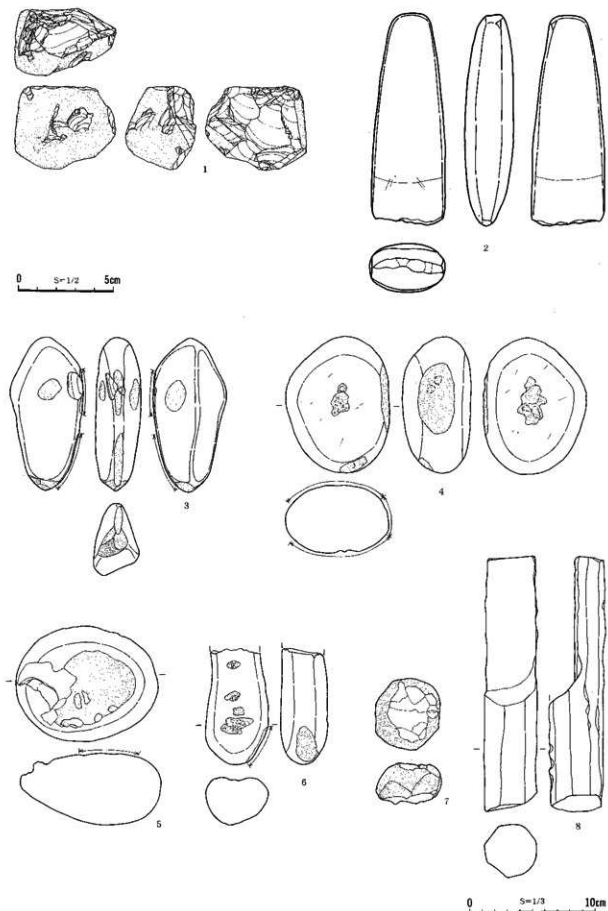


图93 遺構外出土石器4 (B区)

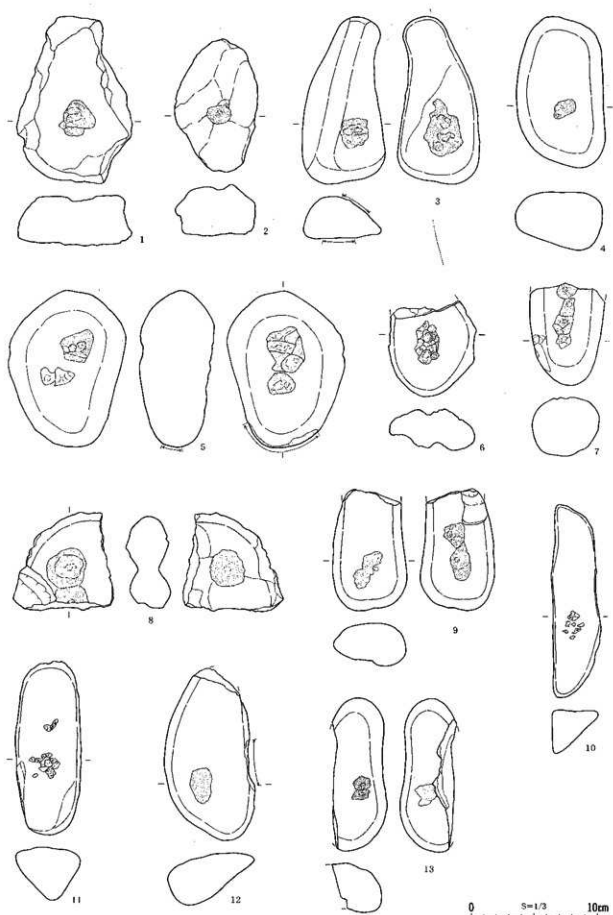


图94 遺構外出土石器5 (B区)

## 第4章 まとめ

本書は平成11年度に調査した遺構を中心にまとめたものである。本遺跡については、平成12年度にも発掘調査が行われ、住居跡や土坑等の遺構が検出されている。したがって、調査の成果については平成12年度の調査結果とあわせて、来年度刊行予定の報告書に記述することにしたい。ここでは、これまでの調査で判明したことや問題点を列記するとともに、まとめにかえたい。

平成9年度、平成11年度、平成12年度の三カ年にわたる調査の結果、本遺跡は縄文時代（前期～晩期）・弥生時代・平安時代の複合遺跡であることが判明した。

縄文時代の遺構・遺物は、A区の見晴らしの良い標高60m前後の台地上とB区の斜面下方の標高25～35mの台地上で検出された。A区では竪穴住居跡1軒（中期）と、土坑、溝状土坑、埋設土器（後期）等の遺構と縄文時代前期から晩期にかけての遺物が出土しているが、主体は中期（円筒上層式期）の土器である。また、B区では、竪穴住居跡2軒が検出された。1軒は時期不明であるが、もう1軒は縄文時代後期前葉のものである。出土遺物には、前期から後期後葉に至る間の土器が出土しているが、後期前葉が主体となっている。

弥生時代については、少量の土器が出土しただけで、遺構は検出できなかった。

平安時代の遺構は、B区の沼に近い場所から土坑1基が検出された以外は、A区の標高60m前後の台地上に広がっており、本遺跡の主体を占めている。出土遺物や遺構を覆っている火山灰（十和田a火山灰、白頭山火山灰）から、おおよそ9世紀から10世紀前半にかけて営まれた集落跡と考えられる。検出した遺構には竪穴住居跡、鉄関連遺構、掘立柱建物跡、土坑、焼土遺構等がある。このうち、竪穴住居跡の調査では、焼失家屋が8軒見られ、そのうちのいくつかには住居廃絶後に焼失した可能性がある。また、住居の廃絶に伴ってカマドの祭祀行為が行われたと考えられる事例も数例見られている。すなわち、第16号住居跡の支脚が抜き取られている例、第17号住居跡の支脚の置かれていた場所に土器片を積み重ね、その周りを覆っている例、また煙道に砥石を置いている例（第10号住居跡）等である。これらは、意識的な行為がうかがわれる例であり、住居廃絶に伴う祭祀行為の現れと考えることができる。また、支脚が検出されなかった事例が最も多いが、これもカマド停止に伴って抜き取られた例と見なすことができ、ごく一般的に行われたカマド祭祀の事例と考えられる。さらに、焼失家屋のなかには、住居廃絶に伴ってカマド祭祀が行われ、火放しが行われた可能性をうかがうことができる例（第22号住居跡）もある。これが正しければ、他の焼失家屋のなかにもそのような可能性が見られるものはないかどうか、再検討が必要と考えるし、今後の調査においても注意が必要となろう。竪穴住居跡のうち、鍛冶炉が検出された2軒の遺構を鉄関連遺構として記述した。うち1軒は大規模の住居跡に属するもので、床面から大きな金床石と作業場と考えられる空間が確認された。また、多数の精錬滓や鍛造剥片の出土から、鋼精錬と鉄器の製造が行われていた可能性が考えられる。さらに棒状鉄器の出土は、刀子や鉄斧などの製品としての鉄器だけでなく、それらの素材となる鉄（鋼）素材も生産され、これが他の集落へも流通していた可能性なども考えることができる。これらの点をふまえて、来年度には鉄器や鉄塊、鉄滓などの鉄関連遺物の分析依頼を予定している。より具体的な鉄生産の様相が把握できると思われる。

## 土器観察表

## 第20号住居跡&lt;図5&gt;

番号	層位	器種	部位	施文・文様など	備考	整理
1	地盤土	深鉢	口縁部	縄文R.L.、口唇部に隆帯、隆帯上に縄の文	門前上層e式	237
2	地盤土	深鉢	口縁部	縄文部、沈線、縄文R.L.	後期前葉	241
3	地盤土	深鉢	胴部	磨消縄文、R.L.	後期前葉	239
4	地盤土	深鉢	胴部	磨消縄文、L.R.	後期前葉	243

## 第26号住居跡&lt;図7&gt;

番号	層位	器種	部位	施文・文様など	備考	整理
1	床面	深鉢	完形	折り返し状の二段口縁、5種の波状部、磨消縄文、三角形区画、L.R.	後期前葉	194
2	床面	深鉢	完形	折り返し口縁、磨消縄文、方形区画、L.R.	後期前葉	193
3	床面	深鉢	口縁部	折り返し口縁、沈線、表裏ミガキ	後期前葉	78
4	床面	深鉢	底部	沈線、縄文、R.L.(0段多条)	後期前葉	195

## 第2号住居跡4&lt;図17&gt;

番号	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	1号カマド	坏	14.0	5.6	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	カマドP-14・15、	5
2	床面、埋積土	坏	13.7	5.4	5.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P-2、略完形、	4
3	床面	坏	13.3	5.4	6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	灯明片に再利用、口縁部を意図的に欠く、	3
4	埋積土、床面、床面	坏	12.8	5.7	6.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	器厚5~6mmでやや分厚く、もったりした感じ(内面中央溝巻き状)、	7
5	埋積土	坏	(13.2)			ロクロ	ロクロ		砂粒極微量		色調は黒色処理に似る、器厚5~6mmでももったりした感じの口唇、	66
6	床面+ピット3	坏	(13.4)	6.8	5.5	ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒多量	良好	1/3残、非ロクロ、	6
7	埋積土	坏	(14.2)			ロクロ	ロクロ		砂粒微量	良好	口縁の1/3残、口唇やや厚い、	65
8	西側溝内	坏	13.0	4.5	6.7	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	灯明片に再利用、口縁部を意図的に欠く、	8
9	埋積土	坏	12.8	5.5	5.2	ヨコナデ、ナデ	黒色処理、ヘラミガキ	糜ナデ	砂粒少量	良好	完形、	2
10	1号カマド	坏	13.3	5.7	5.2	ロクロ	黒色処理、ミガキ	回転糸切	砂粒少量	良好	カマドP-18、	1
11	床面+ピット3	坏				ヘラナデ、ミガキナ	黒色処理、ミガキ		砂粒微量		底部1/4欠、非ロクロ、薄い器厚(2~3mm)、やや傾い、内面調整は不規則、外面調整は上→下左右?	64
12	1号カマド	坏				ロクロ	黒色処理、ミガキ					67
13	埋積土	甕				ヘラナデ→ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好	口縁に意図的、	70
14	1号カマド	小型土器	(9.0)	7.3	(4.3)	ヘラナデ	ヘラナデ、ヨコナデ		砂粒少量	良好	1/2残、	7
15	1号カマド	甕				ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好		69
16	2号カマド	甕	(20.2)			ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好	外面保存好、	73

## 第2号住居跡5&lt;図18&gt;

番号	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	埋積土	甕	(20.1)	(6.1)		ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ(強)		砂粒少量	良好	P-22、	71
2	カマド	甕				ヘラケズリ	ヘラナデ(強・弱)		砂粒少量	良好		77
3	埋積土	甕				ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好		72
4	カマド	甕				ヘラケズリ	ヘラナデ(強・弱)		砂粒少量	良好		79
5	埋積土	甕		(10.0)		ヘラケズリ	ヘラナデ		砂粒少量	良好	底面は一部ヘラナデ、	76
6	カマド	甕				ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	2、4と同一製作、	80
7	埋積土	甕		7.4		ヘラナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ		砂粒少量	良好	器表面に傾いている、	75
8	埋積土	坏				ロクロ	ロクロ		砂粒極微量	良好	酒赤系、	18
9	埋積土	坏				ロクロ	ロクロ		砂粒極微量	良好	酒赤系、	17
10	床面	坏				ロクロ	ロクロ		砂粒極微量	良好	酒赤系、P-28、	16
11	埋積土	坏		(5.9)		ロクロ	ロクロ	ヘラナデ		良好	酒赤系、	45



番号	層位	部種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
12	床底、堆積土、3Hフ	煮				ロクロ	ロクロ	菊花状?	砂粒極微量	良好	灰赤器。	7
13	ビット8フ+9Hフ	煮	(12.8)			ロクロ	ロクロ		砂粒極微量	良好	灰赤器。	2
14	堆積上	大甕				平行タタキ目	タタキ目、ケズリ		砂粒少量	良好	灰赤器。	12
15	確認面	大甕				平行タタキ目	タタキ目		砂粒少量	良好	灰赤器。	14

## 第3号住居跡&lt;図21&gt;

番号	層位	部種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	床面	ミニ チユア	6.1	3.8	5.4	指押さえ	ケズリ?、ナデ	ナデ	砂粒含む	良好	P-5。	5
2	堆積土+ ビット2 堆積土	弁	13.2	6.6	5.8	ロクロ、凹凹調整	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	全体の1/5程欠失。火ハジケによる割離あり。	9
3	床面	弁	(13.6)	5.9	(6.4)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒微量		P-20。遺跡による火ハジケ調整。	318
4	堆積土+10 H堆積土	高台 付坪				ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒極微量	良好	緑色気味の赤土。高台部欠失。	317
5	床面、堆積 土	弁	13.9	5.2	5.8	ロクロ	ロクロ、ミガキ	回転糸切		良好	P-7。外面焼熟。褐色気味。	10
6	床面	弁			(6.0)	ロクロ	ミガキ、黒色調整	回転糸切	砂粒微量	良好	P-19。外面明白焼。	321
7	床面	小型 鉢	9.2	6.7	6.0	ヘラナデ	コビナデ	ナデ	砂粒少量	良好	P-21。輪積み底調整。口縁1/2焼。 口縁内側に底付蓋。	96
8	堆積土、床 面	小型 甕	(10.2)	9.4	6.0	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ (横・縦)	ナデ	砂粒少量	良好	P-2。ほぼ完用。焼熟。赤ロクロ。 輪積み底調整。	95
9	床面	甕	15.4	16.3	7.1	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	ナデ	砂粒多量	良好	ほぼ完用。器外面割離部あり。	98
10	床面	甕			6.9	ヘラナデ	ヘラナデ	ナデ	砂粒少量	良好	P-1。	319
11	床面+カマ ド	甕				ヨコナデ、ヘラナデ	ヘラナデ		砂粒中量	良好	器内面黒色気味。	322
12	床面、堆積 土	甕	(13.7)	13.9	8.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	口縁1/3焼熟。径3mmの小孔1ヶ。 焼熟。	97
13	堆積土+4 H堆積土	甕				ロクロ、ヘラナデ	ロクロ		砂粒極微量	良好	灰赤器、灰赤部。	20
14	床面	弁			6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒微量	良好	灰赤器。	46
15	床面	大甕				タタキ目	ヘラナデ		砂粒微量	良好	灰赤器。	19

## 第4号住居跡2&lt;図23&gt;

番号	層位	部種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	カマド、床 底+3Hフ	甕	18.4	19.6	9.2	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	木重板?	砂粒中量	良好	胴部に強いヨコナデ。口縁平坦に 調整し、断面三角形状。	99

## 第5号住居跡&lt;図24&gt;

番号	層位	部種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	カマド	甕			8.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒中量	良好	カマド支脚。上半欠失。焼熟。	100
2	堆積上	甕				タタキ目	ヘラナデ		砂粒極微量	良好	灰赤器。3と同じ胴体。	21
3	堆積土	甕				タタキ目	ヘラナデ		砂粒極微量	良好	灰赤器。外筒茶褐色。内面白く焼 (黒足)。褐色。	22
4	堆積上	甕	(21.6)			ロクロ	ロクロ、ヘラナデ		砂粒極微量	良好	灰赤器。	23

## 第7号住居跡2&lt;図26&gt;

番号	層位	部種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	床底	弁	(12.4)	4.4	(7.2)	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラケズ リ	砂粒少量	良好	1/3焼。	143
2	堆積土+6 H堆積土	皿	13.7	3.1	7.2	ロクロ、(ヘラケズリ)	ロクロ	ヘラナデ	砂粒微量	良好	口縁中厚い。底面近くをヘラケ ズリ。	16

番号	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
3	塚上	杯	(12.8)	5.9	(4.8)	ロクロ、(ヘラナデ)	ロクロ	ヘラナデ	細砂微量	良好	底径2/3、口縁1/5~1/6残。全体にゆがんでおり、内面に平織の布の任意あり、布は調整具として使用か。	148
4	床底	杯	(13.9)	5.3	6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂微量	良好	口縁1/2~2/3残。内外面に煤付着。口唇は幾分外反する。	20
5	埴輪土、床底	杯	13.4	6.0	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂微量	良好	P-24・10、火ハジケ痕著。	19
6	3層	杯				ロクロ	ロクロ		砂粒微量	良好	破片1/5残。口唇が反る。	142
7	床面+811 埴輪土(P-4)	杯	(16.4)	5.8	5.9	ロクロ	ロクロ、(黒色処理)	回転糸切	細砂少量	良好	内面はミガキ調整は施されないが、黒色処理、ロクロの形成時の凹凸が見られる。口縁は1/5残。	144
8	埴輪土+811 埴輪土	杯			6.4	ロクロ	ヘラミガキ、黒色処理	回転糸切	細砂微量	良好	7H、8Hそれぞれ若干の割合で混合。	138
9	床面				(5.2)	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切	細砂微量	良好	P-6、底部1/2残。	141
10	カマド壁面	杯	13.8	4.3	6.0	ロクロ、火ダスキ	ロクロ、火ダスキ	回転糸切	砂粒多量	良好	調整器、完成。	5
11	カマド壁出し	杯				ロクロ	ロクロ		細砂微量	良好	調整器。	30

## 第7号住居跡3&lt;図27&gt;

番号	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	床面	甕				ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ (平織)		密	良好	器表面ヘラナデ痕不明瞭。口縁1/6残。	139
2	塚上	場?				ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好	P-19。	147
3	床底+8H カマド	甕	(16.4)			ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ (平織)		砂粒多量	良好	7H床面P-17+8Hカマド、口縁1/4残。口唇は調整器のそれに似る。	145

## 第8号住居跡&lt;図28&gt;

番号	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	カマド	杯	12.7	5.0	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒多い	良好	カマド支脚(下)、同一地点から別個体の杯の破片も一種に出土。にぶい褐色で強い感じを受ける。	21
2	床面	杯				ロクロ	ロクロ		砂粒微量	良好	1/5残。	165
3	カマド	杯				ロクロ	ロクロ		細砂微量	良好	1と共に出土。口縁1/5残。口唇やや外反する。器厚薄い。	154
4	カマド 高台部分(P6)	杯			9.2	ロクロ	ロクロ		細砂微量	良好	1と共に出土。カマドP-5。	323
5	カマド	甕			9.0	ヘラケズリ	ヘラナデ	ナデ	砂粒少量	良好	1と共に出土。カマド支脚(上)。	161

## 第9号住居跡2&lt;図30&gt;

番号	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	カマド	小型鉢	9.2	6.0	6.0	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ナデ	砂肌	砂粒少量	良好	カマド支脚、P-13。	164
2	床面	小型鉢	8.1	7.4	(5.4)	ケズリ(摩滅)	ユビナデ、ナデ	摩滅(アレ)	砂粒少量	良好	P-1、ゆがみあり。	162
3	ビット2	杯	(12.9)	6.0	(5.6)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P-11・12。全体に強い感じ。	22
4	カマド	杯				ロクロ	ロクロ		砂粒少量	良好	カマドP-12。	157
5	床底	小型		(7.0)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒微量	良好	P-2、底部1/2残。	159
6	床底	杯		5.6		ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラナデ	粗砂含む	良好	P-5、火ハジケあり。	161
7	カマド	杯				ロクロ	ロクロ		砂粒少量	良好	カマドP-12。	156
8	カマド、ビット4	甕			7.5	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	カマド支脚、P-12、ビット4P-4。	166
9	床面	甕	14.5	12.6	6.6	ヨコナデ、ケズリ、大底分不明	ヨコナデ、ヘラナデ	不明	砂粒中量	良好	P-7、ほぼ完成。輪轆み痕明瞭。器底火ハジケ多く調整不明。	165
10	床面、カマド	甕	13.2	12.0	5.6	ロクロ	ロクロ	不明	砂粒少量	良好	床面P-6、カマドP-7、ほぼ完成。	163

## 第11号住居跡3&lt;図33&gt;

番号	層位	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	堆積土	埴	(14.0)			ロクロ	ロクロ		伊勢輪敷	良好	1/5脱、中々軟質。にぶい黄褐色。	176
2	マド+13 H	埴	(16.9)	6.3	6.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	大ぶり、口唇外反する。11号堆積土(8)+11号カマド(1片)+1311堆積土(1片)。	26
3	堆積土	埴	(19.2)			ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好	P=4、5。	183
4	カマド	埴				ヨコナデ	ヨコナデ		砂粒少量	良好	カマドP=9。	181
5	堆積土	埴				ヨコナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ(ミダキ)		砂粒少量	良好		182
6a	堆積土	埴	(14.8)			ヨコナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ(器)		砂粒多量	良好	1/5脱、P=1、2。	179
6b	堆積土	埴			(9.8)	ヘラケズリ	ヘラナデ(器)	砂痕	砂粒少量	良好	底面片1/4残。	180
7	カマド+17 Hカマド埋 出孔	埴			9.2	ヘラケズリ、ヘラナデ	ヘラナデ	砂痕	砂粒少量	良好	1711埋出孔出土と接合	175

## 第12号住居跡4&lt;図37&gt;

番号	層位	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	堆積土	ミニ チュ ア		(1.8)	4.8	ヘラケズリ	ヘラナデ	木炭痕	砂粒少量	良好		9
2	南溝	埴	13.3	5.5	5.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P=11。口唇厚く、もったりとした感じ。焼透された粘土を使用。器外面は黄褐色またはにぶい褐色。磁石完形。	29
3	南溝上	埴	12.4	4.6	6.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P=51。口縁の一部を欠くが、ほぼ完形。外面には一部大ハジケが見られる。	27
4	カマド	埴				ロクロ	ヘラミダキ、黄褐色		砂粒極少量	良好	割部1/3脱、中々軟質。	185
5	カマド	埴	22.0	28.4	16.2	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ(器)		砂粒少量	良好	カマド左輪芯材、P=28、完形。ケズリも兼ねたようなヘラナデ。広いヘラ輪。	197
6	カマド	埴	(21.4)			ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒中量	良好	カマド左輪芯材、P=27。	196
7	南溝上	埴	(14.8)			ヨコナデ、ヘラナデ?	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒中量	良好	P=17。外面調整不明瞭。	191
8	堆積土	埴			6.4	ヘラケズリ	ヘラナデ(器)	ナデ?	砂粒少量	良好	P=50。	186
9	カマド	埴			7.4	不明(ア)	ヘラナデ	ナデ?	砂粒中量	良好	カマド支脚(右)。	190
10	カマド	埴			8.4	ヘラケズリ	ヘラナデ(ケズリ)		砂粒少量	良好	カマド支脚(左)、P=25。	194
11	カマド	埴			11.5	ヘラケズリ(器)	ヘラナデ	砂痕	砂粒少量	良好	カマド支脚(右)。	192
12	カマド	埴			10.3	ヘラケズリ	ヘラナデ(ケズリ)	木炭痕	砂粒中量	良好	カマド支脚(右)、底面内面ケズリ。	193
13	カマド	埴	(5.5)		10.0	ヘラケズリ	ヘラナデ	木炭痕、ヘラナデ	砂粒中量	良好	カマド支脚(右)、P=26。	189

## 第12号住居跡5&lt;図38&gt;

番号	層位	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
6	カマド	埴			5.5	ロクロ、ユビナデ	ロクロ	回転糸切	伊勢輪敷	良好	口縁を欠く、2/3残。	28
7	Cカマド+ 床下	埴			6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	伊勢輪敷	良好	P=42。底面1/2残。	184
8	床下堆積土	小埴	(10.7)			ヘラナデ、ユビナデ	ヘラナデ		砂粒少量	良好	P=46。1/3残。	199
9	併存貯りカ マド埋込	埴	13.8			ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ(器)		砂粒中量	良好	4/5脱。口縁のヨコナデ強い。床下P=44。	200
10	堆積土	埴	(15.2)	15.2	7.4	ヨコナデ、ヘラナデ(9)	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒中量	良好	P=46-49。1/2脱。口径は1/5以下。	195

## 第13号住居跡2&lt;図41&gt;

番号	層位	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
2	堆積土	埴	14.1	5.6	5.7	ロクロ	ヘラミダキ、黄褐色	回転糸切		良好		30

番号	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調査	内面調査	底面調査	胎土	焼成	備考	整理
3	埴埴土、灰	甕			(11.0)	ヘラケズリ	ヘラナデ	木葉痕	砂粒少量	良好		204
4	埴埴土、埴 灰面	甕			11.0	ヘラケズリ	不明(ヘラナデ?)	砂底	砂粒少量	良好		203
5	埴埴土、灰 面	甕			(7.8)	ヘラケズリ?	ヘラナデ?	砂底	砂粒少量	良好	1/4残。	202
8	日住跡	杯				ロクロ	ロクロ			良好	須磨跡。	31
9	ビット2期 埴土	杯				ロクロ	ロクロ	同転糸切		良好	須磨跡。	32

## 第14号住居跡2&lt;図43&gt;

番号	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調査	内面調査	底面調査	胎土	焼成	備考	整理
1	床面+15H 床遺	小甕	(9.3)	5.4	(8.5)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラ(ユ ビ?)ナデ	木葉痕	砂粒極微量	良好	床面P-1(口縁部)+15H床面P- 2(底部)。	206
2	カマド	杯	13.4	5.5	5.8	ロクロ	ロクロ	同転糸切	砂粒少量	良好	カマド支脚。P-12。完形。褐色 気味。やや軟質。外面に火ハジケ あり。	31
3	床面、床遺	杯	13.3	5.6	6.0	ロクロ	ロクロ	同転糸切	砂粒少量	良好	床面P-2+床面P-5。ほぼ完 形。褐色気味。	32
4	14H、15 H、17H 埴埴土	甕			(8.4)	ロクロ→ヘラケズリ	ロクロ、ユビナデ	同転糸切、 ナデ	砂粒少量	良好		235
5	床遺	小型 鉢			5.5	ヘラケズリ	ヘラナデ	木葉痕? →ヘラ ナデ	砂粒少量	良好	P-6。布の重さ?	207
6	埴埴土、床 面、床遺	甕	21.8			ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒中量	良好	P-4、10。	205
7	埴埴土	甕			9.0	ロクロ	ロクロ	菊花文		良好	須磨跡。	234

## 第15号住居跡2&lt;図45&gt;

番号	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調査	内面調査	底面調査	胎土	焼成	備考	整理
1	埴埴土、カ マド8層	杯	(14.3)	2.7	(6.0)	ロクロ	ロクロ	同転糸切	細砂少量	良好	1/4残。口唇やや外反する。	208
2	床面、埴埴 土、ほか	杯	14.3	5.2	6.0	ロクロ	ロクロ	同転糸切	砂粒少量	良好	14H床面P-3、埴埴土+15H床面 P-1、床面P-3、床遺上。口唇わ ずかに外反。ロクロ成形時の凹凸 残る。	33
3	カマド	杯	13.5	5.9	6.5	ロクロ	ロクロ	同転糸切	細砂少量	良好	カマド支脚。P-10。完形。褐色気味 でやや軟質。口唇やや厚みをもつ。	34
4	床面+14H 埴埴土	杯	13.7	6.3	4.0	ロクロ	ロクロ	同転糸切	細砂少量	良好	15H床面P-6(大破?)、カマド床 面P-7、埴埴土(小片)+14H埴埴 土。ほぼ完形。小さな底跡。やや ゆがむ。	36
5	床遺	杯	13.3	5.7	6.0	ロクロ	ヘラミガキ、黒色気味	同転糸切		良好	P-5。2/3残存。によい黄褐色気味 味。やや軟質。	35
6	埴埴土+17 H埴埴土	甕	(14.0)			ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好	口縁もヘラナデ後。ヨコナデ。	238
7	床面、埴埴 土	甕			(8.8)	ヘラケズリ	ヘラナデ	木葉痕	砂粒中量	良好	ゆがんでいる。	210
8	埴埴土	杯				ロクロ	ロクロ			良好	須磨跡。内外面に火ダスキ。	25

## 第16号住居跡3&lt;図48&gt;

番号	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調査	内面調査	底面調査	胎土	焼成	備考	整理	
1	埴埴土、床 面、床面	小甕 鉢	10.1	6.8	5.7	ヨコナデ、ヘラナデ	ヘラナデ、ヘラケズリ (底部付定)		砂底	砂粒少量	良好		222
2	床遺	杯	14.1	5.0	5.6	ロクロ	ロクロ	同転糸切	細砂少量	良好	灯明具として利用。ほぼ完形。P- 62。	18	

番号	層位	形態	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調査	内面調査	底面調査	胎土	焼成	備考	整理
3	埴壇上, 床底	杯	(13.0)	6.4	6.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	埴壇形, 口縁は1/3欠く, P-8・20・55。	39
4	床底	杯	(13.5)	5.6	(5.6)	ロクロ, 一部ヘラナデ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P-23・24, 1/2割残存。器外周中央に砂粒の動きが沈着状になっている部分あり。やや軟質。	41
5	床底	杯	13.9	5.4	6.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒多い	良好	口縁の一部を欠損するがほぼ完成形。外面赤褐色。磁質。	37
6	埴壇上, 床底	杯	(14.3)	5.1	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切 一部ヘラナデ	砂粒少量	良好	ほぼ完成形。一部火ジケあり, 口縁厚く, もったりした感じ。土質やや外反する, P-30・32・33・35・36・46	40

## 第16号住居跡4&lt;図49&gt;

番号	層位	形態	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調査	内面調査	底面調査	胎土	焼成	備考	整理
1	床底	杯				ロクロ	ロクロ		砂粒少量	良好	P-26, 1/6残存。	219
2	床底	杯			6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	底部は正西存, やや軟質。	218
3	埴壇上, 床底	杯	(12.3)	5.4	5.2	ロクロ, 下部にヘラケズリ	黒色色遣, 一部ミガキナデ	回転糸切	砂粒少量	良好	P-52・54, 口縁のみ2/3残存。	38
4	床底	壺				ヨコナデ, ヘラケズリ	ヨコナデ, ヘラナデ	ナデ	砂粒少量	良好	断片形。	216
5	ピット1埴壇上, 床底	壺	(15.6)			ヨコナデ, ヘラケズリ	ヨコナデ, ヘラナデ		砂粒少量	良好	P-27。	215
6	ピット1埴壇上	壺				ヨコナデ, ヘラナデ	ヨコナデ, ヘラナデ		砂粒少量	良好		214
7	埴壇上, 東新力マド	壺	(16.8)	14.5	8.6	ヨコナデ, ヘラケズリ	ヨコナデ, ヘラナデ		砂粒多量	良好	床底P-50・60, 埴壇上P-58・64・59, 口縁1/4。	224
8	東新力マド	壺	(14.2)	14.1	6.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切	小礫含む。	良好	支那, P-62。	221
9	埴壇上, 床底	壺	13.9	17.9	9.0	ヨコナデ, ヘラケズリ	ヨコナデ, ヘラナデ	砂流	砂粒中量	良好	床底P-4・5・7・8・40, カマド①P-63, 火ジケあり。	225
10	床底, 東新力マド 塚か	壺	(20.4)	(29.0)	(9.8)	ヨコナデ, ヘラケズリ	ヨコナデ, ヘラナデ		砂粒少量	良好	床底P-19・25・33・39+カマド①P-59・60+床面P-21, +23 H層積土	220
11	埴壇上, 床底	壺	(22.8)			ヨコナデ, ヘラケズリ	ヨコナデ, ヘラナデ		砂粒少量	良好	P-34, 1/2	223

## 第16号住居跡5&lt;図50&gt;

番号	層位	形態	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調査	内面調査	底面調査	胎土	焼成	備考	整理
1	床底, カマド+6日力マド	壺				ヨコナデ, ヘラケズリ	ヨコナデ, ヘラナデ		砂粒少量	良好	床底P-61+カマド①P-56+6 HAカマドP-61。	217
2	埴壇上	壺				ヘラケズリ	ヘラミガキ, 黒色色遣		細砂少量	良好		211
3	床底, 東新力マド	杯	14.0	4.6	5.8	ロクロ, 火ダスキ	ロクロ, 火ダスキ	回転糸切		良好	東新力, カマド①P-37, 床底P-51, 4/5, 外面凹凸無し。	3
4	床底, 埴壇上	杯	14.1	5.1	5.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切		良好	東新力, P-14・17, ほぼ完成形。	4
5	床底	壺				ロクロ, ナデ	ロクロ		砂粒微量	良好	灰土器, P-9, 割片形。	26

## 第16号住居跡6&lt;図51&gt;

番号	層位	形態	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調査	内面調査	底面調査	胎土	焼成	備考	整理
2	床下	ミニチュア	(4.8)	3.8	(3.6)	ヨコナデ, オサエ	ヨコナデ				復元資料	11

## 第17号住居跡3&lt;図54&gt;

番号	層位	形態	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調査	内面調査	底面調査	胎土	焼成	備考	整理
1	埴壇上	杯	(13.8)	5.6	6.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	3/5残存。褐色気味。やや軟質。	42
2	埴壇上	杯	13.0	5.9	6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	4/5残存。但し口縁は1/3欠く。焼片。	43

番号	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	数量
3	埴埴土	杯	(14.9)			ロクロ	ロクロ		砂粒微量	良好	1/4残存。	230
4	埴埴土	杯			5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒微量	良好	底部3/4残存。赤褐色。縦溝。	227
5	埴埴土	杯			6.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒微量	良好	底部1/1。ヘモあり	232
6	埴埴土+3 H埴埴土	杯			6.4	ロクロ	ヘラミガキ、黒色地粉	回転糸切	砂粒微量	良好		231
7	埴埴土	杯				ロクロ	ロクロ	回転器攪拌	砂粒微量	良好		228
8	埴埴土	小型	(10.3)			指圧痕、ヘラナデ	指圧痕、ユビナデ、ヘラナデ		砂粒微量	良好	P-36、1/3残存。	241
9	埴埴土	甕	(17.6)	(6.7)		ヨコナデ、ヘラナデ (ケズリ?)	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好		239
10	埴埴土	甕	14.4	14.4	7.2	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ	ヘラケズリ	砂粒少量	良好	P-32。	246
11	床面	甕			6.8	ヘラケズリ	ヘラナデ(横:ケズリ 縦)	ナデ	砂粒少量	良好	P-7。	234
12	埴埴土	甕	(21.0)	(6.9)		ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ナデ		砂粒中量	良好	P-25。	237
13	埴埴土、埴埴土	甕	(18.5)	(29.2)	7.5	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	木蓋痕	砂粒中量	良好	P-38・41・42。	245
14	ビット3、 カマド、床 面、床山+ 14H埴埴土 土など	甕			9.5	ヨコナデ、ヘラケズリ (縦)	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒多量	良好	主体は17Hカマド・埴埴土・床面・床山・土器P-4・40・5・42・ビット3など、14H埴埴土と同程度のP-11、15H埴埴土、TW-116とも接合。編綴不明。	244

## 第17号住居跡4&lt;図55&gt;

番号	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	数量
1	埴埴土	甕	(14.8)	(6.7)		ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒中量	良好	P-29。	240
2	床面	甕	(17.8)	(4.3)		ヨコナデ	ヨコナデ		砂粒多量	良好	P-8。	233
3	埴埴土	小型 甕	(11.8)			指痕(ヘラケズリ?)	ヘラナデ		砂粒少量	良好	P-21、22。	236
4	埴埴土	甕			7.4	ヘラケズリ	ヘラナデ		砂粒少量	良好		242
5	埴埴土	杯	(15.0)			ロクロ	ロクロ		砂粒微量	良好	頸部、1/4残存。	38
6	床面	杯	14.0	4.9	6.0	ロクロ、一部ナデ	ロクロ	回転糸切	砂粒微量	良好	須磨部、P-9、10、11。	10
7	埴埴土	杯				ロクロ	ロクロ		砂粒微量	良好	須磨部、1/3残存。	229
8	埴埴土	杯			(5.0)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	良好	須磨部。		226
9	埴埴土	甕				平行タキ目	押さえ		良好	須磨部。		37
18	埴埴土	ミニ チュ ア			(4.5)	ヘラケズリ	ヘラナデ			良好	1/4残存。	13
19	埴埴土	ミニ チュ ア	4.0	3.4	3.5	指押し、下部の一部 ヘラナデ	指押し、指ナデ	ナデ	砂粒微量	良好	P-37。	1
20	埴埴土	ミニ チュ ア			(3.5)	不明(指ナデ?)	指ナデ?			良好	P-20。	14
21	埴埴土	ミニ チュ ア	4.6	3.0	3.3	ケズリ		ナデ	砂粒微量	良好	P-34、完形。	4

## 第18号住居跡1&lt;図56&gt;

番号	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	数量
1	床面	杯	(12.0)	5.4	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒多量	良好	P-3、2/3残存。残分中が凸。器外面がラック。内面はやや平。器ヤケ痕。	44
2	埴埴土	杯	(13.6)	5.2	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P-32、1/3残存。口径やや肥厚。	46

## 安田(2)遺跡Ⅱ

番号	層位	総厚 口径(cm)	部高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	粘土	焼成	備考	整理
3	埴埴土	杯 (15.0)	6.2	4.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	1/3残存。口唇やや厚く外反する。 外壁はロクロ成形時の跡が残る。 小さな底窪。やや軟質。	47
4	埴埴土	杯 (13.2)	5.7	(6.0)	ロクロ	ロクロ	回転糸切 ヘラナデ	砂粒少量		1/3弱残存。口唇尖り気味。やや軟質。	45
5	埴埴土	杯 (12.9)	5.6	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量		P-4、22、1/3残存。やや軟質。 底面ザラつく。	49
6	埴埴土	杯 (12.8)	5.4	5.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量		1/4残存(1輪1/5)。火ハジケあり。 口唇尖る。	48

## 第18号住居跡2&lt;図57&gt;

番号	層位	総厚 口径(cm)	部高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	粘土	焼成	備考	整理
1	埴埴土	杯 13.0	6.3	7.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	褐色気味。口唇分厚い。やや軟質。 口縁1/10以下残存。	252
2	埴埴土	杯 (14.5)			ロクロ	ロクロ		砂粒微量	良好	1/2弱残存(底面欠失)。硬質。 1811埴埴土(多)+P-52(小片)。 口唇外反。	50
3	埴埴土	杯 (13.8)			ロクロ	ロクロ		砂粒少量	良好	1/4残存。口唇外反する。口内面に 残存跡。	249
4	埴埴土	杯			ロクロ	ロクロ		砂粒微量	良好	口唇部破片。口唇外反する。硬質。	247
5	灰皿、漆罎	杯		5.7	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒微量	良好	底面P-1=灰皿P-2。底面破片。 硬質。	248
6	埴埴土+Ⅱ G-122、 I層	杯	(2.6)	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	底面片。赤褐色。	250
7	埴埴土	高台 付杯			ロクロ	ロクロ		砂粒微量	良好	高台部分欠失。溝内面に爪痕状の 削突跡。軟質。	251
8	埴埴土	小型 罎 (9.3)	8.5	6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P-36。	285
9	埴埴土	小型 鉢	10.6	7.2	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ (壁：ケズリ風)	ナデ	砂粒少量	良好		264
10	埴埴土	罎 (13.8)			ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ (罎)		砂粒少量	良好	底面。裏面は段を有するほどであ る。	266
11	埴埴土	罎 (18.5)			ヨコナデ、ヘラナデ、 ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好		236
12	埴埴土	罎			ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好		229
13	埴埴土	罎			ヨコナデ、ヘラケズリ (カキメ風)	ヨコナデ、ヘラナデ罎 (カキメ風)		砂粒含む		P-17。	258
14	埴埴土	罎			ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好		257
15	埴埴土	罎 (8.8)			ヘラケズリ	ヘラナデ		砂粒少量	良好		253
16	埴埴土	罎			ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好		281
17	埴埴土	罎			ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒多量	良好		262
18	埴埴土	罎 (5.8)			ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズ リ	砂粒少量	良好		253
19	埴埴土	罎 (7.4)			ヘラナデ	ロクロ	ヘラナデ	砂粒微量	良好	底面窪。底面にヘラナデ。	39
20	埴埴土	罎		7.4	ヘラケズリ	ヘラナデ(罎)		砂粒少量	良好		260

## 第18号住居跡3&lt;図58&gt;

番号	層位	総厚 口径(cm)	部高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	粘土	焼成	備考	整理	
8	埴埴土	ミニ チュ ア	4.2	4.1	3.0	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ ?	良好	P-23。	2	
9	埴埴土	ミニ チュ ア		(2.4)	(4.4)	不明	陶ナデ	ナデ	砂粒少量	良好	P-7。	12
10	埴埴土	ミニ チュ ア	2.8	1.7	2.0	削り丸	削り丸	ナデ?	良好		6	

## 第19号住居跡2&lt;図60&gt;

番号	層位	層種	口径(cm)	層高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	ビット1塊 積土	坏	(13.2)	5.9	5.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P=21。ほぼ完成。内外面に黒多量付着。灯明具として再利用か?。やや軟質気味。	53
2	床面	坏	15.0	6.3	5.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒多量	良好	P=7。ほぼ完成。内面黒褐色気味。内外面がざつとく。ロクロ版も隙隙に残る。砂があり。	51
3	床面	坏	13.2	5.4	5.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P=15。ほぼ完成。内外面ざつとく。口縁やや外反する。内外面黒褐色気味。内面に黒多量付着。	52
4	ビット1塊 積土	高台 付坪				ロクロ、 ユビナデ?	ロクロ	回転糸切	砂粒多量	良好	P=18。高台部欠失。接合部に割 突痕。	267
5	床面、堆積 土、ビット 1塊積土	巻			2.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P=9・10・17。被褥。	270
6	ビット1塊 積土、床面	歯	(10.8)	(10.3)	7.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒微量	良好	P=14・16。口縁の一部欠く。水 ハジケあり。隙隙上へハジケ。 内面黒色気味。	268
7	床面、ビット 4床下	構	(31.4)			ヘラナデ、 ヘラケズリ	ヘラケズリ・ ヘラナデ		砂粒中量	良好	P=12・23。	269
8	床面、堆積 土、ビット 1塊積土	坏	14.1	4.6	5.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒微量	良好	痕跡部。床面P=1+ビット1 P=20。	6
9	ビット1塊 積土	坏	14.5	4.8	5.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒微量	良好	痕跡部。P=19。	7
10	床面	坏			(5.4)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒微量	良好	痕跡部。P=8。	47

## 第21号住居跡1&lt;図61&gt;

番号	層位	層種	口径(cm)	層高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
3	堆積土	ミニ チュ ア	(5.2)	3.5	(3.2)	指押き入	ユビナデ					15
4	堆積土	ミニ チュ ア			(4.6)	ヨコナデ、 ナデ	ヘラナデ類	ナデ	砂粒少量			7
5	カマド床面	炭				不明	ヨコナデ、 ヘラナデ		砂粒少量		P=1。	272
6	堆積土、1 層	坏	(14.6)	5.1	5.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒多量	良好	口縁1/10残存。外面ざつとく。内 面やや丁寧。	58
7	3層、12H 堆積土	小骨 鉢			(4.6)	ロクロ、 ヘラケズリ	ロクロ	回転糸切 →ヘラナ デ(部分)	砂粒多い	良好	1/3残存。硬質。	271
8	1層	坏	13.1	5.0	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	口縁1/4残存。硬質。	54
9	2層	坏	13.6	6.6	5.7	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒多量	良好	ほぼ完成。外面ややざつとく。内 面やや丁寧。水ハジケあり。硬質。	55

## 第21号住居跡2&lt;図62&gt;

番号	層位	層種	口径(cm)	層高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	カマド床面	炭				ヘラケズリ	ヘラナデ	ナデ	砂粒少量		P=3。	273
2	1層・3層、 堆積土	不明			16.8	ナゲケズリ	不明	ヘラナデ ?	砂粒多量	良好	締なつくり。	274
3	確認面	瓦版 痕	(11.4)			ロクロ	ロクロ		砂粒少量	良好	痕跡部。	40

## 第22号住居跡2&lt;図64&gt;

番号	層位	層種	口径(cm)	層高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	床面	坏	13.4	6.1	6.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒多量	良好	P=1。ほぼ完成。外面ややざつと く。内面はやや丁寧。口縁肥厚。	58
2	惣造部	坏	12.8	5.8	6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P=2。ほぼ完成。口縁肥厚気味。	57



## 第23号住居跡2&lt;図66&gt;

番号	層位	形種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	埴壇土	杯	(13.2)	5.5	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P7-8、1/10残。中々軟質。	275
2	カマド支脚	杯	(13.8)	(6.6)	(6.6)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P-52。ほぼ完成。全周火ハジケでザツツク。内面横付着。	59
3	床面、埴壇上	杯			(5.9)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P-38。底部2/3。外面火ハジケ。	279
4	埴壇土	杯	(13.2)	6.1	(6.5)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	1/4残存。内面ヘラミガキの痕跡なし(下層は火ハジケ)。	275
5	床面	杯	(14.1)	5.3	6.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P-27。1/3残存。内面ヘラミガキの痕跡なし。中々軟質。大きな底脈。口縁肥厚。	60
6	埴壇土、床面	杯				ロクロ	ミガキ、黒色処理			良好	P-31。	277
7	埴壇土	高台付杯			(7.2)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒微量	良好	高台付杯遺跡。高台部1/10。軟質。	281
8	埴壇土、床面	甕	18.0	20.7	11.1	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ(甕)		砂粒中量	良好	P-1-2-5-7-12-14-16-21-23-34-36-38-39-46-48-49-51。底面に粘土層付け(高き観望のため)。	286
9	埴壇土、床面	甕	(17.8)			ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好	P-8-11-17-20-24-25-33-38-39-42-45。	287
10	埴壇土	小甕				ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好		282
11	床面	小甕	12.1	9.3	6.6	ヨコナデ、不明	ヘラナデ?		砂粒中量	良好	P-6。	284
12	床面、埴壇、埴壇上	小甕	(8.2)	7.5	5.4	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒中量	良好	床面P-28。床底P-22。口縁1/3。	283
13	埴壇土、埴壇上	甕			9.0	ヘラケズリ	ヘラナデ	スグレ状の圧痕	砂粒少量	良好		285
14	床面	甕			6.6	ヘラケズリ	ヘラナデ		砂粒中量	良好	P-6。45。	280
15	床底	杯	(14.0)	3.0	(6.6)	ロクロ、火ダスキ	ロクロ、火ダスキ	回転糸切	砂粒無量	良好	酒器類。P-3。1/3残存。	8
16	埴壇土	杯	(14.2)			ロクロ	ロクロ		砂粒微量	良好	硬磁器。	41

## 第24号住居跡&lt;図68&gt;

番号	層位	形種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	埴壇上	杯	(17.5)			ロクロ	黒色処理、ヘラミガキ		砂粒少量	良好		288
2	床底、埴壇土	杯	(14.0)	7.1	7.2	ヨコナデ、ユビナデ?	ヨコナデ	ヘラナデ、ヘラケズリ	砂粒多量	中々良好	P-2。口縁1/4残存。外面ザツツク。内面中々丁寧。ヨコナデは左へ右が多い。胎土布でヨコナデ?	61
3	埴壇上	甕	(16.0)			ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ユビナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好		289

## 第25号住居跡2&lt;図70&gt;

番号	層位	形種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	カマド	杯	13.7	6.0	6.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切 ヘラナデ	砂粒少量	良好	支脚。P-11。ほぼ完成。外面厚縁。内面平縁。若下のゆがみあり。	62
2	床底	甕			6.2	ヘラケズリ、ユビナデ	ヘラナデ(僅:カキス)		砂粒中量	良好	P-7。	298
3	埴壇土、ビット1、カマド	甕	(20.5)	(23.2)	9.6	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒中量	良好	埴壇土P-10+カマドP-12+カマドP-9。	290
4	床底	甕	(14.0)			ヨコナデ、不明	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好	P-2。内面黒褐色。厚縁出る。	299
5	カマド	小甕	(10.1)			ヨコナデ、不明(アレ)	ヨコナデ、ヘラナデ(甕)		砂粒少量	良好	1/4残存。	295
6	埴壇上、床面	甕			(7.6)	ヘラケズリ?	ヘラナデ	ナデ?	砂粒中量	良好	P-5。	291
7	ビット1埴壇土	ミニチュア			4.0	埴壇(ヘラナデ?)	ヘラナデ	ナデ		良好		16

番号	層位	種類	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
8	堆積土、ピット1堆積土	面				ロクロ	ロクロ		砂粒少量	良好	灰藍色。	43
9	堆積土	壁				不明(ヘラナデ?)	ヘラナデ		砂粒少量	やや良好		361
10	床面	壁				ヨコナデ、ヘラナデ?	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量		P-6。	293
11	堆積土	壁				ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量			300

## 第1号鉄関連遺構5&lt;図76&gt;

番号	層位	種類	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	堆積土	坪				ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切		良好	層雲土層。	120
2	床面	坪	14.3	5.9	6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切		良好	外面は黒褐色気味。底付着。内面は広範囲に腐付着。黒色処理のようにも見える。	14
3	床面、床底	坪	13.9	5.2	6.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒・小礫微量	良好	床面P-01+床面P-5、壁質、被熱。	15
4	床面、床底	坪	(14.5)	5.1	(7.0)	ロクロ	ロクロ、黒色処理	回転糸切ナデ	砂粒少量	良好	P-10~12・15・21・20、3/4残存(口縁は1/2)、中々軟質、ゆがみ、火ハジケあり。内面の黒色ははじけとんている。	11
5	堆積土+3上堆積土	坪				ロクロ	ロクロ			良好		111
6	床面	坪	(12.5)			ロクロ	ロクロ	細砂微量		良好	P-18。1/4残存。中々軟質。外面黒褐色気味。	114
7	床面	坪				ロクロ	ロクロ			良好	P-53。破片。口縁が陥入る。	116
8	堆積土	高台付坪			(5.6)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂微量	良好	外面に灰黄褐色。底面破片。	108
9	堆積土+17H堆積土	坪	(14.5)			ロクロ	黒色処理、ミガキ		細砂微量	良好	6Hの2片と17Hの3片が組合。	115
10	床面	坪	(10.7)			ロクロ	ロクロ		細砂微量	良好	P-64。1/4残存。火ハジケによる割傷あり。	121
11	堆積土+7H堆積土	坪			6.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切		良好	6H大破片。7H小破片。	107
12	床面	坪				ロクロ	黒色処理、ミガキ		細砂微量	良好	P-57。破片。	113
13	床面	坪	(13.0)	5.2	(7.1)	ロクロ、下部にユビナデ	黒色処理	回転糸切	砂粒微量	良好	P-49。黒色とんている。	112
14	床面	坪				ロクロ	ヘラミガキ、黒色処理		細砂微量	良好	P-79。1/5残存。褐色気味。中々軟質。	109
15	床面	坪				ロクロ	ヘラミガキ、黒色処理		細砂微量	良好		

## 第1号鉄関連遺構6&lt;図77&gt;

番号	層位	種類	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	床面+17H堆積土	壁	14.0			ヨコナデ、ヘラナデ?	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒中量	良好	P-37+17HP 31。	243
2	堆積土、床面、床底	壁	14.9			ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好	P-17・24・29。	122
3	ピット1	壁				ヨコナデ、ヘラナデ?	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒中量	良好	P-3。口縁のヨコナデ強く、頸部に段をもつ。	106
4	床面、床底	壁				ロクロ、ヘラケズリ	ヘラナデ割		砂粒少量	良好	P-3・73。	102
5	床面+7H堆積土+15H床底	壁	(18.8)			ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ			良好	6H・P-70、15H・P-4。	209
6	床面、ピット14堆積土	壁				ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ、ヘラナデ			良好	P-78。	103
7	床面+7H堆積土	壁				ヨコナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ、ヨコナデ		砂粒少量	良好	P-45。	132
8	堆積土	壁				ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		砂粒少量	良好		129

番号	層位	部種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
9	床面	塗				ロクロ				良好	P=62.	105
10	床面	小型			(4.8)	削落、不明	ユビナゲ	ナゲ	砂粒少量	良好	P=43.	137
11	灰層、埋積土	塗			10.0	ヘラケズリ	ヘラナゲ	砂流	砂粒中量	良好	P=26.	136
12	床溝、床面	塗			(8.6)	ヘラケズリ	ヘラナゲ(削)、ユビナゲ	厚減	砂粒少量	良好	P=33・36・39・41.	129
13	床溝、床面	小型			(5.7)	厚減	ヘラナゲ	木炭灰、厚減	砂粒中量	良好	P=7・9・59・60.	126
14	床面	塗				ヘラケズリ	ヘラナゲ		砂粒少量	良好	P=51. 底層片.	128
15	埋積土	小型			6.0	ヘラナゲ	ヘラナゲ(平面)	ナゲ		良好		127
16	埋積土	長柄				ロクロ	ロクロ、ヘラナゲ		砂粒極々微量	良好	灰層部、床面片、灰褐色、へら書き。	24
17	埋積土	塗				タタキ目	ヘラナゲ			良好	灰層部、灰褐色。	26
18	灰成+17H埋積土	塗				タタキ目	明て具(鳥足)			良好	灰層部。P=67.	25
19	埋積土+18川埋積土	坪				ロクロ	ロクロ			良好	灰層部。厚減片。	27
20	埋積土	坪				ロクロ	ロクロ			良好	灰層部。厚減片。	29
21	埋積土	坪				ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒極微量	良好	灰層部。厚減部破片1/2.	28
22	床底	坪	13.6	5.7	5.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切	小骨含む	良好	灰層部。P=1. 灯明具に利用。11層の一部を意図的に欠く。	9

## 第1号鉄関連遺構3&lt;図79&gt;

番号	層位	部種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	Bカマド壁出し	塗			7.8	ヘラケズリ	ヘラナゲ		砂粒少量	良好	P=81.	131
2	床下埋積土	塗				ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ、ヘラナゲ		砂粒少量	良好	P=83.	104
3	Bカマド壁跡部、ピツト3+8H床面+17H埋積土	塗			7.5	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P=75~77+8H+P=20. 内面黒褐色。	101
4	床下	坪			6.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	P=84. 口縁をわずかに欠失。底部の切り離しは鉛引き糸切りに似る。	13
5	床下埋積土	坪			(5.8)	ロクロ、ヘラナゲ	ロクロ	ヘラナゲ	砂粒微量	良好	全体ににぶい黄褐色。	110

## 第2号鉄関連遺構3&lt;図82&gt;

番号	層位	部種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	整理
1	床面	坪	12.8	5.8	6.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	細砂少量	良好	P=10. 外面黄褐色。内面平面。	24
2	埋積土、灰面	坪	15.7	5.5	6.3	ロクロ、ヘラナゲ	ロクロ	ケズリ		良好	P=9. にぶい灰色気味の色調でやや軟質。底面はヘラケズリかヘラナゲで底辺近くも同様。体部の一部にヘラナゲか指ナゲによる調整痕も見られる。	23
3	床底	坪	(11.2)	5.2	(5.8)	ユビナゲ、ヘラナゲ	ヘラナゲ、ヨコナゲ	ヘラナゲ、ヨコナゲ	砂粒少量	やや良好	P=7. 赤ロクロ。内外面黒褐色。焼分砂が凸。書き上げ成形後、ヘラナゲ、ユビナゲに調整を簡単に施す。	25
4	埋積土+11H埋積土	坪				ロクロ	ロクロ		砂粒少量	良好		168
5	埋積土	坪			(5.5)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量	良好	灰層片。1/3残存。明褐色を呈し、産質。	169
6	埋積土	塗	(10.0)			ヨコナゲ、ヘラミガキ	ヘラナゲ、ヘラミガキ		砂粒微量	良好	口縁1/5残存。	174

品号	部位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	数量
7	堆積土+11H H堆積土	甕				ヘラナゲ	ヘラナゲ					171
8	堆積土	甕			(12.6)	ヘラケズリ	ヘラナゲ	ヘラケズリ	砂粒多量	良好	底面1/4残存。	170
9	堆積土、床 面	甕			7.4	ヘラケズリ	ヘラナゲ	ヘラナゲ		良好	P-2。ゆがみ。	172
10	堆積土	罎				ロクロ	ロクロ			良好	磨漆土器。	
11	床面+11H 堆積土、 ピット1	甕			8.6	ヘラケズリ	ヘラナゲ	ナゲ	砂粒中量	良好	10H・P-10(瓶小片)+11H・ P-3(大半)。	173
13	堆積土	ミニ チュ ア		(2.6)	(3.3)	押しえ、ヘラナゲ?	ヘラナゲ	ナゲ	砂粒少量	良好		8
14	堆積土	ミニ チュ ア		(2.4)	(5.0)	ケズリ?	ナゲ?	ナゲ	砂粒少量	良好	1/3残存。	10
15	堆積土	ミニ チュ ア		(4.3)	5.1	ヘラケズリ	ヘラナゲ(強:ケズリ 風)			良好		3

石器観察表

図番号	区	出土地	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	備	考	図録
07-05	B区	26住	床面	磨製部	11.8	5.9	4.9	527	焼成岩	S-5, 両側面に広い打痕, 両平端面に複数の浅み孔。		80
07-06	B区	26住	床面	磨製部	(12.1)	(9.6)	(2.8)	(431)	焼成岩	S-8, 台片内側面の内石, 平端面に浅み孔。被蝕。		81
07-07	B区	26住	床面	石質	34.4	10.3~ 13.8	4.2~ 4.6	2,908	焼成岩	S-4, 磨面平つづく。縁の一部破断。両側側面及び裏面の磨面は粗粒。		79
07-08	B区	26住	床面	スライパ	6.6	3.8	0.9	19.8	珪質頁岩A	片割縁に浅凹溝。		35
07-09	B区	26住	床面	スライパ	3.9	3.5	1.1	15.1	珪質頁岩B	S-2, 片割縁に浅凹溝。		16
07-10	B区	26住	床面	ヒフイタ	3.6	3.6	1.1	15.4	珪質頁岩A	S-1, 片割縁に微細凹溝。		43
08-01	B区	26住	床面	スライパ	3.4	4.8	1.1	15.7	珪質頁岩A	S-3。		17
08-02	B区	26住	床面	フレイク	3.8	2.8	1.2	17.0	珪質頁岩B	1集石, S-83, 接1+No.142, 両側割片, 平削。		157
08-03	B区	26住	床面	フレイク	4.4	3.4	1.4	23.8	珪質頁岩B	1集石, S-55, 接1+No.157, 両側割片, 平削。		142
08-04	B区	26住	床面	フレイク	4.5	2.7	1.2	14.4	珪質頁岩B	1集石, S-57, 接2資料+No.14, 両側割片。		144
08-05	B区	26住	床面	磨形石器	4.3	3.1	1.4	20.1	珪質頁岩B	1集石, S-85, 接2+No.144, 両側割片。		14
08-06	B区	26住	床面	リフレイク	6.8	4.9	1.4	51.7	珪質頁岩A	1集石, S-81, 接4+No.56, 両面に微細凹溝。		58
08-07	B区	26住	床面	フレイク	5.1	5.4	1.4	32.8	珪質頁岩A	1集石, S-30, 接4+No.38, 両側割片。		56
08-08	B区	26住	床面	磨形石器	4.7	4.6	1.1	23.0	珪質頁岩B	1集石, S-20, 接5+No.141, 両側割片。		120
08-09	B区	26住	床面	フレイク	4.4	3.9	1.0	11.7	珪質頁岩B	1集石, S-64, 接5+No.120, 両側割片。		141
09-01	B区	26住	床面	フレイク	4.5	2.7	1.2	15.0	珪質頁岩B	1集石, S-84, 接8+No.44, 両側割片。		61
09-02	B区	26住	床面	フレイク	3.7	2.3	1.6	11.0	珪質頁岩B	1集石, S-10, 接8+No.61, 両側割片。		44
09-03	B区	26住	床面	フレイク	3.9	4.5	1.2	23.3	珪質頁岩B	1集石, S-46, 接6+No.122, 両側割片。		18
09-04	B区	26住	床面	フレイク	4.2	3.2	1.2	18.7	珪質頁岩B	1集石, S-25, 接6+No.18, 両側割片。		122
09-05	B区	26住	床面	フレイク	4.0	2.3	1.3	13.6	珪質頁岩B	1集石, S-45, 接7+No.34, 両側割片。		31
09-06	B区	26住	床面	フレイク	4.5	4.0	1.1	20.2	珪質頁岩B	1集石, S-87, 接7+No.31, 両側割片。		134
09-07	B区	26住	床面	フレイク	4.2	3.9	0.9	18.5	珪質頁岩B	1集石, S-45, 接9+No.59, 両側割片。		36
09-08	B区	26住	床面	フレイク	4.0	4.0	1.1	23.7	珪質頁岩B	1集石, S-23, 接9+No.136, 両側割片。		59
09-09	B区	26住	床面	磨形石器	3.3	2.3	1.2	11.3	珪質頁岩B	1集石, S-61, 両側割片, 平削。		147
09-10	B区	26住	床面	磨形石器	3.6	2.6	1.0	10.6	珪質頁岩B	1集石, S-11, 両側割片。		37
09-11	B区	26住	床面	磨形石器	3.8	2.7	0.9	9.4	珪質頁岩B	1集石, S-66, 両側割片。		149
09-12	B区	26住	床面	磨形石器	3.4	2.7	1.0	10.4	珪質頁岩B	1集石, 両側割片。		7
09-13	B区	26住	床面	磨形石器	3.3	2.8	0.9	10.7	珪質頁岩B	1集石, S-51, 両側割片。		138
09-14	B区	26住	床面	磨形石器	3.9	2.8	0.8	11.0	珪質頁岩B	1集石, S-90。		10
10-01	B区	26住	床面	磨形石器	4.4	4.3	1.4	25.2	珪質頁岩B	1集石, S-48, 両側割片。		41
10-02	B区	26住	床面	磨形石器	4.0	4.1	1.1	24.9	珪質頁岩B	1集石, S-19, 両側割片。		131
10-03	B区	26住	床面	磨形石器	3.7	3.1	1.4	15.7	珪質頁岩B	1集石, S-68, 両側割片。		53
10-04	B区	26住	床面	磨形石器	4.4	3.7	1.3	18.1	珪質頁岩B	1集石, S-9, 両側割片。		45
10-05	B区	26住	床面	磨形石器	3.9	2.9	1.2	17.3	珪質頁岩B	1集石, S-70, 両側割片, 平削。		151
10-06	B区	26住	床面	磨形石器	4.2	3.4	1.3	16.6	珪質頁岩B	1集石, S-24, 両側割片。		42
10-07	B区	26住	床面	磨形石器	3.0	3.8	1.0	13.8	珪質頁岩B	1集石, S-64, 両側割片。		46
10-08	B区	26住	床面	フレイク	3.7	3.0	0.8	11.6	珪質頁岩A	1集石, S-13, 両側割片。		57
10-09	B区	26住	床面	フレイク	4.5	3.7	1.0	16.3	珪質頁岩B	1集石, S-47, 両側割片。		20
10-10	B区	26住	床面	フレイク	4.0	4.6	0.9	20.4	珪質頁岩B	1集石, S-14, 両側割片。		126
10-11	B区	26住	床面	フレイク	3.6	3.5	1.3	17.4	珪質頁岩B	1集石, S-21, 両側割片。		121
10-12	B区	26住	床面	フレイク	4.5	2.1	1.1	10.6	珪質頁岩B	1集石, S-95。		29
10-13	B区	26住	床面	フレイク	4.5	3.3	1.0	15.9	珪質頁岩B	1集石, S-53, 両側割片。		140
10-14	B区	26住	床面	フレイク	3.4	4.4	1.2	19.7	珪質頁岩B	1集石, 両側割片。		30
10-15	B区	26住	床面	フレイク	5.5	3.9	1.1	21.8	珪質頁岩B	1集石, 両側割片, 平削。		25
10-16	B区	26住	床面	フレイク	5.5	2.4	1.0	12.9	珪質頁岩B	1集石, S-62, 両側割片。		15
10-17	B区	26住	床面	フレイク	5.6	2.8	1.3	18.0	珪質頁岩B	1集石, S-69。		12
10-18	B区	26住	床面	フレイク	4.2	4.8	1.2	26.8	珪質頁岩B	1集石, S-15, 両側割片。		127
11-01	B区	26住	床面	フレイク	3.7	3.6	1.4	25.0	珪質頁岩B	1集石, S-23, 両側割片。		60
11-02	B区	26住	床面	フレイク	5.5	3.2	1.2	21.4	珪質頁岩B	1集石, S-18, 両側割片。		130
11-03	B区	26住	床面	フレイク	3.5	3.4	1.5	15.0	珪質頁岩B	1集石, S-18, 両側割片。		128
11-04	B区	26住	床面	フレイク	4.8	4.1	1.6	31.1	珪質頁岩B	1集石, S-82, 両側割片?		156
11-05	B区	26住	床面	フレイク	4.3	2.7	0.9	15.0	珪質頁岩B	1集石, S-60, 両側割片。		55
11-06	B区	26住	床面	フレイク	3.8	3.3	1.4	16.4	珪質頁岩B	1集石, S-56, 両側割片, 平削。		143

図番号	区	出土地	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	備	考
11-07	B区	26住	床面	フレイク	3.6	3.7	1.2	17.7	珸質頁岩B	1集石、両縁割片、半割。	8
11-08	B区	26住	床面	フレイク	5.4	2.8	1.2	17.8	珸質頁岩B	1集石、S-58、両縁割片、半割。	145
11-09	B区	26住	床面	フレイク	3.5	3.0	1.4	18.1	珸質頁岩B	1集石、S-29、両縁割片、半割。	146
11-10	B区	26住	床面	フレイク	4.6	3.5	1.3	21.4	珸質頁岩B	1集石、S-63、両縁割片。	32
11-11	B区	26住	床面	フレイク	4.4	2.4	1.0	15.8	珸質頁岩B	1集石、S-17、両縁割片、半割。	129
11-12	B区	26住	床面	フレイク	4.2	3.0	1.4	20.4	珸質頁岩B	1集石、S-86、両縁割片、半割。	52
11-13	B区	26住	床面	フレイク	4.4	4.5	1.4	30.4	珸質頁岩B	1集石、S-88、両縁割片、半割。	39
11-14	B区	26住	床面	フレイク	3.3	2.9	1.2	11.8	珸質頁岩B	1集石、S-50、両縁割片、半割。	137
11-15	B区	26住	床面	フレイク	3.8	2.5	1.2	14.6	珸質頁岩B	1集石、S-60、両縁割片、半割。	148
11-16	B区	26住	床面	フレイク	4.8	3.9	1.4	28.4	珸質頁岩B	1集石、S-52、両縁割片、半割。	139
11-17	B区	26住	床面	フレイク	4.6	2.5	1.0	12.5	珸質頁岩B	1集石、S-67、両縁割片、半割。	150
11-18	B区	26住	床面	フレイク	4.3	2.6	1.7	16.3	珸質頁岩B	1集石、S-89、両縁割片、半割。	158
12-01	B区	26住	床面	フレイク	6.2	2.7	1.5	19.6	珸質頁岩A	2集石、S-74、接3+9b23、132、134。	11
12-01	B区	26住	床面	フレイク	5.2	3.4	1.5	24.1	珸質頁岩A	2集石、S-75、接3+9b11、132、134。	23
12-02	B区	26住	床面	フレイク	2.4	2.4	1.0	4.1	珸質頁岩A	2集石、S-39、接3+9b11、23、132。	123
12-02	B区	26住	床面	フレイク	3.9	3.8	0.9	12.8	珸質頁岩A	2集石、S-36、接3+9b11、23、132。	134
12-03	B区	26住	床面	横断石	4.9	3.7	1.6	29.0	珸質頁岩B	2集石、S-33、両縁割片。	62
12-04	B区	26住	床面	スライパー	5.7	4.3	1.9	37.9	珸質頁岩A	2集石、S-92、縁辺に急斜度調整、尖削状。	54
12-05	B区	26住	床面	スライパー	2.7	2.1	0.9	8.0	珸質頁岩B	2集石、S-71、両縁割片素材?	50
12-06	B区	26住	床面	スライパー	3.7	4.9	1.1	16.9	珸質頁岩B	2集石、S-28、縁辺に連続する浅角調整。	124
12-07	B区	26住	床面	フレイク	4.9	4.2	0.9	14.1	珸質頁岩B	2集石、S-29、両縁割片。	125
12-08	B区	26住	床面	フレイク	4.1	3.5	0.9	14.3	珸質頁岩A	2集石、S-34、縁辺に浅角調整。	133
12-09	B区	26住	床面	フレイク	4.9	4.0	1.1	23.3	珸質頁岩B	2集石、S-27、縁辺にリタツク、両縁割片。	26
12-10	B区	26住	床面	フレイク	4.5	3.8	1.2	18.2	珸質頁岩A	2集石、S-31。	40
13-01	B区	26住	床面	フレイク	6.7	7.0	2.3	108.0	珸質頁岩A	2集石、S-94。	48
13-02	B区	26住	床面	フレイク	6.2	4.0	1.0	17.1	珸質頁岩A	2集石、S-76。	153
13-03	B区	26住	床面	フレイク	5.1	7.0	1.4	42.0	珸質頁岩A	2集石、S-37。	38
13-04	B区	26住	床面	フレイク	4.2	3.3	2.0	13.1	珸質頁岩A	2集石、S-44。	13
13-05	B区	26住	床面	フレイク	4.8	4.9	1.4	40.8	珸質頁岩B	2集石、S-32、両縁割片。	19
13-06	B区	26住	床面	フレイク	3.5	5.9	1.1	21.9	珸質頁岩A	2集石、S-35。	49
13-07	B区	26住	床面	フレイク	5.6	5.0	1.1	33.2	珸質頁岩B	2集石、S-26、両縁割片、半割。	123
13-08	B区	26住	床面	フレイク	4.0	6.7	1.4	35.1	珸質頁岩A	2集石、S-77。	27
13-09	B区	26住	床面	フレイク	3.0	2.7	1.0	10.0	珸質頁岩B	2集石、S-93、両縁割片。	9
13-10	B区	26住	床面	フレイク	2.3	2.7	0.9	8.7	珸質頁岩B	2集石、S-41、両縁割片、半割。	6
13-11	B区	26住	床面	フレイク	6.1	3.9	1.7	37.9	珸質頁岩B	2集石、S-79、両縁割片、横?	33
13-12	B区	26住	床面	フレイク	3.8	4.5	1.4	47.3	珸質頁岩B	2集石、S-40、両縁割片、半割。	133
13-13	B区	26住	床面	フレイク	4.0	2.2	0.8	7.0	珸質頁岩B	2集石、S-42、両縁割片。	2
19-01	A区	2住	床面	台石	(16.5)	(10.2)	(8.7)	(2,206)	黄砂岩	S-21、被熱、石棒状。表面はスベスベ、長軸端部に打痕。	2
19-02	A区	2住	礫土	台石片	(10.4)	(12.2)	(8.7)	(1,421)	安山岩	被熱、縁面ザツク。	4
19-03	A区	2住	礫土	台石	(12.5)	(10.8)	6.3	(728)	安山岩	縁面平滑。被熱?。あるいは縁石か。	3
19-04	A区	2住	床面	磨入礫	10.7	5.8	5.3	433	石炭安山岩	S-20、被熱。気孔が多く見られるが、表面は平度でスベスベである。	77
23-03	A区	4住	カマド床底	礫石	12.5	10.7	4.4	744	黄砂岩	S-2、被熱。縁面平滑。とくに片側が滑らかで、縁石として使用。また、側面の一部には打痕。	6
23-04	A区	4住	床面	磨入礫	12.5	5.9	5.0	540	安山岩	S-1、被熱。縁面ややザツク。	5
27-04	A区	7住	床面	台石片	(7.0)	(6.4)	(6.7)	(370)	凝灰岩	S-4、破片、被熱。	31
27-05	A区	7住	床面	台石	(11.8)	(10.1)	(16.4)	(1,532)	凝灰岩	S-1、破片、被熱。	29
33-08	A区	11住	カマド	台石片	(16.1)	(10.8)	(4.5)	(820)	安山岩	S-3、被熱、破片。	35
33-09	A区	11住	床面	台石片	-	-	-	(252)	凝灰岩	S-2、破片、被熱。	34
35-01	A区	12住	床面	台石	(15.0)	(15.0)	13.6	(5,007)	石炭安山岩	S-4、被熱。両面に磨打痕顕著。縁面割片付、被熱。	38
35-02	A区	12住	床面	瓶石	(9.2)	4.4	4.3	16	緑色凝灰岩	S-3、被熱。三面利用。	37
35-03	A区	12住	床面	瓶石?	11.8	4.0	3.8	256	安山岩	S-2、三角柱状体を利用。平ら型は特に平度で滑らか。	42
38-04	A区	12住	礫土	台石	(14.6)	(14.3)	(12.1)	(2,938)	安山岩	被熱。平坦面に打痕。被熱。	36
39-01	A区	12住	床下	瓶石	9.4	5.3	3.5	216	凝灰岩	S-11、片面利用。小型。	40
39-02	A区	12住	床下	瓶石	14.9	6.0	3.6	455	石炭安山岩	S-10、両端と側面に打痕。	39

安田(2)遺跡Ⅱ

調査号	区	出土地	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	石質	備	考	数量
41-06	A区	13住	覆土	砥石	(9.4)	(7.3)	(6.2)	(564)	流紋岩	S-1, 被熱?。三角柱状礫を素材。三面が平面で、1面に研産面が顕著。		43
45-09	A区	15住	覆土	台石?	(8.0)	(7.4)	(6.6)	(630)	石質安山岩	被熱。平坦面平滑。片面に線条隆。砥石?。縦面に打痕。		47
45-10	A区	15住	カマド裏	台石?	(10.6)	(6.8)	(5.3)	(603)	安山岩	S-1, 被熱。平坦面スベスベ。		45
45-11	A区	15住	覆土	台石片	(12.1)	(9.6)	(6.6)	(699)	安山岩	被熱。		46
50-06	A区	16住	床面	台石	(10.2)	(14.3)	(6.5)	(1,022)	安山岩	S-8, 線隆。やや小型。被熱。平坦面平滑。No.54と同一製作?。		53
50-07	A区	16住	床面	舟石片	(13.9)	(8.5)	(5.8)	(773)	石質安山岩	S-2, 被熱。器面平滑。燻?付着。		49
50-08	A区	16住	床面	台石	15.7	12.2	6.3	1,637	流紋岩	S-6, 無加工。被熱。		51
50-09	A区	16住	床面	燻入礫	13.9	7.4	4.2	661	安山岩	S-10, 被熱。不整形の扁平礫。燻加工。平坦面は両面とも微分僅み。やや磨らぬ。		55
50-10	A区	16住	床面	台石	(11.8)	(11.7)	(5.1)	(1,107)	流紋岩	S-7, 一部欠損。小型。両面に打痕。被熱。		52
50-11	A区	16住	床面	砥石	(9.0)	5.1	3.8	(277)	流紋岩	S-12, 棒状。縦隆と内側面に打痕。器面平滑。燻?付着。		57
50-12	A区	16住	床面	砥石	11.9	5.8	5.5	509	流紋岩	S-13, 棒状。全体に滑らかな磨面を加えており、器面は平面。片端部には、狭いが平坦部を形成する微い磨痕。		58
50-13	A区	16住	床面	燻入礫	6.5	5.7	3.6	197	安山岩	S-11, 扁平な小楕円形。器面平滑。		56
50-14	A区	16住	床面	燻石	8.1	6.4	5.4	402	安山岩	S-1, 棒状。器面スベスベ。		48
51-01	A区	16住	敷土カマド	砥石	13.8	6.3	5.5	257	細粒凝灰岩	S-14, 全磨面。		59
55-10	A区	17住	覆土	砥石	15.8	10.3	4.7	878	流紋岩	S-1, 両面に磨面。(内側利用?)。特に、片方の平坦面がツルツルしており、研産面が顕著。		61
38-01	A区	18住	覆土	台石	(12.9)	(11.7)	(8.5)	(1,559)	安山岩	被熱。被熱。平坦面に広い打痕。他は平滑。		65
38-02	A区	18住	覆土	砥石	16.4	4.6	3.7	459	流紋岩	S-1, 棒状。両面に打痕。全体に滑らかな磨面を加え、平滑。被熱。燻?付着。		63
58-03	A区	18住	覆土	砥石	11.1	7.2	4.1	517	流紋岩	S-2, 扁平礫の両端と両側面に打痕。両平坦面はツルツルであり、燻痕も見える。		64
67-01	A区	23住	床面	台石	12.9	11.2	7.1	1,409	安山岩	S-1, 小型。被熱。平坦面に磨い打痕。やや平滑。燻?付着。		69
67-02	A区	23住	床面	舟石片	(11.8)	(6.8)	(5.2)	(285)	凝灰岩	S-3, 被熱。ほぼ全面に燻?付着。		71
67-03	A区	23住	床面	燻入礫	6.0	2.8	2.2	304	凝灰岩	S-2, 不整形の小石。燻入燻痕状物質付着。		70
68-04	A区	24住	床面	砥石	(8.4)	(6.4)	(4.0)	(173)	流紋岩	S-1, 扁平礫の片側面を利用。縦付。		72
70-12	A区	28住	床面	台石	(22.8)	(18.6)	(13.2)	(3,637)	石質安山岩	S-1, 74と接合。被熱。燻?付着。平坦面平滑。磨面平滑。ごく一部に、縦造削片らしきもの付着。		73
70-13	A区	28住	床面	台石	*	*	*	(4,015)	流紋岩	S-3, 73と接合。		74
71-01	A区	25住	床面	砥石	12.8	5.8	2.7	276	流紋岩	S-2, 扁平礫の両端に打痕。全体が滑らかに磨面されており、特に平坦面に顕著。片方の平坦面は砥石として利用されている可能性もある。被熱し、燻?付着。また、黒く焦げている部分もあり、一部に光沢の残るところもある。		75
78-01	A区	6住	床面	台石	92.2	45.0	16.4	1,009g	安山岩	縦造削片付着。		130
78-02	A区	6住	カマド焼	砥石	14.4	11.8	3.5	916	凝灰岩	S-47, 線隆。被熱。縦面に打痕。7号住居(No.30)と接合。		27
78-03	A区	6住	床面	燻石	-	-	-	(36)	凝灰岩	S-7, 被熱。台石片か。		8
78-04	A区	6住	床面	舟石片	(11.3)	(7.8)	(3.0)	(427)	石質安山岩	S-12, 被熱。縦隆状物質付着。平坦面平滑で、線条隆が顕著に見られる。No.26と接合。		16
78-04	A区	6住	床面	舟石片	(10.7)	(6.7)	(2.9)	(228)	石質安山岩	S-15, 被熱。No.18と接合。		26
82-12	A区	10住	床面	台石	17.8	9.2	13.1	4,138	安山岩	S-1, 被熱?。被熱。縦造削片付着。		32
83-01	A区	10住	カマド	砥石	21.0	14.1	14.0	2,170	細粒凝灰岩	S-2, 大型。完形。縦打痕顕著にあり、深く鋭い線条隆も多数見られる。		33
86-03	A区	2号土坑	覆土	石礫	2.7	1.8	0.5		埴貫瓦片A	97年度報告(256版)		
88-01	A区	16号土坑	灰層直上	砥石	6.2	5.8	(5.4)	(212)	流紋岩	被熱。片面に磨い打痕。やや軟質の礫。		77
89-02	B区	2号礎石	覆土	燻入礫	7.9	6.4	5.1	358	安山岩	器面ツラツク。		78
90-01	A区	ⅡJ-135	I	石礫	3.9	1.2	0.7	2.9	埴貫瓦片A	T基。完形。		174
90-02	A区	ⅡE-118	I	石礫	(2.6)	1.3	0.4	(1.2)	埴貫瓦片A	基礎部欠損。		66
90-03	A区	ⅡK-131	I	石礫	(2.6)	(1.1)	(0.6)	(1.2)	埴貫瓦片A	基礎部欠損。		175
90-04	A区	ⅡI-126	I	石礫	3.4	1.5	0.7	3.1	高橋石			215
90-05	A区	ⅡD-131	I	石礫	3.5	0.9	0.3	0.7	埴貫瓦片A	完形。先端部磨耗。		196

調査号	区	出土地	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	備考	整理	
90-06	A区	SI-31	Ⅰ	石匙	8.5	2.5	0.6	14.7	瑠璃質頁岩	平成12年度調査。鏡面。	195	
90-07	A区	IN-102	Ⅰ	石匙	7.1	3.4	1.4	30.4	瑠璃質頁岩	刃部に光沢。刃部に光沢。鏡面。	170	
90-08	A区	IM-100	Ⅰ	石匙	8.6	4.2	1.6	54.3	瑠璃質頁岩	両面加工。刃部に光沢。鏡面。	161	
90-09	A区	IR-119	Ⅰ	スレイバー	9.4	3.5	2.2	72.8	瑠璃質頁岩	厚みのある斜片を急斜度調整。	173	
90-10	A区	SI-32	Ⅰ	磨土	スレイバー	3.7	2.8	1.2	20.1	瑠璃質頁岩	平成12年度調査。	213
90-11	A区	IM-103	Ⅰ	石フレイク	3.7	4.4	0.8	9.9	瑠璃質頁岩		167	
90-12	A区	IN-96	Ⅱ	スレイバー	3.2	4.2	1.2	15.5	瑠璃質頁岩	磨面は急斜度調整。刃部は標準的なリッジ構造。磨面。	165	
90-13	A区	IV-102	Ⅰ	スレイバー	4.1	6.9	1.7	37.1	瑠璃質頁岩	縁部に微凸型加工。	72	
90-14	A区	SH-128	Ⅰ	スレイバー	0.28	0.0	0.6	06.0	瑠璃質頁岩	破片。両面加工。石粒または石芯などの破片。	194	
90-15	A区	IG-131	Ⅰ	石フレイク	4.4	2.7	0.8	10.6	瑠璃質頁岩	縁部に微凸型調整。	176	
90-16	A区	IK-129	Ⅰ	フレイク	1.7	2.3	0.7	2.6	瑠璃質頁岩		192	
91-01	A区	SI-31	Ⅰ	コア	6.3	4.6	3.8	134.6	瑠璃質頁岩	平成12年度調査。	214	
91-02	A区	IQ-119	Ⅰ	磨製石斧	8.8	3.7	2.2	120.5	緑色結晶頁岩	磨製石斧。	127	
91-03	A区	SI-03	Ⅰ	磨製石斧	-	-	-	(23.3)	緑色結晶頁岩	刃部片	125	
91-04	A区	IG-122	Ⅰ	礫石	06.0	06.0	05.0	465.0	石英火山岩	約1/2破断。磨面平直。端部に打痕。	123	
91-05	A区	IN-76	Ⅰ	緑色結晶頁岩	09.0	09.0	4.7	0523	緑色結晶頁岩	約1/2破断。磨面平直。	122	
91-06	A区	SI-16	Ⅰ	磨土	08.0	08.0	2.6	31.2	安山岩	鏡面加工。片割面に磨面。	60	
92-01	B区	II-28	Ⅲ	石匙	5.5	5.2	1.1	25.7	瑠璃質頁岩	不整形の一端に基部作出。	90	
92-02	B区	II-30	Ⅲ	石匙	7.4	4.8	0.9	28.2	瑠璃質頁岩	縁部は両面。微凸調整。	71	
92-03	B区	IK-28	Ⅲ	石匙	4.2	2.4	0.9	7.5	瑠璃質頁岩	刃部に微凸加工。尖鋭状。	70	
92-04	B区	II-35	Ⅲ	スレイバー	3.8	2.1	1.0	6.8	瑠璃質頁岩	両面加工。	66	
92-05	B区	II-30	Ⅲ	スレイバー	5.8	4.3	1.4	26.4	瑠璃質頁岩	尖鋭状。片割加工。急斜度調整。	76	
92-06	B区	IG-21	Ⅲ	スレイバー	4.2	5.8	0.6	11.8	瑠璃質頁岩	ノッチあり。両面の両側に微凸加工。	68	
92-07	B区	II-22	Ⅲ	スレイバー	5.9	4.5	1.0	31.5	瑠璃質頁岩	片割。下部に基部作出。	101	
92-08	B区	IG-21	Ⅲ	石フレイク	2.6	4.6	0.8	15.2	瑠璃質頁岩	一端にリッジ。	67	
92-09	B区	II-26	Ⅲ	石フレイク	6.0	3.7	1.5	38.8	瑠璃質頁岩	片割縁にリッジ。	74	
92-10	B区	II-09	Ⅲ	スレイバー	3.8	3.6	0.9	12.7	瑠璃質頁岩	縁部に微凸調整。一部両面加工。	118	
92-11	B区	II-28	Ⅲ	石フレイク	2.2	2.7	0.9	6.9	瑠璃質頁岩	両面片割材。	75	
92-12	B区	IG-27	Ⅲ	スレイバー	5.9	4.0	1.3	25.6	瑠璃質頁岩	縁部に微凸の片割加工。	73	
92-13	B区	II-26	Ⅲ	スレイバー	7.5	3.3	1.1	29.3	瑠璃質頁岩	片割縁に連続する微凸調整。	69	
92-14	B区	II-25	Ⅲ	フレイク	3.4	2.9	0.8	8.2	瑠璃質頁岩	小石素材。両面片割。	105	
93-01	B区	IG-29	Ⅲ	コア	5.2	4.5	3.6	103.7	瑠璃質頁岩		94	
93-02	B区	IG-24	Ⅲ	磨製石斧	11.2	3.8	2.6	188.8	砂岩	磨面調整。刃部の一部破断(打痕)。定角式。	85	
93-03	B区	II-31	Ⅲ	磨製石斧	12.3	5.9	3.7	270.4	輝綠岩	打痕+窪み。端部に打痕。平面部(2面)に窪み。窪み。窪み。	100	
93-04	B区	II-19	Ⅲ	磨製石斧	10.9	8.2	5.4	628.7	安山岩	磨石+凹石。片割面に打痕。複数の窪み。窪み。窪みの両面はツルツルに磨面されている。破断。	83	
93-05	B区	II-36	Ⅲ	凹石	11.3	9.2	5.8	855.1	安山岩	片割に広く打痕。	115	
93-06	B区	II-24	Ⅲ	磨製石斧	09.2	5.0	3.7	272.2	安山岩	磨石+凹石。端部側面に打痕。平面部に窪み。	84	
93-07	B区	IK-32	Ⅲ	磨製石斧	5.7	5.2	3.2	134.0	玄武岩	磨石。扁平な打痕の両側に打痕が通る。	104	
93-08	B区	IK-32	Ⅲ	磨製石斧	20.2	4.2	3.8	438.2	輝綠岩	柱状磨製石斧。	103	
94-01	B区	II-28	Ⅲ	磨製石斧	13.0	9.1	4.0	608.9	輝綠岩	凹石。石皿片から石片利用。片割に大きな窪み。打痕の集合ではなく、表がれたような痕跡。破断。	92	
94-02	B区	II-35	Ⅲ	磨製石斧	10.6	6.5	4.3	323.3	砂岩	凹石。片割利用。	114	
94-03	B区	IG-28	Ⅲ	磨製石斧	13.4	6.6	3.6	375.1	輝綠岩	凹石。両面利用。	90	
94-04	B区	II-29	Ⅲ	磨製石斧	11.5	6.7	4.8	639.4	石英安山岩	凹石。両面利用だが、あまり磨まない。	93	
94-05	B区	II-64	Ⅲ	磨製石斧	12.4	9.1	5.8	794.2	安山岩	凹石。両面利用。端部に打痕。破断。	121	
94-06	B区	II-33	Ⅲ	磨製石斧	12.0	6.8	2.6	171.7	輝綠岩	凹石。両面に窪み。窪み。	109	
94-07	B区	東端表層	Ⅲ	磨製石斧	08.1	06.0	4.7	286.1	安山岩	凹石。約1/2破断。両面利用。	124	
94-08	B区	IK-30	Ⅲ	磨製石斧	7.9	7.7	3.7	197.3	輝綠岩	凹石。両面に深く大きい窪み。	98	
94-09	B区	IG-28	Ⅲ	磨製石斧	09.0	5.8	3.5	272.2	安山岩	凹石。両面利用。片割は打痕のみで磨まず。もう片割は複数の窪み。	91	
94-10	B区	II-29	Ⅲ	磨製石斧	15.3	3.8	3.9	278.4	安山岩	凹石。三角柱状磨の2面利用。あまり磨まない。	94	
94-11	B区	IG-29	Ⅲ	磨製石斧	13.9	5.1	4.3	376.5	石英安山岩	凹石。三角柱状磨の3面利用。あまり磨まない。破断。	95	
94-12	B区	II-36	Ⅲ	磨製石斧	13.6	7.5	3.7	414.5	輝綠岩	片割に浅い打痕による窪み。	116	
94-13	B区	II-32	Ⅲ	磨製石斧	12.3	4.1	3.6	254.4	安山岩	凹石。両面利用。	101	



## 羽口観察表

図番号	出土位置	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	内径(cm)	重さ(g)	備考	整理番号
19-6	第2号住居跡	床面	6.8	8.1	(4.6)	(3.3)		羽口9・14、先端部破片。	⑤
19-6	第2号住居跡	床面	11.6	6.2	(6.3)	3.3		羽口2・3・4、小破片。	⑤
19-7	第2号住居跡	床面	20.3	7.3	6.6	3.0		羽口12・16、モミ殻あり。	①
19-8	第2号住居跡	床面	17.2	6.5	6.3	2.8		羽口1。	⑤
19-9	第2号住居跡	床面	20.5	7.6	(5.1)	(3.7)		羽口11、モミ殻あり。	⑤
23-2	第4号住居跡	カマド床底	(24.6)	11.2	7.6	3.3	1534.1	羽口1。大型、断面曲線型、器面あれている。	4
78-5	第1号鉄剣遺構	床面、ビット2	18.5	7.4	7.0	3.3	757.9	羽口1～4・6、ほぼ完整、ナゲ輪形。	3
78-6	第1号鉄剣遺構	伊	(10.2)	6.9	(3.3)		133.1	羽口1・2、先端部。	2
83-2	第2号鉄剣遺構	床面	(8.4)	6.3	(6.1)	(2.9)	164.0	ア-5・6、断面破片、モミ殻2個あり。	1
83-3	第2号鉄剣遺構	床面	(8.4)	(5.5)			164.0	ア-1、後葉口部分の破片、モミ殻あり。	

## 土製品・石製品観察表

図番号	出土位置	層位	種類	重さ(g)	備考	整理番号
6-1	第26号住居跡		土製	95.0		21
6-2	第26号住居跡	床面	円形刺板	17.9	土製品2、断面観察済。	37
18-19	第2号住居跡	堆積土	土製刺板	20		20
18-20	第2号住居跡	堆積土	土製紡錘車	22.8	紡輪部分	⑤
55-11	第17号住居跡	床面	土玉	0.9	玉1、真鍮孔なし。	2
55-12	第17号住居跡	床面	土玉	0.5	玉2、真鍮孔なし。	3
55-13	第17号住居跡	堆積土	土玉	2.9	真鍮孔あり。	4
55-14	第17号住居跡	堆積土	土玉	5.9	真鍮孔なし。	6
55-15	第17号住居跡	堆積土	土玉	4.2	ア-33、真鍮孔なし。	5
55-16	第17号住居跡	堆積土	土玉	4.5	穴あり。	9
55-17	第17号住居跡	堆積土	土玉	3.9	ア-34。	8
58-4	第18号住居跡	堆積土	土玉	0.7	穴なし。	12
58-5	第18号住居跡	堆積土	土玉	0.7	穴あり。	11
58-6	第18号住居跡	堆積土	土玉	1.4	穴あり。	10
58-7	第18号住居跡	堆積土	土玉?	7.4	穴あり、上縁部。	13
60-11	第19号住居跡	床面	土製紡錘車	64.5		17
60-13	第19号住居跡	穴底	土玉	1.4	玉3、穴あり。	⑤
60-14	第19号住居跡	床面	土玉	1.3	玉2、穴あり。	⑤
60-15	第19号住居跡	堆積土	土玉	1.7	穴あり。	14
61-2	第21号住居跡	堆積土	不明	2.1		18
67-4	第23号住居跡	堆積土	土製紡錘車	19.5	1/2。	19

## 鉄製品観察表

図番号	出土位置	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	整理番号
18-16	第2号住居跡	堆積土	ピンセット状鉄製品	5.4	1.1	0.5	4.4	欠損。	1
18-17	第2号住居跡	堆積土	棒輪	4.2	0.5	0.4	1.6	欠損。	16
30-11	第9号住居跡	床面	刀子	4.4	2	0.4	1.6	ア-3。欠損。破片2枚が付着。	18
30-12	第9号住居跡	床面	筒状鉄製品	3.7	1.7	0.9		ア-3。幅9mm、厚さ2mmの鉄板を覆状にしたもの、刀莖長?	19
33-10a	第11号住居跡		破片					ア-1。	15
33-10b	第11号住居跡		不明	4.1	1	1.2	10	ア-3。2つの破片。	5
38-5	第12号住居跡	床面	棒輪?	6	0.5	0.3	2.4	ア-4。破片。	6
41-7	第13号住居跡	床下	手鏃	8.3	1.8	0.3	8.2	即住跡、ア-1。	7
51-3	第16号住居跡	床面	刀子	15.4	1.4	0.4	14.5	ア-1。柄部に木質付着。先端部欠損。	8
58-11	第18号住居跡	堆積土	棒状武器	5.6	1.9	1.1	43.4	1。欠損。	9
60-12	第19号住居跡	床下	刀子	22.6	1.5	0.5	26.3	ア-1。木質付着。	10
61-1	第21号住居跡		鉄片	6.8	3.5	2.2	49.8	ア-1。	11
78-7	第1号鉄剣遺構	床面	棒状武器	17.2	1.6	0.8	38.6	ア-37。完整?	2
79-6	第1号鉄剣遺構	床下	棒輪	6.2	0.3	0.3	1.2	ア-38。欠損。	3
79-7	第1号鉄剣遺構	床下	棒輪?	7.6	0.6	0.4	4.8	ア-39。欠損。	4



A区調査風景（西→）



A区調査風景（北西→）



B区調査風景（西→）

写真1 調査風景



A区調査風景 (西→)



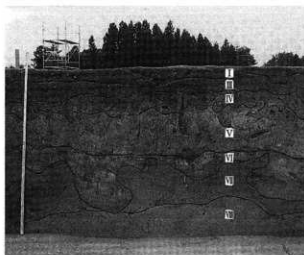
A区調査風景 (西→)



B区調査風景 (西→)



基本層序B区: IG-30グリッド



基本層序A区: II G-30グリッド



基本層序AK: I J-98グリッド

写真2 調査風景、基本層序



第20号住居跡（南→）



第26号住居跡（東→）



第26号住居跡遺物出土状況（南→）



遺物出土状況（拡大）



遺物出土状況



第26号住居跡1号石器集積



第26号住居跡2号石器集積

写真3 縄文時代の住居跡



第2号住居跡 (西→)



第2号住居跡カマド (西→)



第2号住居跡2号カマド (西→)



第3号・4号住居跡 (西→)



第3号住居跡カマド (西→)



第3号住居跡 (西→)



同上



第3号住居跡敷板検出状況 (西壁) (東→)

写真4 第2号・3号住居跡



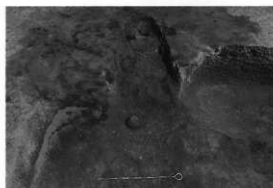
第4号住居跡 (南→)



第4号住居跡カマド遺物出土状況 (南→)



第5号住居跡 (西→)



第5号住居跡カマド (西→)



第7号・8号住居跡 (西→)



第7号・8号住居跡 (北→)



第7号住居跡カマド確認状況 (西→)



同左完備 (西→)



同上、遺物出土状況 (北→)

写真5 第4号・5号、7号・8号住居跡



第8号住居跡（西→）



第7号・8号住居跡（北→）



第8号住居跡カマド（西→）



第8号住居跡カマド（北→）



第9号住居跡（西→）



第9号住居跡遺物出土状況（北→）



第9号住居跡カマド（西→）



同左

写真6 第8号・9号住居跡



第11号住居跡炭化材検出状況（西→）



炭化材検出状況（西→）



同左部分（西→）



完掘（西→）



カマド煙出孔遺物出土状況（南→）



カマド確認状況（西→）



同左完掘（西→）



同左

写真7 第11号住居跡





第12号住居跡 (西→)



遺物出土状況 (西→)



ピット6 (南→)



第12号住居跡カマド (南→)



第12号住居跡カマド (西→)



同上



カマド左袖、芯材の状況 (西→)

写真8 第12号住居跡



第12号住居跡拡張前 (西→)



第12号住居跡Bカマド  
(西→)



第12号住居跡Bカマド  
(西→)



第12号住居跡Cカマド煙道部遺物出土状況 (南→)



第13号住居跡 (南→)



第13号住居跡 (西→)



第13号住居跡 (拡撮前:西→)



同左旧カマド (西→)



第14号住居跡 (西→)



同上カマド確認状況 (北→)



同上 (西→)



同左拡大 (西→)



カマド完備 (西→)



同左

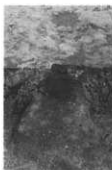
写真10 第13号・14号住居跡



第15号住居跡 (西→)



第15号住居跡炭化材出土状況 (西→)



同左カマド検出状況  
(西→)



同左完掘 (西→)



同左完掘 (西→)



第16号住居跡 (北→)

写真11 第15号・16号住居跡



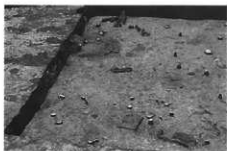
第16号住居跡 (西→)



遺物出土状況 (北→)



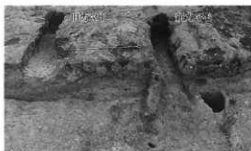
遺物出土状況、部分 (北→)



遺物出土状況、部分 (北→)



東側カマド確認状況 (西→)



東新・旧カマド (西→)



東新カマド (西→)



同左



同左

写真12 第16号住居跡



第17号住居跡完掘 (西→)



遺物出土状況 (南→)



カマド (西→)



カマド確認状況 (西→)



同左完掘 (西→)



同左

写真13 第17号住居跡



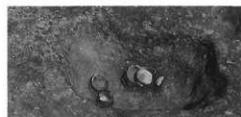
第18号住居跡 (西→)



第19号住居跡 (西→)

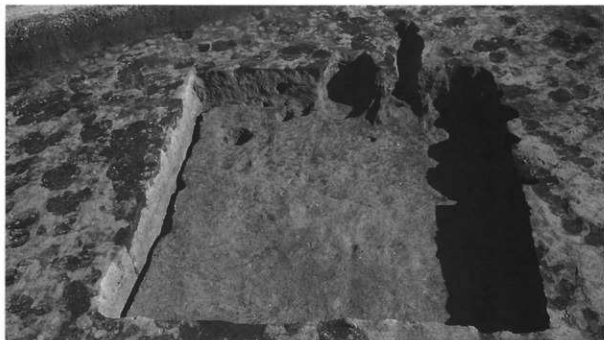


同上遺物出土状況 (南→)



同上ビット1遺物出土状況 (西→)

写真14 第18号・19号住居跡



第21号住居跡 (西→)



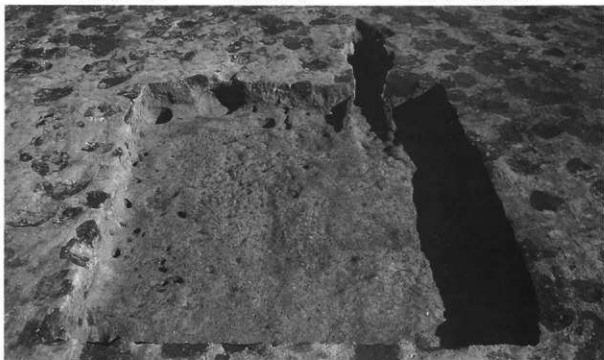
同上カマド遺物出土状況



同左発掘 (西→)



同上カマド袖部の小ピット



第22号住居跡 (西→)

写真15 第21号・22号住居跡





第22号住居跡炭化材検出状況(東→)



炭化材検出状況(北→)



炭化材検出状況(北→)



カマド(西→)



カマド(西→)



第23号住居跡（南→）



第25号住居跡（西→）



同上カマド遺物出土状況（西→）



同上カマド（西→）

写真17 第23号、25号住居跡



遺物出土状況（西→）



同上拡大



完掘（北→）

写真18 第1号鉄関連遺構1



完備（北東→）



鍛冶炉と周辺（北東→）



鍛冶炉（北→）



Aカマド（西→）



Bカマド（西→）

写真19 第1号鉄関連遺構2



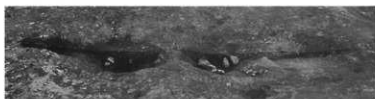
Dカマド確認状況 (西→)



Dカマド完掘 (西→)



ピット1セクション (西→)



鍛冶炉セクション (東→)



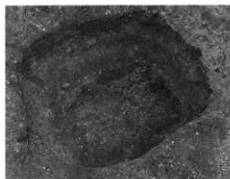
鍛冶炉 (東→)



ピット1完掘 (北→)



ピット2セクション (西→)



ピット2完掘 (西→)



ピット3完掘 (東→)



ピット13 (西→)

写真20 第1号鉄関連遺構3



完圃 (西→)



完圃 (北→)

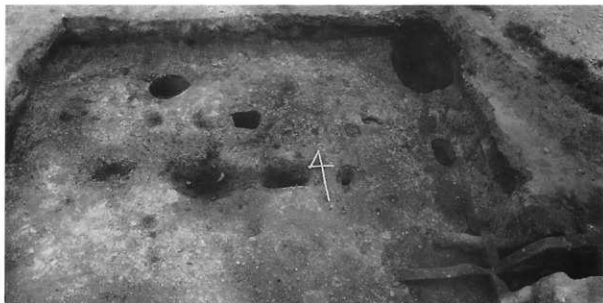


カマド完圃 (西→)

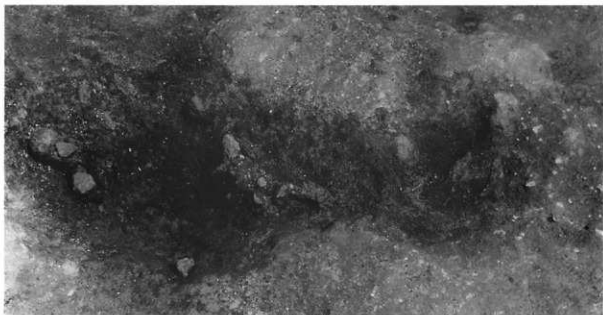


完圃 (西→)

写真21 第2号鉄関連遺構 1



鍛冶炉とその周辺 (南→)

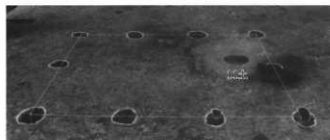


鍛冶炉 (南→)

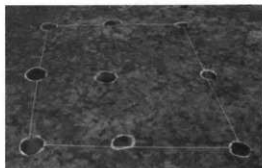


鍛冶炉 (北→)

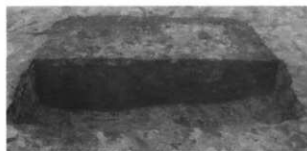
写真22 第2号鉄関連遺構2



第1号掘立柱建物跡（南→）



第2号掘立柱建物跡（西→）



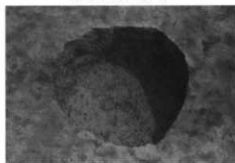
第3号土坑セクション（南→）



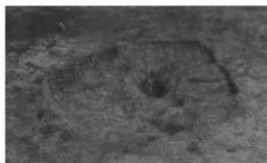
第2号土坑（東→）



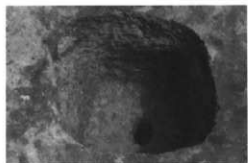
第3号土坑完掘（南→）



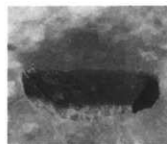
第4号土坑完掘（西南→）



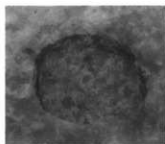
第5号土坑完掘（南→）



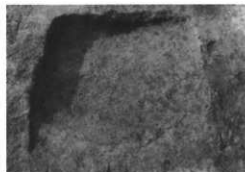
第6号土坑完掘（西南→）



第7号土坑セクション（南→）



第7号土坑完掘（南→）



第8号土坑完掘（南→）

写真23 掘立柱建物跡、土坑 1





第9号土坑セクション (南→)



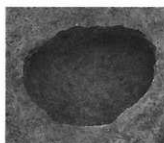
第9号土坑完掘 (南→)



第10号土坑セクション (南→)



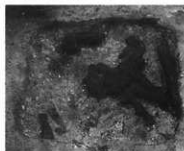
第10号土坑完掘 (南西→)



第11号土坑完掘 (西→)



第12号土坑セクション (西→)



第12号土坑完掘 (西→)



第13号土坑セクション (西→)



第13号土坑完掘 (北→)



第14号土坑完掘 (南→)

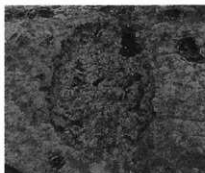


第14号土坑セクション (南→)

写真24 土坑 2



第15号土坑セクション (南→)



第15号土坑完掘 (南→)



第16号土坑炭化材出土状況 (北→)



第17号土坑セクション (西→)



第16号土坑完掘 (北→)



第17号土坑完掘 (東→)



第18号土坑セクション (東→)



第20号土坑セクション (南→)



第2号焼土遺構検出状況 (北→)

写真25 土坑3、焼土遺構

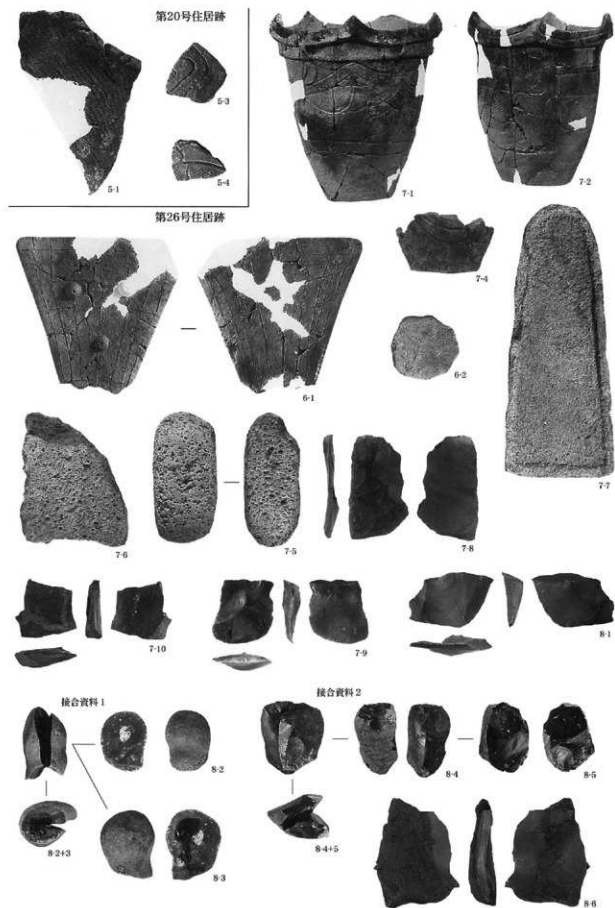


写真26 第20号、26号住居跡出土遺物 1

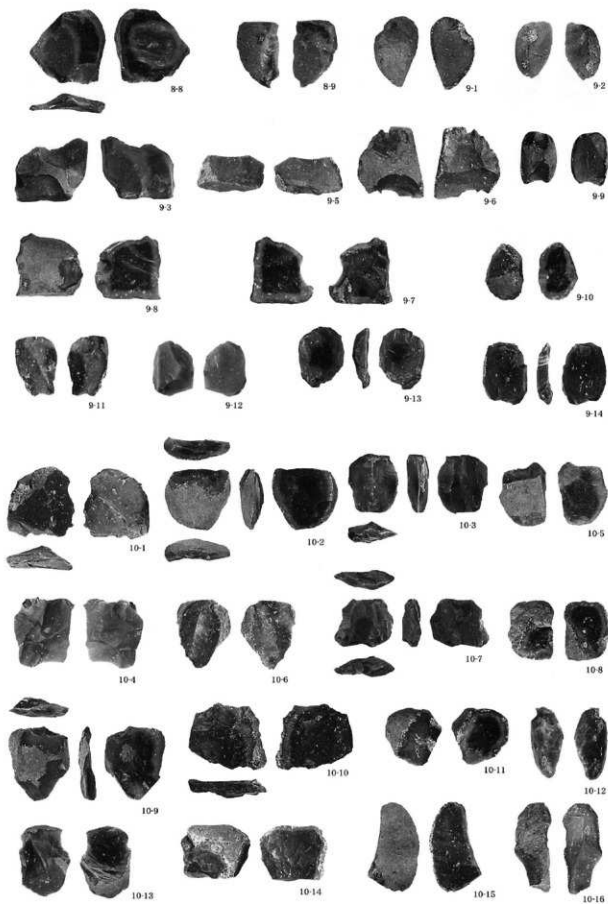


写真27 第26号住居跡出土遺物2

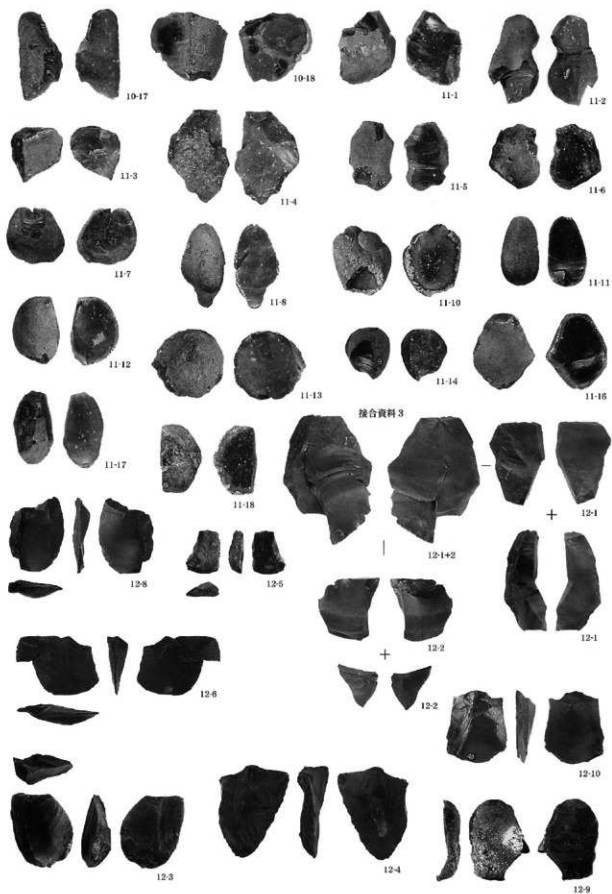
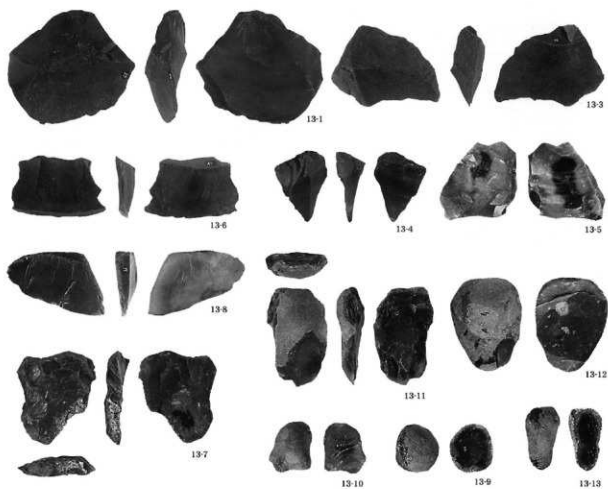


写真28 第26号住居跡出土物 3



第2号住居跡

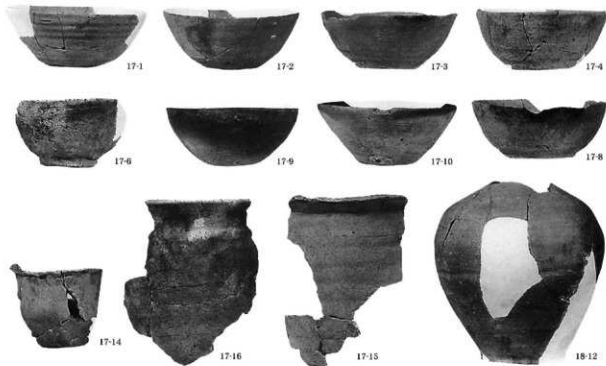


写真29 第26号住居跡出土遺物4、第2号住居跡出土遺物1

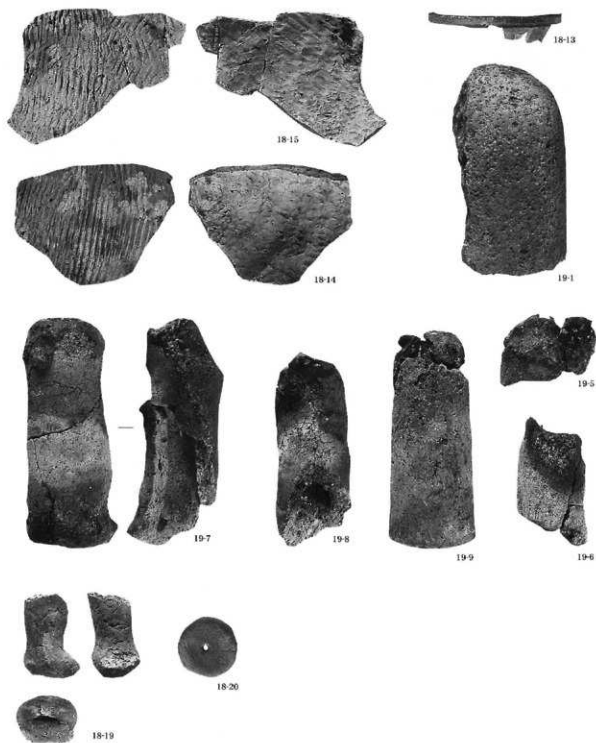


写真30 第2号住居跡出土遺物2

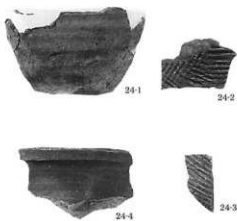
第3号住居跡



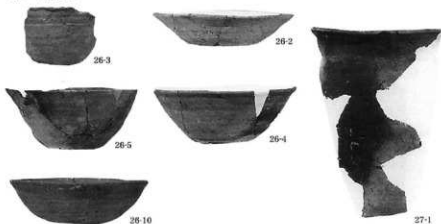
第4号住居跡



第5号住居跡



第7号住居跡



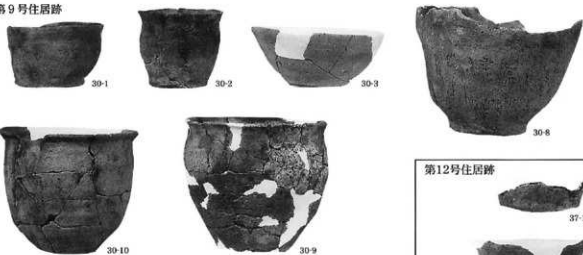
第8号住居跡



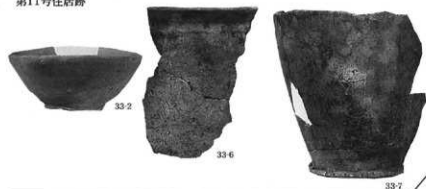
写真31 第3号～5号、7号住居跡出土遺物



第9号住居跡



第11号住居跡



第12号住居跡

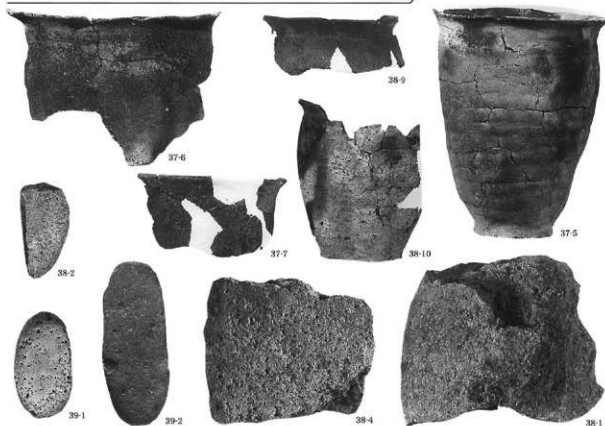


写真32 第11号・12号住居跡出土遺物

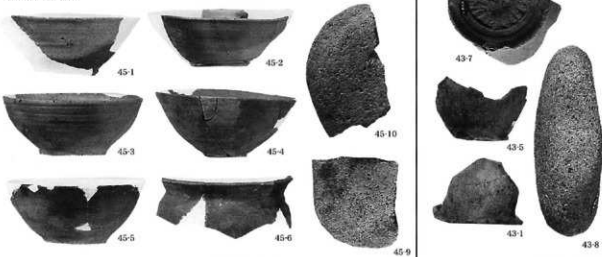
第13号住居跡



第14号住居跡



第15号住居跡



第16号住居跡

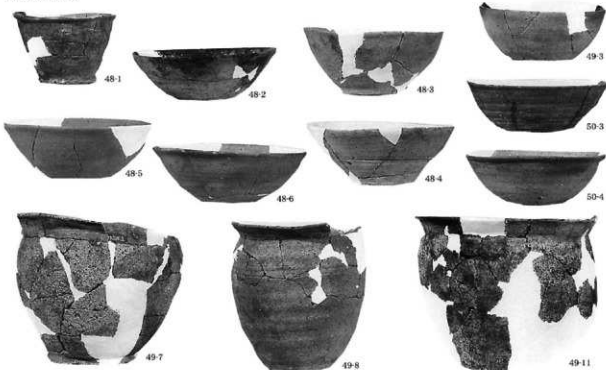
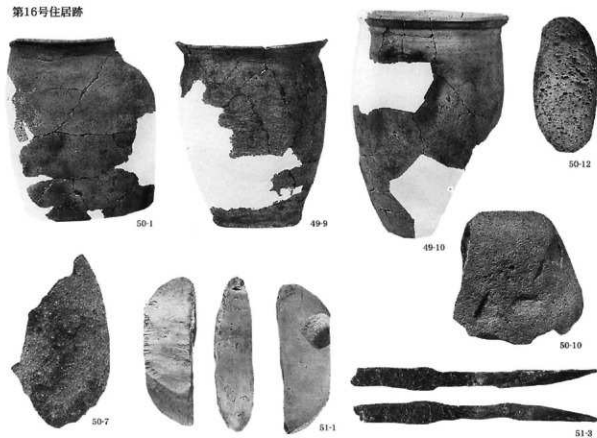


写真33 第13号~16号住居跡出土遺物

第16号住居跡



第17号住居跡

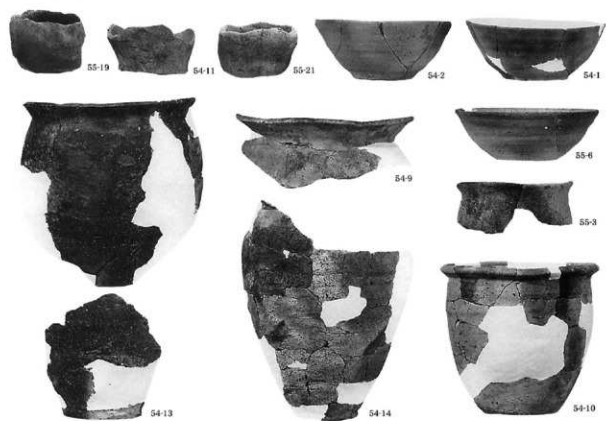
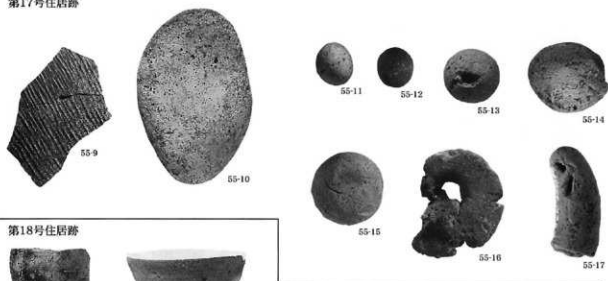


写真34 第16号・17号住居跡出土遺物

第17号住居跡



第18号住居跡

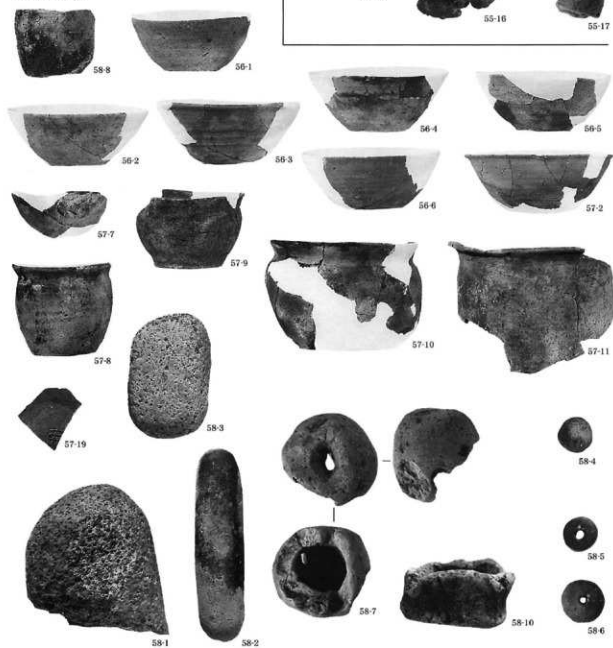


写真35 第17号・18号住居跡出土遺物

第19号住居跡



第21号住居跡



第22号住居跡



第23号住居跡

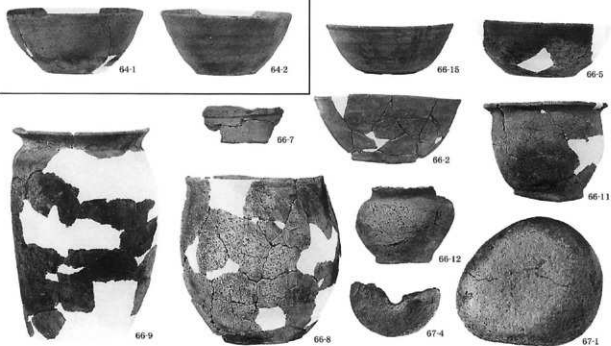


写真36 第19号、21~23号住居跡出土遺物

第24号住居跡



68-2



70-3

第25号住居跡



70-1



70-2



71-1



70-12



76-2

第1号鉄関連遺構



76-4



76-8



76-13



76-3



79-4



77-2



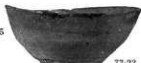
77-5



79-1



77-15



77-22



77-1



77-4



77-16



77-18



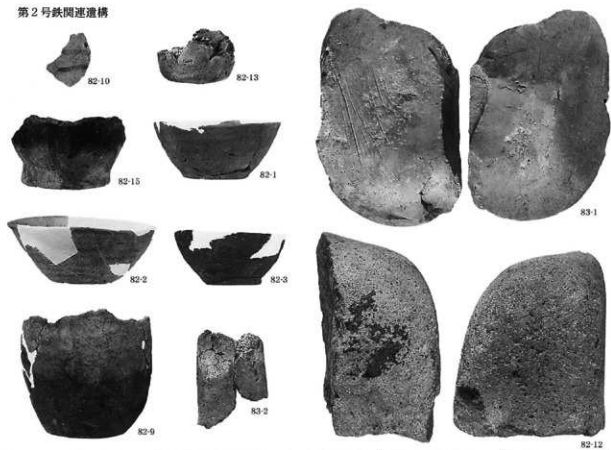
78-7



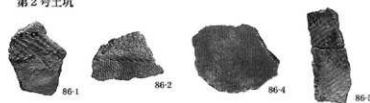
78-1

写真37 第24号・25号住居跡、第1号鉄関連遺構出土遺物

第2号鉄関連遺構



第2号土坑



第9号土坑



第18号土坑



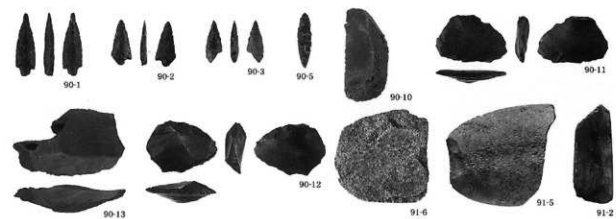
第12号土坑



遺構外出土石器A区



写真38 第2号鉄関連遺構・土坑出土遺物、遺構外出土石器1



遺構外出土石器B区



写真39 遺構外出土石器 2





鈍型滓 (第2号住居跡, Fe-1)



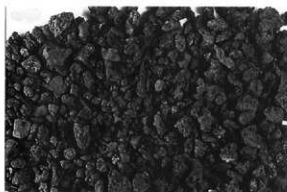
鉄滓 (第2号住居跡, F-6)



鈍型滓 (第2号住居跡, F-39)



鉄滓 (第3号住居跡, Fe-1)



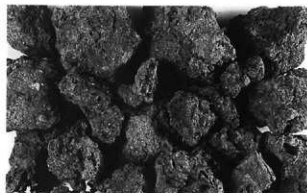
第2号住居跡出土



鉄滓 (第2号住居跡)

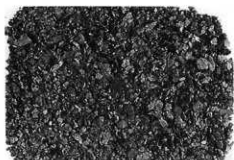


砂鉄 (第16号住居跡)



鉄滓 (第17号住居跡)

第1号鉄閃速遺構



鍛造剥片 (鍛冶9)



(Fe-36)

(F-15)



(F-15)



(Fe-2)



(Fe-37)



第2号鉄閃速遺構



鍛造剥片 (鍛冶9)



小塊状鉄滓 (鍛冶9)



Fe-2



Fe-9



Fe-9



Fe-11 (2点)



堆積土 (4点とも)



## 報告書抄録

書名	安田(2)遺跡Ⅱ							
副書名	東北縦貫自動車道青森八戸線(青森～青森)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第303集							
編著者名	島山 昇							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15 TEL017-788-5701							
発行年月日	西暦2001年3月16日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
安田(2)遺跡Ⅱ	青森県青森市大字安田字近野1-15 ほか	02201	01016	40° 47′ 40.0″	140° 42′ 24.6″	19990420 ～ 19991029	20,000	東北縦貫自動車道青森八戸線(青森～青森)建設事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
安田(2)遺跡Ⅱ	集落跡 集落跡	縄文時代後期 弥生時代 平安時代	住居跡2軒(縄文後期) 住居跡23軒(平安時代) 鉄関連遺構 2軒 掘立柱建物跡 2棟 土坑 22基 焼土遺構 3基 溝状土坑 1基		縄文時代前～晩期の土器、石器・土製品 弥生時代の土器 平安時代の土師器、須恵器、鉄器、鉄滓		平安時代の鉄生産に関わる集落跡	

青森県埋蔵文化財調査報告書 第303集

## 安田(2)遺跡Ⅱ

—東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）  
建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2001年3月16日  
発行 青森県教育委員会  
編集 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042  
青森市大字新城字天田内152-15  
TEL017-788-5701  
印刷所 株式会社 三栄企画印刷  
〒038-0121  
青森市妙見3-2-19  
TEL017-738-0040  
FAX017-738-0880





活彩あomorい  
—輝くあomorい新時代—